

第九條 代用私立小學校授業科規則ハ府縣知事之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ
代用私立小學校授業科ノ納付上ニ關シ設立者ノ取計ニ異存アル者ハ市町村長若クハ町村組合長
ノ處分ヲ請フコトヲ得

第十條 代用私立小學校設立者ハ第二條第三ノ定員ニ滿タサル限りハ正當ノ理由ナクシテ第二條
第二ノ區域内ノ兒童ノ入學ヲ拒辭スルコトヲ得ス

代用私立小學校ノ入學上ニ關スル設立者ノ取計ニ就キテハ前條第二項ヲ適用ス

第十一條 監督官廳ハ私立小學校ノ代用ヲ以テ學政上ニ必要ナラス者クハ不利ナリト認定スルト
キハ其代用ヲ解除セシムヘシ

第十二條 市町村及町村學校組合ハ其代用ヲ解除セントスルトキハ代用私立小學校設立者ト協議
ノ上監督官廳ノ許可ヲ受クヘシ若シ其協議整ハサルトキハ監督官廳ノ處分ヲ請フコトヲ得

代用私立小學校設立者ハ其代用ヲ解除セントスルトキハ市町村若ハ町村學校組合ト協議ノ上市
内ニ在ル學校ニ就キテハ府縣知事町内ニ在ル學校ニ就キテハ郡長ノ許可ヲ受クヘシ若シ其協議
整ハサルトキハ府縣知事若クハ郡長ノ處分ヲ請フコトヲ得

本條ノ許可又ハ處分ヲ請フハ三箇月前ニ於テスヘシ但特別ノ事情アル場合ニ於テハ此限ニアラ
ス

第十三條 代用私立小學校設立者ハ先ツ代用解除ノ許可ヲ經ルニアラサレハ其學校ヲ廢止スルコ
トヲ得ス

第十四條 府縣知事ハ此規則中ノ條規ニヨリ難キ場合ニ於テハ文部大臣ノ指揮ヲ受ケ特別ノ處分
ヲナスコトヲ得(明治二十四年文部省令第十七號ヲ以テ本條追加)

實業補習學校規程

(明治二十六年十一月文部省令第十六號)

實業補習學校規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

實業補習學校規程

第一條 實業補習學校ハ諸般ノ實業ニ從事シ又ハ從事セントスル兒童ニ小學校教育ノ補習ト同時
ニ簡易ナル方法ヲ以テ其ノ職業ニ要スル知識技能ヲ授クル所トス

第二條 實業補習學校入學者學力ノ程度ハ尋常小學校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ但尋常小學校
卒業ノ者ニアラサルモ學齡ヲ過キタル者ニ限り實業補習學校ノ教科ノ全部又ハ一部ノ教授ヲ受
タル爲ニ特ニ學校長ノ許可ヲ得テ入學スルコトヲ得

實業補習學校ニ於テハ男女ヲ混同スルコトヲ得ス

第三條 實業補習學校ハ尋常小學校又ハ高等小學校ニ附設スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ其ノ學校
ノ教授ヲ妨ケサル限りハ校舍及備品器具ヲ使用セシムルコトヲ得

第四條 實業補習學校ノ教科目ハ修身、讀書、習字、算術及實業ニ關スル科目トス但修身ハ讀書ニ
附帶シテ教授スルコトヲ得

第五條 實業補習學校ノ實業ニ關スル教科目ハ左ニ掲クル事項ヨリ選擇シ又ハ便宜分合シテ之ヲ
定ムヘシ

- 一 工業地方ニ於テハ圖畫、模型、幾何、物理、化學、重學、工藝意匠、手工ノ類
- 二 商業地方ニ於テハ商業書信、商業算術、商品、商業地理、簿記、商業ニ關スル習慣及ヒ法令ノ
大略、商業經濟、外國語ノ類

三 農業地方ニ於テハ或ハ農業大意或ハ耕耘、害蟲、肥料、土壤、排水、灌漑、農具、樹藝、家畜、養蠶、森林、農業帳簿、丈量ノ類

前項ノ外水産、機織、刺繡其他或職業ノ爲ニ便宜其ノ教科目ヲ定ムルコトヲ得
第六條 讀書、習字、算術ノ各教科目ハ其ノ學校ニ於テ授クル所ノ程度以上ノ學力ヲ有スル生徒ニ對シ之ヲ課セサルコトヲ得

實業ニ關スル教科目ハ生徒各自ノ志望ニ依リ一科目若ハ數科目ヲ撰擇專修セシムルコトヲ得

第七條 實業補習學校ニ於ケル授業ハ總テ實業ニ適切ニシテ應用ニ便ナラシメンコトヲ要ス

第八條 實業補習學校ノ修業年限ハ三箇年以内トス

第九條 實業補習學校ハ日曜日又ハ夜間タリトモ便宜教授時間ヲ設クルコトヲ得

第十條 實業補習學校ハ土地ノ情況ニ應シ季節ヲ限リ教授スルコトヲ得
第十一條 實業補習學校ノ教員ハ小學校教員又ハ其ノ資格アル者又ハ相當ノ普通教育ヲ受ケ實業ノ知識又ハ經驗ヲ有シ地方長官ノ許可ヲ得タル者ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第十二條 實業補習學校ノ教科目、修業年限、教授ノ時間及季節ヲ定ムルニハ市町村立ニ係ルモノハ市參事會町村長(又ハ之ニ準スヘキ者)ニ於テ、私立ニ係ルモノハ設立者ニ於テ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ

第十三條 市町村立實業補習學校ニ於テハ實業又ハ教育ニ經歷アル者及其ノ學校ノ設立維持ニ功勞アル者ヲ以テ商議員トシ其ノ學校ニ關スル事件ヲ商議セシムルコトヲ得

第十四條 市町村立實業補習學校ニ於テ授業料ヲ徵收スルト否トハ市町村ノ便宜タルヘシ

簡易農學校規程 (明治二十七年七月文部省令第十九號)

簡易農學校規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

簡易農學校規程

第一條 簡易ナル方法ニ依リ農事教育ヲ施サントスル者ハ此ノ規程ニヨルヘシ

第二條 簡易農學校ノ學科ハ算術、物理化學博物ノ大要、耕種、園藝、肥料、土壤、排水、灌漑、害蟲、養畜、農産製造、氣象、農業工事、農業經濟ノ類トシ地方ノ情況ニ依リ斟酌シ又ハ併合シテ教授スルヲ要ス又水産、森林、養蠶、獸醫ノ科目ヲ加フルコトヲ得

第三條 簡易農學校ハ農隙又ハ其他便宜ノ時期ヲ選ミ之ヲ開設スルコトヲ得

地方ノ狀況ニ依リ必要ノ各地ニ分教場ヲ設置シ巡迴教授ノ方法ニヨリテ教授ヲナスコトヲ得

第四條 簡易農學校ニ入學スル生徒ハ年齢十四年以上トス

第五條 簡易農學校ニ於テハ農業者又ハ農事ニ篤志ナル者ヲ以テ商議員トナシ其ノ學校ニ關スル事件ヲ商議セシムルコトヲ得

第六條 簡易農學校ニ於テハ授業料ヲ徵收スルト否トハ各地方ノ便宜タルヘシ

第七條 水産養蠶獸醫ヲ專修スル簡易學校ハ此ノ規程ニ準スヘシ

徒弟學校規程 (明治二十七年七月文部省令第二十號)

徒弟學校規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

徒弟學校規程

第一條 徒弟學校ハ職工タルニ必要ナル教科ヲ授クル所トス

第二條 徒弟學校入學者ノ資格ハ年齡十二年以上及尋常小學校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ但尋常小學校卒業ノ者ニアラサルモ特ニ學校長ノ許可ヲ得テ入學スルコトヲ得

徒弟學校ニ於テハ男女ヲ混同スルコトヲ得ス

第三條 徒弟學校ハ尋常小學校又ハ高等小學校ニ附設スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ其ノ小學校ノ教授ヲ妨ケサル限ハ校舍及備品器具ヲ使用セシムルコトヲ得

第四條 徒弟學校ノ教科目ハ修身、算術、幾何、物理、化學、圖畫及職業ニ直接ノ關係アル諸教科目並實習トス

前項ノ教科目ハ修身ヲ除ク外便宜取捨撰擇シ又ハ隨意科トスルコトヲ得但實習ハ設備上又ハ其ノ他ノ關係ニ依リ學校ニ於テ教授スルニ不便ナル職業ニ限り之ヲ缺クコトヲ得 (明治二十九年文部省令第一號ヲ以テ本項改正)

第五條 徒弟學校ニ於ケル教科ハ一種又ハ數種ノ職業ニ就テ之ヲ定メ若ハ數種ノ職業ニ共通シテ之ヲ定ムヘシ

第六條 尋常小學校ヲ卒業セスシテ入學ノ許可ヲ得タル者ニハ本科ノ外讀書、習字ヲ課スヘシ又作文ヲ加フルコトヲ得

尋常小學校卒業ノ者ト雖其ノ志望ニ依リ讀書、習字、作文ノ一科目又ハ數科目ヲ授クルコトヲ得本條ノ場合ニ於テ修身ハ讀書ニ附帶シテ之ヲ教授スルコトヲ得

第七條 徒弟學校ノ修業年限ハ六箇月以上四箇年以下トス

第八條 徒弟學校ハ日曜日又ハ夜間タリトモ便宜教授時間ヲ設クルコトヲ得

第九條 徒弟學校ハ土地ノ情況ニ應シ季節ヲ限リ教授スルコトヲ得

第十條 徒弟學校ノ教員ハ文部大臣ニ於テ工業教員タルニ適當ナリト認ムル者又ハ小學校教員ノ資格アル者又ハ相當ノ普通教育ヲ受ケ職業上ノ知識又ハ經驗ヲ有シ地方長官ノ許可ヲ得タル者ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第十一條 徒弟學校ニ於テ教科用圖書ヲ用フル場合ニハ修身、讀書、習字ニ係ルモノハ尋常小學校高等小學校補習科又ハ實業補習學校用トシテ文部大臣ノ檢定ヲ經タルモノタルヘシ其ノ他ノ教科目ニ係ルモノハ檢定ヲ經ルノ限ニ在ラス

第十二條 徒弟學校ノ教科用圖書ハ府縣ニ於ケル審査探定ヲ要セス各學校長ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十三條 徒弟學校ノ教科目修業年限教授時間及季節ヲ定ムルニハ府縣立ニ係ルモノハ地方長官ニ於テ文部大臣ノ許可ヲ受クヘク郡立ニ係ルモノハ郡長ニ於テ市町村立ニ係ルモノハ市參事會町村長(又ハ之ニ準スヘキ者)ニ於テ私立ニ係ルモノハ設立者ニ於テ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ (同上)

第十四條 府縣郡市町村立徒弟學校ニ於テハ實業又ハ教育ニ經歷アル者及其ノ學校ノ設立維持ニ功勞アル者ヲ以テ商議員トシ其ノ學校ニ關スル事件ヲ商議セシムルコトヲ得 (同上)

第十五條 府縣郡市町村立徒弟學校ニ於テ授業料ヲ徵收スルト否トハ府縣郡市町村ノ便宜タルヘシ (同上)

第十六條 女子ニ刺繡、機織及其ノ他ノ職業ヲ授クル爲ニ設クル所ノ女子職業學校ニシテ此規程ニ依ルモノハ徒弟學校ノ種類トス

●小學校補習科徒弟實業補習學校ハ體操ヲ加フルヲ得 (明治二十七年十二月文部省令第二十六號)

小學校補習科徒弟實業補習學校ニ於テハ便宜體操ヲ加フルコトヲ得

●徒弟學校設置方 (明治二十八年十二月勅令第六十號)

朕徒弟學校ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
徒弟學校ハ明治二十三年勅令第二百十五號小學校令第三十八條ニ依ルノ外府縣郡(郡制ヲ施行セサル郡ヲ除ク)ニ於テモ之ヲ設置スルコトヲ得
前項徒弟學校ノ設置廢止ハ其ノ府縣立ニ係ルモノハ文部大臣ノ許可ヲ受クヘク郡立ニ係ルモノハ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

●小學校ノ每週教授時間ノ制限

(明治二十四年十一月文部省令第十三號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第十五條ニ基キ小學校ノ每週教授時間ノ制限ヲ定ムルコト左ノ如シ

小學校ノ每週教授時間ノ制限

第一條 尋常小學校ノ每週教授時間ハ十八時以上三十時以下トス但本年(十一月)文部省令第十二號學級編制等ニ關スル規則第九條ノ場合ハ此限ニ在ラス

- 第二條 高等小學校ノ每週教授時間ハ二十四時以上三十六時以下トス
- 第三條 小學校補習科ノ每週教授時間ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ (明治二十七年二月文部省令第五號ニテ本項追加)
- 第四條 小學校ノ各教科目ノ每週教授時間ハ第一條第二條ノ範圍内ニ於テ府縣知事之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

●師範學校小學校及中學校教科用圖書檢定規則

(明治二十年五月文部省令第二號)

明治十九年(五月)文部省令第七號教科用圖書檢定條例ヲ廢シ師範學校小學校及中學校教科用圖書檢定ニ關スル規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

教科用圖書檢定規則

- 第一條 教科用圖書ノ檢定ハ師範學校令中學校令小學校令及教則ノ旨趣ニ合シ教科用ニ適スルコトヲ認定スルモノトス(明治二十五年三月文部省令第三號ヲ以テ本條改正)
- 第二條 圖書ノ出版者ハ該圖書ノ檢定ヲ文部省ニ請フコトヲ得
- 第三條 第二條ニ依リ檢定ヲ請フ者ハ圖書一種ニ付其目的トスル所ノ學校一種毎ニ該圖書二十部ノ定價ニ等シキ手数料及該圖書二部ヲ檢定願書ニ添ヘ地方廳ヲ經テ文部省ニ納ムヘシ但定價ヲ記載セサル圖書ニ就テハ手数料金十五圓ヲ納ムヘク又檢定ヲ得タル後定價ヲ増加シタルトキハ本文ノ例ニ準シ其差額ヲ追納スヘシ
- 第四條 第二條ニ依リ檢定ヲ請ビタル圖書中瑣少ノ修正ヲ加フレハ檢定ヲ與フルコトヲ得ヘシト

認ムルモノアルトキハ其廉ヲ檢定出願者ニ指示スルコトアルヘシ
 第五條 檢定シタル圖書ハ文部省ヨリ官報ヲ以テ其名稱、冊數、定價、目的トスル學校並學科ノ種類版權免許又ハ出版屆ノ年月日並該圖書ニ記載スル所ノ著譯者及出版者ノ族籍住所姓名等ヲ廣告スヘシ

第六條 檢定ノ效力ハ檢定ヲ得タル後修正ヲ加ヘタル圖書ニ及ハサルモノトス

第七條 第五條ニ依リ廣告シタル定價、版權免許又ハ出版屆ノ年月日並著譯者及出版者ノ族籍住所姓名等ニ異動ヲ生シ圖書中其記載方ヲ變更シタルトキ又ハ同條ニ依リ廣告シタル冊數ヲ變更シタルトキハ更ニ官報ヲ以テ其旨ヲ廣告スルニアラサレハ檢定ノ效力該圖書ニ及ハサルモノトス

第八條 檢定ヲ得サリシ圖書ノ出版者ノ願ニ依リテハ其圖書ノ檢定ヲ得サリシ事由ノ大要ヲ指示スルコトアルヘシ

第九條 檢定出願中ノ圖書若クハ檢定ヲ得タル圖書ニ修正ヲ加ヘ檢定ヲ請フ者ハ更ニ第三條ノ手續料ヲ納ムルコトヲ要セス

第十條 圖書ノ出版者ハ其檢定ヲ得タル圖書ニシテ第七條ノ變更アルニ會スルトキハ其事項ノ廣告ヲ文部省ニ請フヘシ

第十一條 檢定ヲ請ヒタル後ハ其願下ヲナストキ又ハ其他何等ノ事由アリトモ既ニ納メタル手續料ハ之ヲ還付セサルモノトス(明治二十五年四月文部省令第五號ヲ以テ本條ヲ改正ス)

第十二條 本規則ニ於テ修正ト稱スルハ圖書ノ名稱ヲ變更シ文章字句圖畫ヲ増減若クハ校訂シ又ハ枚數行數字體畫形ヲ變更シ又ハ紙質印刷ヲ粗惡ニシ又ハ註解附錄序跋ヲ加除若クハ變更スル

場合ヲ包含スルモノトス(明治三十年十月文部省令第十八號ヲ以テ本條改正)

第十三條 第四條ニ依リ圖書中修正スヘキ廉ヲ指示シタルトキハ六箇月間内ニ其廉ヲ修正シテ該圖書ノ檢定ヲ追願スヘシ此期限内ニ修正追願セサルトキハ該圖書ハ檢定ヲ與ヘス

第十四條 檢定ヲ得タル圖書ハ每冊見易キ所ニ明治何年何月何日文部省檢定濟何學校何學科用ノ文字ヲ記載スヘシ但小學校教科用圖書ニ在リテハ仍生徒用教師用ノ別ヲ附記スヘシ(明治二十八年五月文部省令第三號ニテ本條改正)

第十五條 檢定ヲ得サル圖書若クハ第六條第七條ニ依リ檢定ノ效力ノ及ハサル圖書ニ文部省檢定濟其他之ニ類スル文字ヲ記載シテ販賣シ又ハ情ヲ知リテ其圖書ヲ受託販賣スルコトヲ得ス(明治三十年文部省令第十八號ヲ以テ全條改正)

第十六條 第十五條ニ違背シタル者ハ二十五圓以内ノ罰金又ハ二十五日以下ノ禁錮ニ處ス(同上)

第十七條 圖書ハ其全部揃ヒタルモノニアラサレハ檢定セス(明治二十九年四月文部省令第五號ヲ以テ本條改正)

小學校圖書審查委員組織ニ關スル件

(明治二十六年九月勅令第四百四號)

朕小學校圖書審查委員組織ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

小學校令第十六條第二項ニ規定シタル小學校圖書審查委員ノ組織ニ尋常中學校長ヲ加フ

府縣制ヲ施行セサル地方ニ於テハ府縣會常置委員ヲ以テ府縣參事會員ニ代ヘ圖書審査委員トス

◎教科用圖書檢定條例ニ依リ檢定シタル

圖書ノ效力 (明治二十年五月文部省令第三號)

明治十九年(五月)文部省令第七號教科用圖書檢定條例ニ依リ檢定ヲ得タル教科用圖書ハ本年(五月)文部省令第二號教科用圖書檢定規則ニ依リ檢定シタルモノト同一ノ效ヲ有スルモノトス

◎尋常師範學校教科用圖書裁定方

(明治二十三年三月文部省訓令第四號)

尋常師範學校教科用圖書ノ儀ハ該學校教員ノ會議ニ付シ取調ノ上文部大臣ノ裁定ヲ經ヘシ

◎公私立小學校教科用圖書採定方法

(明治二十年三月文部省訓令第三號)

公私立小學校教科用圖書採定ノ方法左ノ通心得ヘシ

公私立小學校教科用圖書採定方法

第一條 北海道廳長官府縣知事ハ公私立小學校ノ教科用圖書ヲ新定又ハ更定セントスルトキハ其都度小學校教科用圖書審査委員ヲ設ケテ其事由ノ當否實施ノ時期等ヲ審議セシメ併セテ圖書ヲ採擇セシムヘシ

第二條 審査委員ハ左ノ諸員ヲ以テ組織スヘシ

- 一 尋常師範學校校長若クハ長補
 - 二 學務課員一名
 - 三 尋常師範學校教頭及附屬小學校上席訓導
 - 四 小學校教員三名
 - 五 該地方經濟上ノ情況ニ通スル者二名
- 第三條 北海道廳長官府縣知事ハ審査ニ係ル圖書ニ掲載スル所ノ事物ニ通スル教員等ヲシテ該圖書ノ採擇上ニ限リ審査委員ト同一ノ資格ヲ以テ便宜之ニ參與セシムヘシ但一種類ノ圖書ニ付一名ニ限ルヘシ
- 第四條 審査委員ニ於テ審査上ニ關スル事項ヲ決定スルハ會議ニ依ルヘキモノトス
- 第五條 北海道廳長官府縣知事ハ審査委員中ニ就キ審査委員會議ノ議長ヲ命スヘシ
- 第六條 審査委員ハ自己及其親屬並其地方廳學務課員ノ著選譯述編纂校閱及出版等ニ係ル圖書ヲ採擇スルコトヲ得サルモノトス但己ムヲ得サル場合ニ於テハ北海道廳長官府縣知事ニ其事情ヲ詳具シ認可ヲ經テ本文ノ例ニ依ラサルコトヲ得

第七條 審査委員ハ未タ文部大臣ノ檢定ヲ經サル圖書ト雖モ之ヲ採擇スルコトヲ得但北海道廳長官府縣知事ハ本文ニ依リ採擇シタル圖書ヲ新定又ハ更定ノ圖書ニ充ントスルトキハ豫メ文部大臣ノ檢定ヲ經ヘシ

第八條 審査委員ニ於テ審査ヲ終ルトキハ其意見及會議ノ頗末ヲ具シ北海道廳長官府縣知事ニ申報スヘシ

第九條 北海道廳長官府縣知事ニ於テ教科用圖書ヲ新定又ハ更定スルニハ一學科ニ就ギ一種ノ圖

書ヲ採擇スヘシ但都鄙山海等土地ノ情況ニ依リ已ムヲ得サル場合ニ於テハ一學科ニ就キ二種以上ノ圖書ヲ採擇スルモ妨ナシ(明治二十一年九月文部省訓令第三號ヲ以テ本條改正)
第十條 北道廳長官府縣知事ハ教科用圖書ノ新定又ハ更定ヲ公布スルニ箇月前ニ於テ其事由實施ノ時期圖書ノ目錄及第八條審查委員ノ申報又第六條但書第九條但書ノ場合ニ關スル處分アルトキハ其事情ヲ具シ文部大臣ニ報告スヘシ(同上)

◎小學校教科用圖書課用方

(明治二十年九月文部省訓令第十一號)

本年(三月)文部省訓令第三號公立小學校教科用圖書採定方法ニ依リ新定者クハ更定シタル圖書ハ四箇年ヲ經ルニアラサレハ之ヲ變換スヘカラス又該圖書ハ之ヲ課スヘキ最下ノ學級ヨリ用ヒシメ其他ノ學級ニハ從來ノ教科用圖書ヲ襲用セシメ漸次各學級ヲシテ新舊交換セシムヘシ但本文ニ依リ難キ特別ノ事情アルニ於テハ文部大臣ニ稟申スヘシ

◎定價ヲ變更セル小學校教科用圖書ノ效力

保存ニ關スルノ件 (明治二十九年十月文部省令第十一號)

此省令發布前ニ地方長官ニ於テ採定シタル小學校教科用圖書ニシテ成規ノ手續ヲ經テ其定價ヲ變更シタルトキハ地方長官ハ文部大臣ノ許可ヲ受ケ更ニ審查ヲ要セスシテ仍採定ノ效力ヲ有セシムルコトヲ得

◎小學校教科用圖書檢定方

(明治二十五年九月文部省告示第九號)

- 一 小學校ノ教科用圖書ハ生徒用教師用ノ二種トス
- 一 小學校ノ作文手工唱歌裁縫及體操科ニ係ル圖書ハ生徒用教科書ヲ採定セサルニ依リ教師用ノモノヲ檢定ス

◎小學校教科用圖書審查等ニ關スル規則

(明治二十四年十一月文部省令第十四號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第十六條ニ基キ小學校教科用圖書審查等ニ關スル規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

小學校教科用圖書審查等ニ關スル規則

第一條 小學校圖書審查委員ハ府縣知事之ヲ命ス其ノ人員左ノ如シ(明治二十年五月文部省令第十七號ヲ以テ第二號ヲ追加シ以下順次繰下ク)

- 一 府縣高等官及學務擔任官吏各一名
- 二 地方視學官
- 三 府縣參事會員二名但府縣制ヲ施行セサル地方ニ於テハ府縣會常置委員二名
- 四 尋常師範學校長
- 五 尋常中學校長一名

六 尋常師範學校教員二名
七 小學校教員三名乃至五名

審査委員長ハ府縣高等官ニシテ審査委員タルモノヲ以テ之ニ充ツ

第二條 審査委員ハ自己又ハ其親族ノ著選譯述編纂校閱出版等ニ係ル圖書ヲ審査スルコトヲ得ス但已ムヲ得サル場合ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受ケタルトキハ此限ニ在ラス

第三條 審査委員ニ於テ審査了ルトキハ委員長ヨリ其願末ヲ府縣知事ニ具申スヘシ

第四條 府縣知事ハ前條ノ具申ニ依リ相當ト認ムル圖書ハ之ヲ其府縣小學校教科用圖書ト定ムヘシ

第五條 府縣知事ハ四箇年ヲ經ルニ非サレハ小學校ノ教科用圖書ヲ更定スルコトヲ得ス但本項ノ例ニ依リ難キ事情アルトキハ文部大臣ノ指揮ヲ受ケテ特別ノ處分ヲナスコトヲ得

前項ニ依リ更定シタル圖書ヲ小學校ニ用フルニハ之ヲ課スヘキ最下學年ノ兒童ヨリ用ヒシメ其

他ノ兒童ニハ從來ノ教科用圖書ヲ選用セシムヘシ但本項ノ例ニ依リ難キ事情アルトキハ市町村

立小學校ニ就キテハ其市町村長ニ於テ私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ

受クヘシ

第六條 此規則施行前府縣知事ニ於テ定メタル小學校教科用圖書ハ仍其效力ヲ有スルモノトス

第七條 此規則ニ關スル細則ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ

實業補習學校ノ教科用圖書ニ關スル件

(明治二十七年二月文部省令第四號)

- 一 實業補習學校ニ於テ教科用圖書ヲ用フル場合ニハ普通教科目ニ係ルモノハ小學校用又ハ特ニ實業補習學校用トシテ文部大臣ノ檢定ヲ經タルモノタルヘシ其ノ實業教科目ニ係ルモノハ檢定ヲ經ルノ限ニ在ラス
- 二 前項特ニ實業補習學校用トシテ檢定ヲ經ヘキ圖書ニ關シテハ明治二十年文部省令第二號教科用圖書檢定規則ヲ適用ス
- 三 實業補習學校ノ教科用圖書ハ府縣ニ於ケル審査探定ヲ要セス

唱歌用歌詞及樂譜採用ニ關スル件

(明治二十七年十二月文部省訓令第七號)

小學校ニ於テ唱歌用ニ供スル歌詞及樂譜ハ本大臣ノ檢定ヲ經タル小學校教科用圖書中ニ在ルモノ又ハ文部省ノ選定ニ係ルモノ及地方長官ニ於テ本大臣ノ認可ヲ受ケタルモノノ外ハ採用セシムヘカラス但他ノ地方長官ニ於テ一旦本大臣ノ認可ヲ經タルモノハ此限ニ在ラス

高等女學校教科用圖書ノ採用ニ關スル件

(明治二十八年六月文部省訓令第四號)

高等女學校ノ教科用圖書ハ文部大臣ノ檢定ヲ經タルモノタルヘシ但未タ文部大臣ノ檢定ヲ經サルモノヲ採用スルノ必要アルトキハ明治二十八年文部省令第二號ニ依ルヘシ
高等女學校ノ教科用圖書檢定ニ關シテハ明治二十年文部省令第二號教科用圖書檢定規則ヲ適用ス

尋常中學校ノ教科用圖書ニシテ未檢定ノモノヲ採用スルトキノ手續ニ關スル件

(明治二十八年四月文部省訓令第二號)

尋常中學校ノ教科用圖書ニシテ未タ文部大臣ノ檢定ヲ經サルモノヲ採用スルノ必要アルトキハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ其圖書ノ名稱著譯者及出版者ノ氏名發行年月日卷冊ノ記號等ヲ詳記シ文部大臣ニ稟申スヘシ文部大臣之ヲ認可シタルトキハ該圖書ハ其道廳府縣管内ニ限り檢定ヲ經タルト同一ノ效力ヲ有スルモノトス但稟申ノ際該圖書一部ヲ納付セシムルコトアルヘシ

中央氣象臺氣象器械檢定規程

(明治二十九年三月七日文部省令第三號)

中央氣象臺氣象器械檢定規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 第一條 中央氣象臺ニ氣象器械ノ檢定ヲ依頼スル者ハ此規程ニ據ルヘシ
- 第二條 檢定ヲ了シタル器械ニハ器差ヲ示シタル檢定證ヲ交付ス
前項ノ檢定書ヲ分テ甲乙二種トス器差、齊整ニシテ精密ナル觀測用ニ適スト認ムルモノニハ甲號證ヲ交付シ其他ノモノニハ乙號證ヲ交付ス
- 第三條 氣象器械ノ檢定ヲ依頼スル者ハ登記印紙ヲ以テ手数料ヲ納ムヘシ一旦納付シタル手数料ハ如何ナル事故アルモ還付セス
- 第四條 氣象器械檢定手数料ノ金額ハ器械ノ種類檢定ノ難易ニ依リ本條各項ノ範圍ニ於テ中央氣

象臺長之ヲ定ム

- 一 水銀晴雨計 金一圓乃至三圓
- 一 空盒晴雨計 金三十錢乃至一圓五十錢
- 一 寒暖計 金二十錢乃至一圓
- 一 雨量計 金十錢乃至五十錢
- 一 風力計 金五十錢乃至一圓五十錢

第五條 第四條ニ記載セサル氣象器械ト雖モ時宜ニ依リ檢定ノ依頼ニ應シ且檢定證ヲ交付スルコトアルヘシ此場合ニ於テハ其手数料ハ中央氣象臺ノ定ムル所ニ依ル

第六條 時日ヲ限り檢定ヲ依頼スル者アルトキハ時宜ニ依リ之ニ應スルコトアルヘシ此場合ニ於テハ普通手数料ノ二倍ヲ徵收スヘシ但寒暖計ニ限り同人ニシテ六箇以上ノ檢定ヲ同時ニ依頼スルモノノ外ハ普通手数料ノ五倍以内ヲ増徴スヘシ

第七條 檢定證ヲ紛失シ再度交付ヲ依頼スル者アルトキハ該證ノ寫ヲ交付スヘシ此場合ニ於テハ手数料金十錢ヲ徵收スヘシ

第八條 檢定ノ依頼ニ係ル器械ニハ中央氣象臺ニ於テ檢定中相當ノ保護ヲ加フヘシト雖モ若シ破損スルコトアルモ該臺ハ其責ニ任セス

第九條 中央氣象臺ノ必要上檢定スル所ノ器械ニ對シテハ其手数料ヲ徵收セス

第十條 第四條又ハ第六條ノ檢定ヲ依頼セントスル者ハ第一書式又ハ第二書式ノ依頼書ヲ作り第七條ノ檢定證再度交付ヲ依頼セントスル者ハ第三書式ノ依頼書ヲ作り其手数料ニ相當スル登記印紙ヲ貼付シ中央氣象臺ニ差出スヘシ

其各種氣象器械檢定依頼書式左ノ如シ
(書式略之)

市町村立小學校授業料ニ關スル件

(明治三十年勅令第四百七號)

朕市町村立小學校授業料ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 市町村立尋常小學校ノ授業料ハ一箇月金三十錢以内トシ土地ノ情況ヲ量リ地方長官之ヲ定ム

第二條 高等小學校ノ授業料ハ地方長官之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第三條 特別ノ規定アルモノノ外小學校授業料ニ關シ必要ナル事項ハ地方長官之ヲ定ム

附則

第四條 本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第二百十五號小學校令第四十四條第六項ハ本令施行ノ日ヨリ削除ス

市町村立尋常小學校授業料免除方

(明治二十六年五月勅令第三十四號)

朕市町村立尋常小學校ニ就學スル兒童ノ授業料ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 市町村ハ左ノ場合ニ限り市町村會ノ議決ニ依リ府縣知事ノ許可ヲ受ク尋常小學校ニ就學スル全員又ハ或學級ノ兒童ノ授業料ヲ徵收セサルコトヲ得

- 一 學校基本財産ノ收入又ハ寄附金ニ依リ設備及維持ニ供給スルニ足ルトキ
 - 二 設備及維持ニ供給スル爲ニ市町村ノ資力ニ對シ市町村稅ヲ過度ニ賦課スルニ至ラサルトキ
- 第二條 府縣知事ハ市町村會ノ議決前條ノ範圍ヲ超エ又ハ將來ニ尋常小學校ノ擴張ヲ妨グルモノト認ムルトキハ之ヲ許可セサルヘシ

市町村立小學校授業料免除方

(明治二十九年二月勅令第五號)

朕市町村立小學校授業料ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 戰地ニ於ケル勤務ニ起因シテ死去シタル者ノ遺族ニシテ左ニ掲ケル者ニ對シテハ市町村立小學校ニ於テ授業料ヲ徵收セサルモノトス

一 軍人恩給法第二十七條第一ニ該當スル者及第四十條ニ掲ケタル者ニシテ第二十七條第一ニ該當スル者ノ同籍内ニ在ル子及弟妹

二 官吏遺族扶助法第四條第二項ニ該當スル者ノ同籍内ニ在ル子及弟妹

三 明治二十七年勅令第六十四號第一項ニ該當スル者ノ同籍内ニ在ル子及弟妹
前項ノ遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ者ナキモ死者ノ前項ニ該當シタル事實明白ナルトキハ其ノ同籍内ニ在ル弟妹ニ對シ前項ヲ適用ス

第二條 戰地ニ於ケル勤務ニ起因シテ軍人恩給法第九條第十四條又ハ官吏恩給法第三條ニ該當スル者又ハ戰地ニ於テ傷疾ヲ受ケ疾病ニ罹リ明治二十七年勅令第六十四號ニ依リ手當金ヲ受クル者又ハ公務ニ依リ從軍シタル者ノ同籍内ニ在ル子及弟妹ニ對シテハ市町村會ノ議決ニ依リ市

町村立小學校ニ於テ授業料ヲ減額シ又ハ之ヲ徵收セサルコトヲ得
 第三條 本令ニ依リ減額シ又ハ徵收セサル授業料ニシテ已ニ納付済ノモノハ還付セサルモノトス
 但市町村會ニ於テ還付ノ議決ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニアラス

學生生徒身體檢查規程

(明治三十年三月文部省訓令第三號)

學生生徒ノ身體ヲ檢查シ其發育及健康ノ狀態ヲ知悉スルハ衛生上忽ニスヘカラサル所ナルヲ以テ
 學校衛生顧問ニ諮詢シ學生生徒身體檢查規程ヲ定ムルコト左ノ如シ
 但明治二十一年十二月二十八日學生生徒ノ活力檢查ニ關スル訓令ハ之ヲ廢止ス

學生生徒身體檢查規程

- 一 身體檢查ハ毎年四月及十月ニ於テ之ヲ施行スヘシ
- 一 身體檢查ハ醫師ヲシテ之ヲ行ハシムヘシ
- 一 身體檢查ノ項目ハ身長、體重、胸圍、肺活量、脊柱、體格、視力、眼疾、聽力、耳疾、齒牙其他トシ其
 檢查票ノ樣式ハ左ノ如シ

身體檢查票 (男)	
校名 (科何)	姓名
出生年月	出生地
學年	學地

檢 查 年 月 日	體 格		脊 柱	肺 活 量	胸 圍		體 重	身 長
					常 時	充 盈	空 虛	盈 虛ノ差
檢 查 醫 姓 名 印	備 考		齒 牙	耳 疾	聽 力		眼 疾	視 力
			其 他		左 右	左 右	左 右	左 右

- 一本票檢査番號ハ始終同一ノ番號ヲ用ウヘシ
- 一本票ノ用紙ハ西ノ内八ツ切トス
- 一身體檢査票ハ十年間之ヲ保存スヘシ
- 一身體檢査ノ方法ハ左ノ如シ
- 一檢査器械ハ「メートル」式ニ從ヒ衡器ハ水準器ヲ具ヘタルモノヲ可トス正シク尺度ヲ畫シタル厚

紙ヲ柱若クハ壁ニ貼附シ以テ身長計ニ代フルモ亦一便法トス
右検査ノ表記ニハ四捨五入法ヲ用井テ衡ハ「キログラム」度ハ「センチメートル」ヲ以テ一位トス
ヘシ

身長 ハ被検査者ヲシテ直立シ兩膝ヲ密接シ兩上肢ヲ鉛直ニ垂レ頭部ヲ正位ニ保タシム、足袋、靴
等ヲ脱スヘキ事勿論ナリ女子ニシテ鬘アル者ハ一本ノ小桿ヲ取り鬘下ヨリ水平ニ横ヘテ之ヲ
測定ス

體重 ハ著衣ノ儘測定スヘカラス若シ著衣ノ儘測定シタルトキハ其風袋全量ヨリ除去スヘシ
胸圍 ハ兩上肢ヲ鉛直ニ垂レ自然ノ位置ニアラシメ(體操ニ「所謂氣ヲ付ケ」ノ姿勢ニアラス)
乳頭ノ水平線ニ於テ當時ヲ測定ス充盈、空虚、ノ測定ニ於ケル位置亦同シ但小學校ニ於テハ當
時ノミヲ測定ス

肺活量 ハ或ルヘク「ハツチソン」氏ノ「スピロメートル」ヲ用井立方「センチメートル」ヲ以テ之
ヲ表記ス但小學校ニ於テハ之ヲ測定セズ

脊柱 ハ正シキカ、傾キタルカ(右、左又ハ前)、傾キノ程度(強弱)ヲ検査ス
體格 ハ強健、中等、薄弱ノ三等ニ區別ス

視力 ハ中心視力ヲ検査スルモノニシテ「スチルレン」氏ノ試視力表ニ依リ六「メートル」(二十
尺)ノ距離ニ於テD六(二十號)ヲ明視シ得ルモノヲ正視トス

聽力 ハ懷中時計ヲ以テ其聽取ノ最遠距離ヲ制定ス
以上二項ハ兩眼兩耳ニ就キテ各別ニ測定シ十歳未満ノ者ニハ施行セズ
齒牙 ハ其善惡、齲齒ノ有益ヲ検査ス

其他ノ部ニハ頭痛、衄血等検査ノ際ニ發見シタル疾患ヲ記入ス
右各項ノ外身體検査上必要ト認メタル事項ハ備考欄内ニ記入スヘシ
左ノ様式ニ依リ身體検査統計表ヲ調製シ検査ノ翌月限リ文部大臣ニ報告スヘシ

● 學校清潔方法 (明治三十年一月文部省訓令第一號)

學校ノ清潔ハ衛生上忽ニスヘカラサル所ナルヲ以テ學校衛生顧問ニ諮詢シ左ノ清潔方法ノ標準ヲ
定ム依テ各學校ヲシテ之ニ準據シ其清潔ヲ保タシムルコトヲ務ムヘシ
學校清潔方法

清潔方法ヲ分チテ日常清潔方法及定期清潔方法及浸水後清潔方法トス

甲 日常清潔方法

- 一、教室及寄宿舎ハ毎日人ナキ時ニ於テ先ツ窓戶ヲ開キ如露ヲ以テ少シク牀板及階段ヲ潤ホシ掃
出シタル後濕布ヲ以テ建具校具等ヲ拭フヘシ但掃除ノ爲メニ室内ヲ潤ホスハ生徒ノ再ヒ之ニ
入ルマテニ充分乾燥シ了ルヲ度トスヘシ
- 二、教室及寄宿舎ニハ其人員ニ應シ紙屑籠ト少量ノ水ヲ盛レル唾壺トヲ備ヘ紙片其他棄却物ハ必
ス屑籠ニ投入シ痰唾ハ必ス唾壺ニ於テシ決シテ室内廊下等ニ放下セシムヘカラス
紙屑籠及唾壺ハ毎日之ヲ掃除スヘシ
- 三、寄宿舎ニ於テハ戶外ニ於テ用井履物ヲ禁スヘシ但止ムヲ得サル事情アリテ特ニ之ヲ許スト
キハ適宜ノ方法ヲ設ケテ室内ノ不潔ニ陥ラサルコトヲ務ムヘシ
- 四、靴ノ儘昇降スル校舎ノ出入口ニハ人員ニ應シ靴拭ヲ備フヘシ

五、寢具ハ毎月少クトモ一回之ヲ日光ニ曝シ被覆寢衣等ハ務メテ洗濯セシムヘシ

六、便所ノ尿漉及注壁等ハ毎日一回水ヲ以テ洗ヒ圖房ハ濕布ヲ以テ拭フヘシ樋箱ニハ成ルヘク蓋

ヲ設クヘシ

七、糞壺内ニハ防臭藥トシテ粗製過滿俺酸加里、粗製格魯兒爾倫（以上百倍乃至三百倍）硫酸

鐵、泥炭末、木炭末、乾燥土粉、灰等ヲ撒布シ期ヲ愆ラス汲取ラシムヘシ

八、食堂、炊事場、浴室、洗面所、洗濯所等ハ時時窓戸ヲ開キテ空氣ヲ通シ惡臭煙氣又ハ湯氣ノ鬱滯

ナキヲ務メ且掃除ヲ怠ルヘカラス殊ニ食堂ニ於テハ毎食前如露ヲ以テ牀面ヲ潤ホシ食後ニハ

濕布ヲ以テ其食卓等ヲ拭フヘシ

九、芥棄場ノ不潔物ハ期ヲ愆ラス搬送セシムヘシ

十、下水ハ常ニ疏通セシメ炊事場、浴室、洗面所、洗濯所等ノ下水ハ毎月少クトモ一回大掃除ヲ行

フヘシ

十一、庭園、體操場、遊戯場、簷下、椽下等モ亦常ニ清潔ヲ保タシムヘシ

乙 定期清潔方法

定期清潔方法ハ毎年少クトモ一回夏休又ハ其他ノ長休ニ際シ之ヲ行フモノトス

十二、先ツ教室、寄宿舍内等ニ在ル机、腰掛、寢臺、戸棚等ヲ室外ニ出シ戸、障子、窓懸等ヲ外シ敷物

ヲ剝キタル後如露ヲ以テ牀板及廊下ヲ潤ホシ、天井、四壁、牀板、廊下等處ク之ヲ掃ヒ然ル後清

水ヲ以テ洗拭スヘシ但汚染殊ニ甚シキ部分及器具等ハ熱湯（ニアケ）汁若クハ石鹼水ヲ以テ洗滌スヘシ

十三、簷下、牀下等モ手ノ届ク限り之ヲ掃ヒ外部ノ羽目及簷廻リハ龍吐水等ヲ以テ洗滌スヘシ

十四、寢具、窓懸、敷物等ニシテ洗濯シ得ヘキモノハ之ヲ洗濯シ其洗濯シ得ヘカラサルモノハ先ツ

其塵ヲ掃ヒ書籍文具等ト共ニ數日之ヲ日光ニ曝シ刷掃スヘシ

十五、器具、寢具等ハ總テ室ノ乾キタル後ニアラサレハ室内ニ持込ムヘカラス

室ハ掃除後五日間以上窓戸ヲ開キテ空氣及日光ヲ通セシムヘシ

十六、牀板、壁面等ニ虧隙アルモノハ此際之ヲ填塞シ風抜穴、煙突等ノ塵煤ハ之ヲ除去スヘシ

十七、浴室、洗面所、食堂、炊事場、生徒控所、雨中體操場、便所、下水、芥棄場等ニシテ破損アルモノ

ハ此際盡ク修理ヲ加ヘ且大掃除ヲ行フヘシ

丙 水浸後清潔方法

洪水ノメメ水害ヲ被リタル學校ハ開校前左ノ清潔方法ヲ施行スヘシ

十八、水ニ浸サレタル校舍殊ニ寄宿舍ノ建具牀板等ハ取外シテ空氣ヲ通シ且牀下ノ汚物泥土ヲ除

去シ場合ニ依テハ焚火、火鉢等ヲ用井テ充分ニ乾燥セシムヘシ

十九、建具、牀板、校具、腰張等ノ浸水シタルモノハ清水又ハ熱湯ヲ以テ洗拭シタル後可成之ヲ日

光ニ曝シ充分ニ乾燥セシムヘシ

二十、浸水ノ害ヲ被リタル井戸ハ必ス數回之ヲ浚漂シテ汚物ヲ除キ井戸側ハ清水ヲ以テ洗ヒ能ク

水ノ澄ミタル後ニ之ヲ使用スヘシ但開校後一箇月間ハ必ス其水ヲ煮沸シテ飲用スヘシ

二十一、右ノ外定期清潔方法ニ掲ケタル各項ヲ適宜應用スヘシ

尋常師範學校中學校中學校高等女學校教員免許規則

（明治二十九年十二月文部省令第十二號）

尋常師範學校中學校高等女學校教員免許規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校教員免許規則

第一條 尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校教員免許狀ハ文部省ノ檢定ニ合格シタル者ニ之ヲ授與ス但左ニ掲ケル者ニハ文部大臣ノ適當ト認ムル學科目ニ限り當該學校長ノ稟申ニ依リ教員免許狀ヲ授與ス

- 一 高等師範學校及女子高等師範學校卒業生
- 一 高等師範學校及女子高等師範學校專修科、撰科卒業生、高等師範學校附屬音樂學校師範部卒業生

- 一 東京美術學校特別課程卒業生
- 一 元東京音樂學校師範部卒業生
- 一 元體操傳習所卒業生

第二條 檢定ハ試験ニ依リ之ヲ行フ但第十條ニ掲ケル者ニシテ試験ヲ要セスト認メタルモノハ此限ニアラス

試験ヲ分チテ豫備試験、本試験ノ二種トシ豫備試験ハ地方ニ於テ之ヲ行ヒ本試験ハ東京ニ於テ之ヲ行フ但豫備試験ニ合格シタル者ニアラザレハ本試験ヲ受ケルコトヲ得ス又學科ノ種類ニ依リ又ハ學科目ヲ限リ試験ヲ施行スル場合ニ於テハ豫備試験ヲ省クコトアルヘシ

尋常師範學校、尋常中學校教員ニ係ルモノハ高等師範學校ノ學科程度ニ尋常師範學校女子部、高等女學校教員ニ係ルモノハ女子高等師範學校ノ學科程度ニ準シ總テ教授法ヲ併セテ試ムルモノトス但學科ノ種類ニ依リテハ其程度ヲ斟酌スルコトアルヘシ

第三條 試験ハ毎年一回第九條ノ各學科目ヲ通シテ施行スルモノトシ時宜ニ依リテハ其學科目ヲ

限リテ臨時ニ施行スルコトアルヘシ

第四條 試験施行ノ場所、期日、出願期限等ハ豫メ之ヲ告示ス

第五條 檢定ハ文部大臣ノ命シタル檢定委員之ヲ行フ

第六條 檢定ヲ出願スル者ハ左ノ資格ヲ具フルコトヲ要ス

- 一 年齡男子ハ二十年以上女子ハ十八年以上
- 一 身體健全
- 一 品行方正

第七條 檢定ヲ出願スル者ハ族籍、氏名、住所、生年月及志願ノ學校、學科目ヲ記シタル願書(一號書式)ニ左ノ書類ヲ添ヘ地方廳ヲ經テ文部省ヘ差出スヘシ地方長官ハ本人ノ品行ニ就キ意見ヲ附記スルコトヲ要ス

- 一 學業、業務、賞罰等ニ關スル履歷書(二號書式)及學業證書、免許狀ノ寫
- 二 呼吸器、神經系、皮膚、視官、聽官、言語其他身體ニ關スル官公立病院醫師ノ検査書(三號書式)但官公立病院ニ遠隔ノ地ニアリテハ内務省ノ試験ニ依リ又ハ大學、高等學校、府縣立醫

學校ヲ卒業シ免狀ヲ得タル醫師ノ検査書ヲ以テスルモ妨ナシ又實地體操ノ検査ヲ必要ト認メタル者ニ就テハ試験ノ際檢定委員之ヲ施行ス

第八條 檢定ヲ出願スル者ハ其一學校ニ限ルモノト二學校以上ニ涉ルモノトニ拘ハラズ出願學科

- 一 科目ニ付檢定手数料金二圓、二科目以上ハ一科目毎ニ金一圓ヲ加ヘ納ムヘシ但第十條第一項
- 二ニ依リ檢定ヲ出願スル者ハ檢定手数料ヲ納ムルヲ要セス

第九條 檢定ハ左ノ學科目ニ就キ之ヲ行フ

尋常師範學校教員檢定學科目

修身	地誌	化學	習字	兵式體操	商業	尋常師範學校女子部教員檢定學科目	修身	萬國史	家	音樂
國語	地文	植物	毛筆畫及用器畫	英語	工業	修身	地誌	裁縫	裁縫	普通體操
國語	數學	動物	鉛筆畫及用器畫	獨用器畫		國語	地文	習字	習字	
漢文	漢文	簿記	佛音	佛音		漢文	算術、代數、幾何	毛筆畫	毛筆畫	
歷史	簿記	生理	佛音	佛音		日本史	理科	鉛筆畫	鉛筆畫	
歷史	物理	地誌	農業	農業		萬國史	家事	獨語	獨語	

尋常中學校教員檢定學科目

尋常師範學校女子部教員檢定學科目

高等女學校檢定教科目

修身	地誌	裁縫	普通體操	佛語
國語	地文	習字	教習	
漢文	算術、代數、幾何	毛筆畫	手藝	
日本史	理科	鉛筆畫	英語	
萬國史	家事	音	獨語	

修身ト倫理、音樂ト唱歌ハ同一ノ學科目ト看做ス

第十條 左ノ一ニ掲クル者ハ文部大臣ノ適當ト認メタル學科目ニ關シニ二掲クル者ハ其免許ノ學科目ニ關シ三ニ掲クル者ハ其教授シタル學科目ニ關シ試驗ヲ須井スシテ檢定ヲ行ヒ免許スルコトアルヘシ

一 帝國大學分科大學卒業生

元工部大學校卒業生

帝國大學文科大學

元古典講習科卒業生

帝國大學農科大學

乙科優等卒業生

元高等中學校卒業生

元駒場農學校卒業生

高等商業學校卒業生

元東京大學卒業生

帝國大學分科大學撰科修了生

帝國大學理科大學

元簡易講習科卒業生

高等學校卒業生

札幌農學校卒業生

元東京農林學校卒業生

元東京商業學校卒業生

東京工業學校卒業生
元東京職工學校卒業生
高等師範學校附屬

音樂學校卒業生

工業教員養成所卒業生
東京美術學校卒業生
元東京音樂學校卒業生

二 教員タラント欲スル所ノ學校程度ト同等以上ノ學校ノ教員免許狀ヲ有スル者
三 教員タラント欲スル所ノ學校程度ト同等以上ノ官立學校ニ於テ一箇年以上教員タル者若クハ教員タリシ者

陸軍教導團歩兵科卒業生ハ兵式體操ニ關シ前項一ニ準スルコトヲ得

第十一條 前條ニ掲ケル者ハ隨時檢定ヲ出願スルコトヲ得但試験ヲ必要ト認メタル學科目ニ就テハ次ノ試験時期ニ於テ更ニ手数料ヲ納メスシテ直ニ本試験ヲ受クルコトヲ得シム

第十二條 第十條第一項ニ掲ケル者ハ當該學校長ヲ經テ檢定ヲ出願スルコトヲ得其三ニ掲ケル者ニシテ文部省直轄學校ニ係ルモノ亦之ニ準ス

前項ノ場合ニ於テハ當該學校長ハ本人ノ學力、品行、身體ニ關シ意見ヲ付シテ具申スヘシ又第七條ニ依リ願書ニ添ヘテ差出スヘキ書類ハ履歷書ノ外之ヲ要セス

第十三條 本試験ニ於テ一學科目ノ全部ニ合格セサルモ其或部分ノ成績佳良ナルトキハ其部分ニ對シ證明書ヲ授與スルコトアルヘシ

前項ノ證明書ヲ有スル者ハ其後ノ試験時期ニ於テ前ニ出願セシ學科目ニ就キ更ニ檢定ヲ出願スルトキハ證明書ニ記載シタル部分ヲ省キ其ノ部分ニ就キ試験ヲ行フ但證明書ハ三年間有效ノモノトス

第十四條 免許狀ヲ授與シタル者ノ免許ノ學科、族籍、氏名等ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十五條 第十條第一項ニ依リ更ニ免許狀ヲ受クル者及免許狀ヲ毀損亡失シ若クハ氏名ヲ變更シタル等ノ爲其書換ヲ出願スル者ハ免許狀一通ニ付手数料金一圓ヲ納ムヘシ

第十六條 檢定手数料及前條ノ手数料ハ登記印紙ヲ用井願書ニ貼付スヘシ其既ニ納メタル後ハ何等ノ事情アルモ之ヲ還付セス

第十七條 免許狀ヲ有スル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其免許狀ヲ褫奪ス

- 一 禁錮以上ノ刑ニ處セラレ又ハ信用若クハ風俗ヲ害スル罪ヲ犯シテ罰金ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキ
- 二 破産又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタルトキ
- 三 荒酷暴激其他總テ教員タルノ面目ヲ汚シタル行爲アルトキ

第十八條 地方長官ニ於テ前條ノ處分ヲ要スト認ムル者アルトキハ文部大臣ニ具申スヘシ

附則

第十九條 明治十九年文部省令第二十一號明治二十五年文部省令第十三號明治二十七年文部省令第八號ハ之ヲ廢止ス

第二十條 本規則第九條檢定學科目中數學ノ試験ハ明治三十一年以後ニアリテハ算術、代數、幾何、三角法及解析幾何大意、微分積分大意マテ併セテ出願スルニアラサレハ檢定ヲ行ハス
(書式ハ之ヲ略ス)

學校教員檢定等ニ關スル規則

(明治二十四年十一月文部省令第十九號)

小學校教員檢定等ニ關スル規則ヲ定ムル左ノ如シ
小學校教員檢定等ニ關スル規則

第一章 府縣ニ於ケル檢定等

第一條 小學校教員檢定委員ハ府縣官吏並尋常師範學校長及教員ヲ組織シ府縣知事之ヲ命スヘシ
府縣知事ハ檢定委員中ニ就キ委員長ヲ命スヘシ

第二條 小學校教員檢定委員ハ此規則ニ依リ檢定ヲ行ヒ委員長ヨリ其成績ヲ府縣知事ニ具申スヘシ

第三條 府縣知事ハ前條ノ具申ニ依リ合格ト認ムル者ニ相當ノ免許狀ヲ授與ス但シ第七條第七款ニ該當スル者ニ該當スル者ニ正教員免許狀ヲ授與スル場合ニハ豫メ文部大臣ノ認可ヲ經ヘシ

第四條 正教員ノ檢定ヲ請フ者ハ左ノ資格ヲ具フルコトヲ要ス
一 准教員ノ免許狀ヲ有シ一箇年以上公立小學校教員ノ職ニ在リシコト但第七條第七款ニ該當スル者ハ此限ニ在ラス

二 年齡男子ハ二十年以上女子ハ十八年以上

三 身體健全

四 品行方正

第五條 准教員ノ檢定ヲ請フ者ハ左ノ資格ヲ具フルコトヲ要ス

一 年齡男子ハ十七年以上女子ハ十五年以上

二 身體健全

三 品行方正

第六條 檢定ハ之ヲ別テ左ノ二種トス
甲種 認定

乙種 試驗

第七條 甲種ノ檢定ハ左ニ掲クル者ニ限り之ヲ行フモノトシ第九條乃至第十二條ニ掲クル科目及其程度ヲ參照シテ其學力及經歷ヲ調査スルモノトス但尋常小學校專科教員ニ關スル檢定ハ之ヲ行ハス

一 高等師範學校女子高等師範學校又ハ尋常師範學校卒業生

二 他ノ府縣ニ於テ小學校教員免許狀ヲ受得シタル者

三 文部省直轄諸學校ニ於テ某科目ニ關シ特ニ教員ノ職ニ適スル教育ヲ受ケタル卒業生

四 尋常師範學校尋常中學校高等小學校教員免許狀ヲ有スル者

五 従前ノ成規ニ依リ小學校教員免許狀又ハ小學師範學校卒業證書ヲ受得シタル者

六 准教員ノ免許狀ヲ有スル者ニシテ其有效期間滿チタル者

七 其他學力品行等ニ關シ府縣知事ニ於テ特ニ適任ト認メタル者

第八條 乙種ノ檢定ハ學力ノ試驗ヲ行フモノトス但尋常小學校專科教員ニ關スル檢定ハ之ヲ行ハス

第九條 尋常小學校本科正教員ノ試驗科目及其程度ハ左ノ如シ但圖畫、音樂、體操ノ一科目若クハ數科目ハ當分之ヲ缺クコトヲ得又裁縫ハ女子ニ限ル
倫理 人倫道德ノ要旨

教育 教授ノ原理學校管理ノ方法及實地授業

國語 尋常師範學校ノ程度ニ準ス

算術 尋常師範學校ノ程度ニ準ス

地理 日本地理外國地理ノ大要

歴史 日本歴史ノ大要

習字 楷書行書草書

圖畫 自在畫法ノ大要

音樂 單音唱歌及樂器用法ノ大要

體操 普通體操及兵式體操(男子ニ限ル)

裁縫 通常衣服ノ縫方裁方

尋常小學校本科准教員ノ試験科目ハ前項ニ同シ其程度ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ

第十條 高等小學校本科男教員ノ試験科目ハ倫理、教育、國語、漢文、數學、簿記、地理、歴史、博物、物理、化學、習字、圖畫、音樂及體操トス但圖畫、音樂、體操ノ一科目若クハ數科目ハ當分之ヲ缺クコトヲ得

前項各科目ノ程度ハ正教員ニ關シテハ尋常師範學校ノ程度ニ準ス准教員ニ關シテハ府縣知事之ヲ定ムヘシ

第十一條 高等小學校女教員ノ試験科目ハ倫理、教育、國語、數學、地理、歴史、理科、家事、習字、圖畫、音樂及體操トス但圖畫、音樂、體操ノ一科目若クハ數科目ハ當分之ヲ缺クコトヲ得

前項各科目ノ程度ハ正教員ニ關シテハ尋常師範學校ノ程度ニ準ス准教員ニ關シテハ府縣知事之

ヲ定ムヘシ

第十二條 高等小學校專科教員ノ試験科目ハ圖畫、音樂、體操、家事、手工、農業、商業、裁縫、外國語ノ一科目若クハ數科目トス但何レノ科目ニ就キテモ授業法ヲ附帶シテ試験ヲ行フモノトス(明治二十六年七月文部省令第十號ニテ本項ニ「裁縫」ノ二字ヲ加フ)

前項各科目ノ程度ハ正教員ニ關シテハ尋常師範學校ニ於ケル程度ト同等以上トス准教員ニ關シテハ府縣知事之ヲ定ムヘシ

第十三條 左ニ掲クル者ニシテ乙種ノ檢定ヲ請フ者ハ其學力ヲ第九條乃至第十二條ニ掲クル科目及其程度ニ對照シ同等以上ト認ムルトキハ其一科目若クハ數科目ノ試験ヲ缺クコトヲ得

一 他ノ府縣ニ於テ小學校教員免許狀ヲ受得シタル者

二 文部省直轄諸學校ニ於テ某科目ニ關シ特ニ教員ノ職ニ適スル教育ヲ受ケタル卒業生

三 尋常師範學校尋常中學校高等女學校教員免許狀ヲ有スル者

四 従前ノ成規ニ依リ小學校教員免許狀又ハ小學師範學校卒業證書ヲ受得シタル者

五 准教員ノ免許狀ヲ有スル者ニシテ其有効期限滿チタル者

六 中學校卒業生

七 文部大臣ニ於テ尋常中學校ノ學科程度ト同等以上ト認メタル學校ノ卒業生

第十四條 正教員ノ免許狀ハ其府縣限リ終身有效トス

准教員ノ免許狀ハ其府縣限リ有效トス其有効期限ハ七箇年以内ニ於テ府縣知事之ヲ定ムヘシ

第十五條 府縣知事ハ小學校教員候補者ノ名籍ヲ作り免許狀ヲ授與シタル者アル都度其氏名等ヲ

之三登錄スヘシ

府縣知事ハ前項ノ登錄ヲ了リタルトキハ其氏名等ヲ管内へ告知スヘシ
第十六條 小學校教員免許狀ヲ有スル者現ニ教員ノ職ニ在ラサルモ免許狀ヲ褫奪セラルヘキ教員ト同様ノ行爲アルトキハ府縣知事其免許狀ヲ褫奪スヘシ此場合ニ於テハ其族籍氏名並事由ヲ具シテ文部大臣ニ開申スヘシ

第十七條 府縣知事ハ檢定ヲ請フ者及免許狀ヲ受クル者ヲシテ相當ノ手数料ヲ納メシムルコトヲ得

第十八條 免許狀ノ書式ハ左ノ如シ但准教員免許狀ノ書式ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ
師範學校卒業生ニ與フルモノ(畧之)

師範學校卒業生ニ非サル者ニ與フルモノ(畧之)

第十九條 本科教員免許狀ヲ有シテ圖畫、音樂、體操、家事、手工、農業、商業、外國語ノ一科目若クハ數科目ヲ教授シ得ル者ハ專科教員タルコトヲ得ルモノトス

第二十條 此規則ニ關スル細則ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ

第二章 文部省ニ於ケル檢定等

第二十一條 左ニ掲グル者ハ府縣知事文部省直轄學校長等ノ具申ニ基キ文部大臣之ヲ檢定シテ小學校教員普通免許狀ヲ授與ス

- 一 小學校正教員免許狀又ハ從前ノ成規ニ依リ小學校教員免許狀若クハ小學師範學校卒業證書ヲ受得シ五箇年以上公立小學校教員ノ職ニ在リテ品行方正ニシテ學術及授業超衆ノ者
- 二 高等師範學校又ハ女子高等師範學校卒業生ニシテ一箇年以上小學校教員ノ職ニ在リシ者

三 文部省直轄諸學校ニ於テ某科目ニ關シ特ニ教員ノ職ニ適スル教育ヲ受ケタル卒業生ニシテ一箇年以上小學校教員ノ職ニ在リシ者

小學校教員普通免許狀ハ全國ニ通シテ終身有效ノモノトス

第二十二條 第十六條及第十九條ノ規程ハ小學校教員普通免許狀ヲ有スル者ニ關シ之ヲ適用ス

第二十三條 小學校教員普通免許狀ノ書式ハ左ノ如シ
本科正教員ニ與フルモノ(畧之)
專科正教員ニ與フルモノ(畧之)

◎小學校長及教員ノ任用解職其他進退ニ關スル規則

(明治二十四年十一月文部省令第二十號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第五十六條ニ基キ小學校長及教員ノ任用解職其他進退ニ關スル規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

小學校長及教員ノ任用解職其他進退ニ關スル規則

第一條 小學校教員ハ學校ノ種類學級ノ編制等ニ應シ相當ノ資格アル者ヲ任用スヘシ

第二條 市町村立小學校長ハ本科正教員中ニ就キ兼任スルヲ常例トス

第三條 府縣知事ニ於テ市町村立小學校ニ正教員ヲ任用スヘキ場合ニ當リ適當ノ正教員タルヘキ者ヲ得ルコト能ハスト認ムルトキハ期限ヲ定メテ准教員ヲ任用スルコトヲ得
前項ニ依リ一時教授スル准教員ハ其年齡男子ハ二十年以上女子ハ十八年以上ナルコトヲ要ス

第四條 府縣知事ニ於テ市町村立小學校正教員ヲ轉任セシメントスルニ當リ若シ之カ爲メ正教員ヲ准教員トナシ又ハ俸給ヲ減少スヘキ場合ニ於テハ本人ノ意ニ反シテ之ヲ行フコトヲ得ス但特別ノ事情アリト認ムルトキハ此限ニ在ラス

第五條 府縣知事ニ於テ市町村立小學校ノ正教員左ノ事項ニ該當スト認ムルトキハ其情狀ニ依リ休職ヲ命スヘシ但休職ノ期限ハ一箇年以内トス

府縣知事ハ小學校正教員ニシテ高等師範學校女子高等師範學校、工業教員養成所、尋常師範學校又ハ尋常師範學校ニ於ケル小學校教員講習科ニ入學スル者ニハ休職ヲ命スルコトヲ得(明治二十七年文部省令第二十一號ヲ以テ本項以下二項追加)

豫備後備ノ軍籍ニ在ル小學校正教員戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタルトキハ當該休職ヲ命セラレタルモノトス

休職ノ期限ハ其ノ事故止ミタル後三箇月トス

一 傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタル者其職務ヲ行フニ妨ケアルコト二箇月以上ニ及フトキ

二 學校編制ノ變更等ニ依リ其人ヲ要セサルニ至リタルトキ

休職者ハ職務ニ從事セス及俸給ヲ減セラレ又ハ全ク之ヲ受ケサル等ノ外總テ本職者ト異ナルコトナシ

第六條 府縣知事ニ於テ市町村立小學校ノ正教員左ノ事項ニ該當スト認ムルトキハ退職ヲ命スヘシ

一 正當ノ理由ニ基キ退職ヲ願出テタルトキ

二 傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ終身其職務ニ堪ヘサルトキ

三 (明治二十七年文部省令第二十一號ヲ以テ削除ス)

四 休職者ノ代員トシテ任用セラレタル場合ニ於テ休職者ノ復職スルトキ

従前ノ成規ニ依リ授與シタル小學校教員免許狀又ハ之ト同一ノ效ヲ有スル小學校師範學校卒業證書ヲ有シ教員タル者ニシテ其有効期限滿ツルトキハ特ニ辭令書ヲ用ヒスシテ前項ニヨリ退職ヲ命シタル者ト同一ニ見做スヘシ休職者ノ休職期限滿ツルトキ亦同シ(同上法令ヲ以テ本項改正)

第七條 府縣知事ハ休職退職ノ事由ニ關シ第五條第六條ノ例ニ依リ難キモノアル場合ニ於テハ文部大臣ノ指揮ヲ受ケテ特別ノ處分ヲナスコトヲ得

第八條 市町村立小學校長及教員ノ任用休職復職退職等ニハ辭令書ヲ交付スヘシ

第九條 私立小學校長ハ其學校ノ教員中ニ就キ兼任スルヲ常例トス

第十條 第三條准教員任用ノ規程ハ私立小學校ニ關シ之ヲ適用ス但任用ノ期限ハ其設立者ニ於テ之ヲ定メ府縣知事ノ許可ヲ受ケヘシ

第十一條 私立小學校ノ學校長及教員ノ任用解職ハ其設立者ヨリ府縣知事ニ呈申スヘシ

第十二條 此規則ニ關スル細則ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ

市町村立小學校教員任用令

(明治二十六年十二月勅令第二百六十號)

朕市町村立小學校教員任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

市町村立小學校教員任用令

第一條 市町村立小學校教員ハ市長又ハ郡長ノ推薦ニ由リ小學校教員銓衡委員ノ銓衡ヲ經テ府縣

知事之ヲ任ス

第二條 小學校教員銓衡委員ハ府縣知事ノ指命スル所ノ府縣高等官及判任官各一人尋常師範學校長及其ノ教員二人ヲ以テ組織ス

第三條 明治二十三年勅令第二百十五號小學校令第五十九條第一項第二項第三項ハ删除ス

地方長官ニ於テ特ニ小學校正教員ノ急需アリ

ト認ムル場合ニ准教員ニ教員ノ免許狀ヲ與ヘ

得ル件 (明治二十六年三月文部省令第一號)

北海道廳長官府縣知事ニ於テ特ニ小學校正教員ノ急需アリト認ムル場合ニ於テハ明治二十四年(十一月)文部省令第十九號小學校教員檢定等ニ關スル規則第七條第一款ノ者ニ限り公立小學校准教員ノ職ニ在リシコト一箇年以内ト雖モ檢定ノ上小學校正教員ノ免許狀ヲ授與スルコトヲ得

市町村立小學校長及教員名稱並待遇ノ件

(明治二十四年六月勅令第七十三號)

朕市町村立小學校及教員名稱及待遇ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

市町村立小學校長及教員名稱並待遇

第一條 市町村立小學校長及教員ノ名稱左ノ如シ

一 小學校長

二 高等訓導高等小學校ノ本科正教員タル者及尋常小學校ノ本科正教員中高等小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ノ名稱トス

三 訓導 尋常小學校ノ本科正教員タル者ノ名稱トス

四 准訓導 小學校ノ本科准教員タル者ノ名稱トス

五 授業師 小學校ノ專科正教員タル者ノ名稱トス

六 准授業師 小學校ノ專科准教員タル者ノ名稱トス

第二條 市町村立小學校長及教員ハ左ノ區別ニ從ヒ判任官ヲ以テ待遇ス

一 小學校長 教員ノ職ニ對スル待遇ニ從フ

二 高等訓導 判任官「五等以上」

三 訓導 判任官「二等以下五等以上」但特別ノ勤勞アル者ハ判任官「一等」ノ待遇ニ陞進スルコトヲ得

四 准訓導 判任官「六等」但從前文部省ノ認可ヲ經テ授與シタル修身科教授免許狀ヲ有スル者ハ判任官「二等以下五等以上」ノ待遇ニ陞進スルコトヲ得又高等小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ高等訓導ノ待遇ニ從ヒ、尋常小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ訓導ノ待遇ニ從ヒ、小學校ノ專科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ授業師ノ待遇ニ從フコトヲ得

五 授業師 判任官「三等以下五等以上」但高等小學校ノ授業師及尋常小學校ノ授業師中高等小學校ノ專科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者又ハ特別ノ勤勞アル者ハ判任官「二等」ノ待遇ニ陞進スルコトヲ得又高等小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ

高等訓導ノ待遇ニ從ヒ、尋常小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ訓導ノ待遇ニ從フコトヲ得

六 准授業師 判任官「六等」但高等小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ高等訓導ノ待遇ニ從ヒ、尋常小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ訓導ノ待遇ニ從ヒ、小學校ノ專科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ授業師ノ待遇ニ從フコトヲ得

公立學校職員休職 (明治二十七年八月勅令第百四十一號)

朕公立學校職員休職ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條、學校編制ノ變更事務ノ伸縮等ニ依リ其ノ人ヲ要セサル場合其ノ他傷痍疾病等ノ事故アル場合ニ於テハ地方長官ハ公立學校職員ニ休職ヲ命スルコトヲ得

豫備後備ノ軍籍ニ在ル公立學校職員戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタルトキハ當然休職ヲ命セラレタルモノトス

第一項ニ依ル休職ノ期限ハ一箇年トシ第二項ニ依ル休職ノ期限ハ其ノ事故止ミタル後尙三箇月トス

第二條 休職ノ期限滿ツルトキハ當然退職者トス

第三條 休職者ハ職務ニ從事セス及俸給ヲ減セラレ又ハ全ク之ヲ受ケサルノ外總テ本職者ト異ルコトナシ

附則

第四條 本令ハ市町村立小學校教員ニ適用セス

第五條 明治二十七年六月五日以後本令施行以前ニ召集セラレタル者ハ其ノ召集ノ日ヨリ休職ヲ命セラレタルモノトス

奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル學校職員ノ任免奏薦及宣行ニ關スル件

(明治二十六年四月勅令第二十二號)

朕奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル學校職員任免奏薦及宣行ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十四年勅令第二百十七號尋常師範學校官制第二條但書及明治二十四年勅令第二百四十四號公立中學校高等女學校專門學校技藝學校職員名稱待遇及任免ニ關スル勅令第二條ニ依リ奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル各學校職員ノ任免奏薦及宣行ハ明治二十五年勅令第九十六號高等官等俸給令第四條及第五條ノ例ニ依ル

正教員准教員ノ區別 (明治二十四年十一月文部省令第二十三號)

明治二十四年(五月)文部省令第三號正教員准教員ノ別ヲ改正スルコト左ノ如シ

第一條 明治二十三年(十月)省令第二百十五號小學校令ニ依ラスシテ授與シタル小學校教員免許狀又ハ之ト同一ノ效ヲ有スル小學校師範學科卒業證書ヲ有シ高等小學校ノ教員タルコトヲ得ヘキ

資格ヲ有スル者ハ其免許狀又ハ卒業證書ノ有効期限間高等小學校ノ本科正教員タルコトヲ得但
圖畫、唱歌、體操、裁縫、英語、農業、工業、手工、商業ノ一科若クハ數科ノ外教授シ得サル者ハ此限
ニ在ラス

第二條 第一條ニ掲クル免許狀若クハ卒業證書ヲ有シ圖畫、唱歌、體操、裁縫、英語、農業、工業、手
工、商業ノ一科若クハ數科ニ關シ高等小學校ノ教員タルコトヲ得ヘキ資格ヲ有スル者ハ其免許
狀又ハ卒業證書ノ有効期限間高等小學校ノ專科正教員タルコトヲ得

第三條 第一條ニ掲クル免許狀ヲ有シ高等小學校ノ授業生タルコトヲ得ヘキ資格ヲ有スル者ハ其
免許狀ノ有効期限間高等小學校ノ本科正教員タルコトヲ得但圖畫、唱歌、體操、裁縫、英語、農業、
手工、商業ノ一科若クハ數科ノ外教授シ得サル者ハ此限ニ在ラス

第四條 第一條ニ掲クル免許狀ヲ有シ圖畫、唱歌、體操、裁縫、英語、農業、手工、商業ノ一科若クハ
數科ニ關シ高等小學校ノ授業生タルコトヲ得ヘキ資格ヲ有スル者ハ其免許狀ノ有効期限間高等
小學校ノ專科正教員タルコトヲ得

第五條 第一條ニ掲クル免許狀又ハ卒業證書ヲ有シ尋常小學校又ハ小學簡易科ノ教員タルコトヲ
得ヘキ資格ヲ有スル者ハ其免許狀又ハ卒業證書ノ有効期限間尋常小學校ノ本科正教員タルコト
ヲ得但圖畫、唱歌、體操、裁縫、工業ノ一科若クハ數科ノ外教授シ得サル者ハ此限ニ在ラス

第六條 第一條ニ掲クル免許狀ヲ有シ尋常小學校ノ授業生タルコトヲ得ヘキ資格ヲ有スル者ハ其
免許狀ノ有効期限間尋常小學校ノ本科正教員タルコトヲ得但圖畫、唱歌、體操、裁縫ノ一科若ク
ハ數科ノ外教授シ得サル者ハ此限ニ在ラス

第七條 府縣知事ハ本令ノ規程ニ依リ難キモノアル場合ニ於テハ文部大臣ノ指揮ヲ受ケ特別ノ處

分ヲナスコトヲ得

● 小學校長及教員職務及服務規則

(明治二十四年十一月文部省令第二十一號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第六十一條ニ基キ小學校長及教員職務及服務規則
ヲ定ムルコト左ノ如シ

小學校長及教員職務及服務規則

第一條 小學校長及教員ハ教育ニ關スル勅語ノ旨趣ヲ奉體シ法律命令ノ指定ニ從ヒ其職務ニ服ス
ヘシ

第二條 學校長ハ校務ヲ整理シ所屬教員ヲ監督スヘシ

學校長ヲ置カサル學校ニ於テハ首席教員學校長ノ職務ヲ行フヘシ

第三條 正教員及准教員(一時教授スル者)ハ兒童ノ教育ヲ擔任シ並之ニ屬スル事務ヲ掌ルヘシ

第四條 准教員(補助教授スル者)ハ正教員ノ職務ヲ助ケルシ

第五條 教員ノ執務時間ハ每週三十六時以下トス

第六條 市町村立小學校教員ハ補習科ノ設ケアル場合ニ於テハ必要ニ應シ其教授ヲ擔任スヘシ

市町村立小學校教員ハ前項ニ依リ補習科ノ教授ヲ擔任スヘキ場合ニ於テ相當ノ報酬ヲ受ケル
キハ前條ニ掲クル執務時間ノ制限以外ニ及フモ每週六時マテハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第七條 市町村立小學校長及教員並家族ハ府縣知事ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接ト間ハ
ス商業ヲ營ムコトヲ得ス

第八條 此規則ニ關スル細則ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ

市町村立小學校長及教員懲戒處分並私立小學校長及教員業務停止及免許狀褫奪ニ

關スル規則 (明治二十四年十一月文部省令第二十二號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第六十四條ニ基キ市町村立小學校長及教員懲戒處分並私立小學校長及教員業務停止及免許狀褫奪ニ關スル規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

市町村立小學校長及教員懲戒處分並私立小學校長及教員業務停止及免許狀褫奪ニ關スル規則

第一條 市町村立小學校長及教員ノ懲戒處分ヲ行フトキハ懲戒書ヲ交付スヘシ

第二條 市町村立小學校長及教員ノ懲戒處分ヲ行ハントスルトキハ其處分スヘキ行爲ニ關スル手續書ヲ本人ヨリ徵スヘシ

第三條 市町村立小學校長及教員ノ罰俸ハ一箇月分ノ十分ノ一ヨリ少カラス三箇月分ヨリ多カラサル俸ヲ奪フモノトス

罰俸ヲ徵スル法ハ其月俸額三分ノ一以下ハ一時ニ之ヲ徵シ三分ノ一ヲ超ユルトキハ數ノ滿ツルマテ毎月俸額三分ノ一ヲ徵スルモノトス

第四條 市町村立小學校長及教員ニシテ免職ノ處分ヲ受ケタル者ハ二箇年ヲ經ルニ非サレハ再ヒ教員タルコトヲ得ス

第五條 市町村立小學校長及教員ニシテ免職若クハ免許狀褫奪ノ處分ヲ受ケ訴願シタル者訴願ノ裁決ニ依リ其處分無効ニ歸シタルトキハ裁決ヲ受ケタル日ヨリ職務ニ復スルモノトス

第六條 第一條第二條第五條ノ規定ハ私立小學校長及教員ノ業務停止及免許狀褫奪ノ處分ニ關シ之ヲ適用ス

第七條 私立小學校長及教員ノ業務停止ハ一箇月以外二箇年以内トス

第八條 府縣知事ハ免職若クハ業務停止又ハ免許狀褫奪ノ處分ヲ行ヒタル者アルトキハ其族籍氏名並事由ヲ具シ文部大臣ニ開申スヘシ

免職又ハ業務停止ノ小學校長及教員再用

許可方 (明治二十七年一月文部省令第一號)

市町村立小學校長及教員ニシテ免職ノ處分ヲ受ケタル者又ハ私立小學校長及教員ニシテ業務停止ノ處分ヲ受ケタル者ニ對シ改悛ノ實ヲ認ムルトキハ明治二十四年文部省令第二十二號第四條及第七條ニ規定シタル期限内ト雖文部大臣ハ地方長官ノ具申ニ依リ事情ヲ酌量シ再ヒ小學校長及教員タルヲ許可スルコトアルヘシ

市町村立小學校教員勤續方

(明治二十四年二月文部省令第三號)

市町村立小學校廢止ノ際其ノ小學校教員ノ職ニ在ル者即日他ノ市町村立小學校教員ニ任セラレルトキハ勤續者トス

● 公立學校生徒集合シ躁暴奇異ノ舉動アル 時學校長教員及生徒懲戒方

(明治十八年一月文部省達第三號)

文部省本年(一月)第二號達ヲ以テ公立學校生徒取締ノ儀相達候ニ付テハ今後若シ右様ノ舉動有之ニ於テハ其情狀ニ因リ生徒ハ文部省明治十六年(十一月)第十八號達ニ據リ處分シ學校長教員等ハ文部省明治十四年(七月)第二十六號達同十六年(五月)第九號達及官吏懲戒例ニ據リ處分シ私立學校ハ停止スヘシ
此旨相達候事

● 學齡兒童ヲ保護スヘキ者ト認ムヘキ要件

(明治二十四年十一月文部省令第十六號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第二十條ニ基キ學齡兒童ヲ保護スヘキ者ト認ムヘキ要件ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 第一條 父母後見人戸主ハ左ノ順序ニ從ヒ學齡兒童ヲ保護スヘキモノトス但學齡兒童戸主タルトキハ第二條ニ依ルヘシ
- 一 父母
- 二 父母及戸主 父母共ニ戸主タラサルトキ
- 三 後見人 父母死亡シタルトキ又ハ父母生存スルモ失踪、心神喪失又ハ其他ノ事故ニ依リ其

義務ヲ行フコト能ハサルトキ

- 四 後見人及戸主 前款ノ場合ニ於テ後見人戸主タラサルトキ
前項ノ場合ニ於テ授業料及其他就學ニ關スル費用ハ戸主之ヲ負擔スヘシ
- 第二條 學齡兒童戸主タルトキハ父母後見人ハ左ノ順序ニ從ヒ之ヲ保護スヘキモノトス
- 一 父母
- 二 後見人 父母死亡シタルトキ又ハ父母生存スルモ失踪、心神喪失又ハ其他ノ事故ニ依リ其

義務ヲ行フコト能ハサルトキ

- 前項ノ場合ニ於テ授業料及其他就學ニ關スル費用ハ學齡兒童ヲ保護スヘキ者ニ於テ戸主ノ財産ヨリ之ヲ支辨スヘシ
- 第三條 第一條及第二條ニ於テ定ムルモノノ外府縣知事ハ文部大臣ノ許可ヲ受ケ便宜備主師匠等ニ就キテ學齡兒童ヲ保護スヘキ者ト認ムヘキ要件ヲ定ムルコトヲ得
- 第四條 第一條及第二條ニ掲グル學齡兒童ヲ保護スヘキ者其義務ヲ行フニ不便ナル場合ニ於テハ代人ヲ立ツヘシ
- 第一條及第二條ニ掲グル學齡兒童ヲ保護スヘキ者ニ於テ特別ノ事情アルカ爲メ代人ヲ立ツルコトヲ必要トスルトキハ市町村長ノ許可ヲ受ケヘシ
- 代人ニ關スル規則ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ

● 小學校祝日大祭日儀式規程

(明治二十四年六月文部省令第四號)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第十五條ニ基キ小學校ニ於ケル祝日大祭日ノ儀式ニ關スル規程ヲ設ケルコト左ノ如シ

小學校祝日大祭日儀式規程

第一條 紀元節、天皇節、元始祭、神嘗祭及新嘗祭ノ日ニ於テハ學校長、教員及生徒一同式場ニ參集シテ左ノ儀式ヲ行フヘシ

一 學校長教員及生徒

天皇陛下及

皇后陛下ノ 御影ニ對シ奉リ最敬禮ヲ行ヒ且

而陛下ヘ万歳ヲ奉祝ス

但未タ御影ヲ拜戴セサル學校ニ於テハ本文前段ノ式ヲ省ク

二 學校長若クハ教員、教育ニ關スル 勅語ヲ奉讀ス

三 學校長若クハ教員、恭シク教育ニ關スル 勅語ニ基キ

聖意ノ在ル所ヲ誨告シ又ハ

歷代天皇ノ 盛德、鴻業ヲ叙シ若クハ祝日大祭日ノ由來ヲ叙スル等其祝日大祭日ニ相應スル演說ヲ爲シ忠君愛國ノ志氣ヲ涵養センコトヲ務ム

四 學校長、教員及生徒、其祝日大祭日ニ相應スル唱歌ヲ合唱ス

第二條 孝明天皇祭、春季皇靈祭、神武天皇祭及秋季皇靈祭ノ日ニ於テハ學校長、教員及生徒一同式場ニ參集シテ第一條第三款及第四款ノ儀式ヲ行フヘシ

第三條 一月一日ニ於テハ學校長、教員及生徒一同式場ニ參集シテ第一條第一款及第四款ノ儀式

ヲ行フヘシ

第四條 第一條ニ掲ケル祝日大祭日ニ於テハ便宜ニ從ヒ學校長及教員、生徒ヲ率井テ體操場ニ臨

ミ若クハ野外ニ出テ遊戲體操ヲ行フ等生徒ノ心情ヲシテ快活ナラシメンコトヲ務ムヘシ

第五條 市町村長其他學事ニ關係アル市町村吏員ハ成ルヘク祝日大祭日ノ儀式ニ列スヘシ

第六條 式場ノ都合ヲ計リ生徒ノ父母親戚及其他市町村住民ニシテ祝日大祭日ノ儀式ヲ參觀スル

コトヲ得セシムヘシ

第七條 祝日大祭日ニ於テ生徒ニ茶菓又ハ教育上ニ裨益アル繪畫等ヲ與フルハ妨ナシ

第八條 祝日大祭日ノ儀式ニ關スル次第等ハ府縣知事之ヲ規定スヘシ

◎小學校ニ於テ祝日大祭日ノ儀式執行ノ際

唱歌用ニ供スル唱歌及樂譜ハ文部大臣ノ

認可ヲ經シメ竝ニ其歌譜漸次文部省ニテ

撰定頒布スルノ件 (明治二十四年十月文部省訓令第二號)

- 一 小學校ニ於テ祝日大祭日ノ儀式ヲ行フノ際唱歌用ニ供スル歌詞及樂譜ハ特ニ其採擇ヲ慎ムヘキ者ナルヲ以テ北海道廳長官府縣知事ニ於テ豫メ本大臣ノ認可ヲ經ヘシ但文部省ノ撰定ニ係ルモノ及他ノ地方長官ニ於テ一旦本大臣ノ認可ヲ經タルモノハ此限ニ在ラス
- 一 前項唱歌用ノ歌詞及樂譜ハ漸次文部省ニ於テ撰定頒布スヘシ

●小學校祝日大祭日儀式規程第一條第一款

但書施行ノ件 (明治二十五年六月文部省令第七號)

明治二十四年(六月)文部省令第四號小學校祝日大祭日儀式規程第一條第一款但書ノ場合ニ該當スルモ特ニ北海道廳長官府縣知事ノ許可ヲ得テ複寫シタル 御影若クハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ適當ト認メタル 御影ヲ奉藏セル學校ニ於テハ其本文前段ノ式ヲ行フヘシ

●小學校祝日大祭日儀式執行ニ關スル件

(明治二十六年五月文部省令第九號)

明治二十四年文部省令第四號ニ規定シタル儀式ハ第一條ニ依リ紀元節天長節ニ於テ之ヲ行ヒ第三條ニ依リ一月一日ニ之ヲ行フ者トシ他ノ大祭日及祭日ニ於テハ各學校ノ任意タルヘシ

●特別認可學校規則廢止並ニ從前學則ヲ

認可セル學校ニシテ或要件ニ具フル者

ハ中學校ノ學科程度ト同等以上ト認ム

ル件

(明治二十六年十一月文部省令第十五號)

一 明治二十一年文部省令第三號ヲ本月十日限廢止ス

一 明治二十一年文部省令第三號ニ依リ從前學則ヲ認可シタル私立學校ニシテ尋常中學校卒業ノ者若クハ尋常中學校ノ程度ニ依リ相當ナル豫備ノ學科ヲ修メタル者ヲ入學セシムルモノハ中學校ノ學科程度ト同等以上ト認メ仍徵兵令第十一條ニ依ルコトヲ得シム但將來從前ノ學則ヲ變更スル場合ニ於テハ地方長官ノ認可ヲ請フヘク地方長官ハ之ヲ文部大臣ニ開申スヘシ

●實業教育費國庫補助法 (明治二十七年六月法律第二十一號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル實業教育費國庫補助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
實業教育國庫補助法

第一條 實業教育ヲ獎勵スル爲ニ國庫ハ毎年度金十五萬圓ヲ支出シテ其ノ費用ヲ補助スヘシ

第二條 公立ノ工業農業商業學校、徒弟學校及實業補習學校ニシテ實業ノ教育ニ效益アリト認ムルトキハ文部大臣ハ其ノ學校ニ補助金ヲ交付スヘシ

地方官廳ノ認可ヲ經タル農工商組合ニ於テ設立シタル實業學校ハ文部大臣ノ特別ノ認定ニ依リ前項ニ準スルコトヲ得

第三條 各學校ニ交付スル補助金ハ其ノ設立者ノ負擔額ト同額以內ニ限ル

第四條 補助ヲ受クヘキ學校ハ文部大臣ノ認可シタル學則ニ依リ及同大臣ノ定ムル必要ノ條件ヲ充タスモノニ限ル

第五條 此法律ニ依リ補助ヲ受クル學校ノ設立者ハ補助年期間其ノ學校經費ヲ繼續支出スルノ義務アルモノトス

第六條 各學校ニ補助金ヲ交付スルハ五箇年ヲ以テ一期トス滿期ノ後必要ニ依リ仍之ヲ繼續スルコトヲ得但文部大臣ニ於テ學校ノ管理不適當ナリト認メタルトキ又ハ第四條其ノ他文部大臣ノ定ムル所ノ規則ニ違背シタルトキ又ハ第五條ノ義務ヲ盡スコト能ハサルトキハ補助年期間ト雖補助ヲ廢止若ハ停止スルコトヲ得

第七條 第二條ニ掲グル學校ノ教員ヲ養成スルノ必要アルトキハ文部大臣ハ第一條ニ掲グル金額ヨリ十分ノ一以内ヲ支出シ其ノ費用ニ充ツルコトヲ得

第八條 此ノ法律施行ノ爲ニ必要ナル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

附 則

第九條 此ノ法律ハ明治二十七年九月一日ヨリ施行ス

實業教育費國庫補助法施行規則

(明治二十七年六月文部省令第十四號)

實業教育費補助法施行規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

實業教育費國庫補助法施行規則

第一號 實業教育費國庫補助法ニ依リ補助ヲ受ケントスルトキハ府縣立學校ニ在リテハ府縣會ノ議決ヲ經地方長官ニ於テ其ノ他ノ學校ニ在リテハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スヘシ

- 一 學校ノ名稱位置
- 二 學則(入學ノ程度、學科課程、教授日數、教科書ヲ用井ルトキハ其ノ書名)

- 三 設備(校舍、校地、校具)
- 四 生徒定員及現員
- 五 職員履歷書
- 六 經費豫算ノ細目並學校ノ諸收入
- 七 學校設立以來ノ沿革及既往三箇年ノ收支計算
- 八 農工商組合ニ係ルモノハ組合規約及其ノ沿革

新ニ學校ヲ設立セントスル場合ニ於テ未タ職員ヲ定メサル者ハ其ノ履歷書ヲ具スルヲ要セス設
備ハ其ノ豫定書ヲ附スヘシ

第二條 補助ヲ受クヘキ學校ハ左ノ條件ニ依ル

- 一 明治二十三年十月三十日勅語ノ趣旨ニ基キ教育ノ精神ヲ誤ラサルコト
- 二 修業年限ハ二箇年以上タルコト
- 三 工業農業商業學校ノ每週教授時間ハ二十七時以上簡易農學校簡易商業學校徒弟學校實業補習學校ノ每週教授時間ハ十二時以上タルコト
- 四 工業農業商業學校ノ入學者ノ資格ハ尋常中學校第二級卒業又ハ修業年限四箇年ノ高等小學校卒業以上ニ於テ簡易農學校商業學校徒弟學校實業補習學校ハ尋常小學校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムルコト
- 五 工業農業商業學校ハ生徒百名以上徒弟學校及實業補習學校ハ五十名以上ヲ教授シ得ヘキ設備ヲ爲スコト
- 六 授業料ヲ徵收スル場合ニ於テ其ノ額及徵收方法ハ文部大臣ノ認可ヲ受クルコト

第三條 補助ヲ受クル學校ノ經費豫算ハ每會計年度前三十日ヲ限リ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ其ノ功程及收支計算ハ每會計年度經過後六十日以内ニ文部大臣ニ報告スヘシ

第四條 各學校ニ交付スル補助金ハ每會計年度豫算ヨリ其ノ學校ノ授業料及雜收入ヲ以テ支辨スルコトヲ得ル金額ヲ控除シタル經費ノ半額以内トス但學校ノ基本財産ヨリ生スル收入ハ控除スルノ限ニアラス

第五條 監督官廳ニ於テ必要ト認ムルトキハ吏員ヲ派シテ補助ヲ受クル學校ノ帳簿ヲ檢閲セシムルコトアルヘシ

第六條 此ノ規則ニ依リ文部大臣ニ提出スヘキ文書ハ凡テ地方長官ヲ經由スヘシ

第一條ノ申請書ヲ進達スル場合ニ於テ地方長官ハ精査ノ上詳細ナル意見ヲ附シ併セテ其ノ地方實業ノ情況ヲ具申スヘシ

第七條 補助金交付ノ手續ハ別ニ定ムル所ニ依ル

●學校教員ノ行動ニ關スル訓示

(明治三十年十月文部省訓令第十號)

明治二十六年文部省訓令第十一號ヲ廢止シタルニ依リ更ニ訓令スルコト左ノ如シ

抑モ國運ノ泰否ハ教育ノ弛張ト相仍ル者最モ密ナリ而シテ教育ノ弛張ハ一ニ教育ヲ司ル者ノ責務ニ屬ス故ニ學校教員ハ已テ持スルコト謹嚴端正ニ務ニ服スルコト恪勤摯實ニ克ク身ヲ以テ斯道ニ殉スルノ至誠アルニアラスハ職守ヲ完ウスルコト雖シト謂フヘシ若シ夫レ學校教員タル者政論ニ參與シ政爭ニ狂奔スルカ如キコトアラシカ職務上ノ公平威信ヲ保チ得ヘカラサルノミナラス教授

上ノ懸篤縝密ヲ缺キ教育爲メニ萎靡シ延テ國運ノ進歩ヲ阻遏スルニ至ランコト必セリ是レ現行法規ノ學校教員ニ政談政社ニ參與スルコトヲ嚴禁セル所以ナリ

學校教員合同シテ學術ヲ研磨シ學制ヲ討議シ言論ニ出版ニ各其意見ヲ交換シ見聞ヲ擴充シ以テ其職守ヲ完ウセンコトヲ計リ時ニ或ハ公衆ヲ會シテ學術ノ普及ヲ務ムルカ如キハ固ヨリ妨ケサル所トス

政談政社ト學術上ノ集會結社トノ分界時ニ或ハ明確ヲ缺クコトナキナ保セサルカ故ニ之ヲ取締ルニ苛察ニ涉ル可カラサルハ固ヨリナリト雖モ事務モ明ニ法規ニ觸ルル者アルニ於テハ斷乎タル所置ニ出テサル可カラサルモ亦明ナリ明治二十六年十月第十一號訓令ノ趣旨亦之ニ外ナラス其名ハ學術上ノ出版若クハ集會結社ニシテ其講談論議スル所單ニ學術ヲ講究シ學制ヲ討論シ自他ノ參考ニ資スルニ止マラスシテ或ハ著作ノ頒布ニ依リ或ハ辯舌ノ感動力ニ依リテ公衆ヲ挑發シ或ハ多衆ノ勢力ヲ恃ミテ上司ニ迫リ依テ以テ公事ノ進行ヲ左右セントスルカ如キコトアラハ漸ク學術上ノ出版若クハ講談結社タル性質ヲ失ヒ政論若クハ政談政社ニ化シ去ルノ恐アルニ依リ學校教員ヲシテ自ラ誤ルコトナカラシメンコトヲ警告シタルニ過ギス然ルニ其用語稍盡ササリシ所アリシカ爲メ或ハ反テ疑惑ヲ惹キ適從スル所ヲ失ハシメタルノ憾ナキ能ハス是レ茲ニ該訓令ヲ廢止スル所以ナリ

然リト雖モ教員タル者ハ徒ニ上司ニ反抗シ他人ヲ誹毀シ又ハ公衆ヲ挑發スルカ如キ行爲ハ常ニ之ヲ慎ムヘキハ勿論出版集會若クハ結社ニシテ其目的單ニ學術若クハ制度ノ研究ニ止マラス或ハ公衆ニ懇フルノ言論ニ依リ又ハ多衆ノ結合力ヲ利用シテ公事ノ進行ヲ左右シ若クハ公法場裏ノ實行ヲ企圖スル者ノ如キハ教員ニ於テ之ニ與ルハ往往法規ニ觸ルルノ嫌アルノミナラス教員タル者ノ

高尚ナル職務及ヒ純潔ヲ重スヘキ地位ト全然相容レサル所ナルカ故ニ萬一此ノ如キ心得ノ者アル場合ニ於テハ教育行政ノ監督上嚴重ニ取締ヲ爲スヘシ

◎學位令

(明治二十年五月勅令第十三號)

朕學位令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

學位令

第一條 學位ハ博士及大博士ノ二等トス

第二條 博士ノ學位ハ法學博士醫學博士工學博士文學博士理學博士ノ五種トス

第三條 博士ノ學位ハ文部大臣ニ於テ大學院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者ニ之ヲ授ケ又ハ之ト同等以上ノ學力アル者ニ帝國大學評議會ノ議ヲ經テ之ヲ授ケ

第四條 大博士ノ學位ハ文部大臣ニ於テ博士ノ會議ニ付シ學問上特ニ功績アリト認メタル者ニ閣議ヲ經テ之ヲ授ケ

第五條 本令ニ關スル細則ハ文部大臣之ヲ定ム

◎學位令細則

(明治二十年六月文部省令第四號)

本年五月勅令第十三號學位令第五條ニ基キ學位令細則ヲ定ムルコト左ノ如シ

學位令細則

第一條 博士ノ學位ハ左ノ區別ニ從ヒ之ヲ授ケ

法科大學所設ノ學科ヲ專攻セシ者ニハ

法學博士

醫科大學所設ノ學科ヲ專攻セシ者ニハ

醫學博士

工科大學所設ノ學科ヲ專攻セシ者ニハ

工學博士

文科大學所設ノ學科ヲ專攻セシ者ニハ

文學博士

理科大學所設ノ學科ヲ專攻セシ者ニハ

理學博士

第二條 大學院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者アルトキハ帝國大學總長ノ具申ニ依リ文部大臣之ニ博士ノ學位ヲ授ケ

第三條 文部大臣ニ於テ大學院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者ト同等以上ノ學力アリト思慮スル者アルトキハ帝國大學評議會ノ議ニ付シ評議官總數三分ノ二以上之ヲ是認スルニ於テハ文部大臣之ニ博士ノ學位ヲ授ケ

第四條 博士ノ學位ヲ得ント欲スル者ハ文部大臣ニ申請スルコトヲ得但申請スル者ハ其履歷書及其專攻セル學科ノ範圍内ニ屬スル自著ノ論文一編ヲ差出スヘシ

第五條 帝國大學評議會ハ第三條ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ試験ヲ行フコトヲ得但試験ヲ受ケルト否トハ本人ノ隨意トス

第六條 文部大臣ニ於テ學問上特ニ功績アリト思慮スル者アルトキハ博士ノ會議ニ付シ出席博士三分ノ二以上之ヲ是認スルニ於テハ文部大臣之ヲ閣議ニ提出シ其認可ヲ得テ大博士ノ學位ヲ授

第七條 博士ノ會議ハ文部大臣指命スル所ノ委員之ヲ整理ス又博士二十名以上出席スルニアラサ
レハ之ヲ開カサルモトス

第八條 博士ノ會議ヲ開クトキハ五週日前ニ官報ヲ以テ開會ノ場所及時日ヲ廣告ス

第九條 第五條ノ試験ニ關スル規則ハ帝國大學總長之ヲ定ム

第十條 學位記ノ様式左ノ如シ

(學位記様式略之)

◎帝國大學改稱ノ件

(明治三十年六月勅令第二百八號)

朕帝國大學改稱ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國大學ヲ東京帝國大學ト改稱ス

◎京都帝國大學ニ關スル件

(明治三十年六月勅令第二百九號)

朕京都帝國大學ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 京都ニ帝國大學ヲ置キ京都帝國大學ト稱ス

第二條 京都帝國大學ノ分科大學ハ帝國大學令第九條ニ依ラス法科大學醫科大學文科大學及理工
科大學トス

第三條 京都帝國大學ノ分科大學及分科大學中ノ各學科開設ノ期日ハ文部大臣之ヲ定ム

學事終

第二十四類 衛生醫藥

◎傳染病豫防法

(明治三十年三月法律第三十六號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル傳染病豫防法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
傳染病豫防法

第一條 此ノ法律ニ於テ傳染病ト稱スルハ虎列刺、赤痢、腸室扶私、痘瘡、發疹、猩紅熱、實布
埜利亞(格魯布ヲ含ム)及「ペスト」ヲ謂フ

前項ニ掲クル八病ノ外此ノ法律ニ依リ豫防方法ノ施行ヲ必要トスル傳染病アルトキハ主務大臣
之ヲ指定ス

第二條 傳染病流行シ若ハ流行ノ虞アルトキハ地方長官ハ其ノ傳染病ノ疑似症ニ對シ此ノ法律ノ
全部若ハ一部ヲ適用スルコトヲ得

第三條 醫師傳染病患者ヲ診斷シ若ハ其ノ死體ヲ檢案シタルトキハ其ノ家人ニ消毒方法ヲ指示シ
且直ニ患者若ハ死體所在地ノ警察官吏市町村長區長戶長檢疫委員又ハ豫防委員ニ届出ヘシ其ノ
轉歸ノ場合亦同シ

第四條 傳染病又ハ其ノ疑アル患者若ハ其ノ死者アリタル家ニ於テハ速ニ醫師ノ診斷若ハ檢案ヲ
受ケ又ハ直ニ其ノ所在地ノ警察官吏市町村長區長戶長檢疫委員又ハ豫防委員ニ届出ヘシ
前項ノ届出ヲ爲スヘキ義務者ハ一般民家ニ在リテハ戶主若シ之ニ代ルヘキ者、社寺、公私立ノ學
校病院、製造所又ハ船舶、會社、各種事務所、貸席、興行場其ノ他集會ノ場所ニ在リテハ其ノ首長
管理人又ハ代理者トス

第五條 傳染病患者アリタル家ニ於テハ醫師又ハ當該吏員ノ指示ニ從ヒ清潔方法及消毒方法ヲ行フヘシ

當該吏員ハ傳染病豫防上必要ト認ムルトキハ其ノ近隣ノ家又ハ患者ト交通ヲ爲シタル家ニモ清潔方法及消毒方法ヲ施行セシムヘシ

第六條 清潔方法及消毒方法ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 傳染病豫防上必要ト認ムルトキハ當該吏員ハ傳染病患者ヲ傳染病院又ハ隔離病舎ニ入ラシムヘシ

健康者ノ隔離ヲ必要ト認ムルトキハ隔離所ニ入ラシムルコトヲ得

第八條 當該吏員ニ於テ必要ト認ムルトキハ一定ノ日時間傳染病患者アリタル家及其ノ近隣ノ家ノ交通ヲ遮斷スルコトヲ得

第九條 傳染病患者及其ノ死體ハ當該吏員ノ認可ヲ經ルニ非サレハ他ニ移スコトヲ得ス

第十條 傳染病毒ニ汚染シ若ハ汚染ノ疑アル物件ハ當該吏員ノ認可ヲ受クルニ非サレハ使用、授與、移轉、遺棄又ハ洗滌スルコトヲ得ス

第十一條 傳染病患者ノ死體ハ當該吏員ニ於テ充分ト認ムル消毒方法ヲ施シタル後ニ非サレハ埋葬スヘカラス

傳染病患者ノ死體ハ醫師ノ檢案ニ依リ當該吏員ノ認可ヲ經テ二十四時間内ニ埋葬スルコトヲ得

第十二條 傳染病患者ノ死體ハ火葬スヘシ但所轄警察官署ノ許可ヲ經タルトキハ此ノ限ニ在ラズ

傳染病患者ノ死體ヲ土葬シタルトキハ三箇年ヲ經過スルニ非サレハ他ニ改葬スルコトヲ得ス但

シ公共ノ工事ノ爲必要アル場合ニ於テ所轄警察官署ノ許可ヲ經タルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十三條 死體ヲ既ニ埋葬シ若ハ埋葬セムトスル場合ニ於テ傳染病患者タリシ疑アルトキハ當該吏員ハ死體及家屋其ノ他ニ對シ更ニ相當ノ處分ヲ爲サシムルコトヲ得

第十四條 傳染病豫防上必要ト認ムルトキハ當該吏員ハ其ノ事由ヲ戶主、首長又ハ管理人ニ告知シ家宅、船舶其ノ他ノ場所ニ立入ルコトヲ得但當該吏員タルノ證票ヲ示スヘシ

第十五條 傳染病流行シ若ハ流行ノ虞アルトキハ市町村ハ地方長官ノ指示ニ從ヒ市制第六十一條町村制第六十五條ニ依リ傳染病豫防委員ヲ置キ檢疫豫防ノ事ニ從ハシムヘシ但市町村會ノ議決ニ依ルノ限ニ在ラズ

豫防委員ニハ醫師ヲ加フヘシ其ノ醫師ヨリ出ツル者ハ市町村長之ヲ選任ス

第十六條 市町村ハ地方長官ノ指示ニ從ヒ市町村内ノ清潔方法及消毒方法ヲ施行シ醫師其他ノ豫防上必要ナル人員ヲ雇入レ及器具、藥品其ノ他ノ物件ヲ設備スヘシ

第十七條 市町村ハ地方長官ノ指示ニ從ヒ傳染病院、隔離病舎、隔離所又ハ消毒所ヲ設置スヘシ傳染病院、隔離病舎、隔離所又ハ消毒所ノ設備及管理ノ方法ハ地方長官之ヲ定ム

第十八條 傳染病流行シ若ハ流行ノ虞アルトキハ地方長官ハ檢疫委員ヲ置キ檢疫豫防ニ關スル事務ヲ擔任セシメ及特ニ船舶汽車ノ檢疫ヲ行ハシムルコトヲ得

船舶汽車ノ檢疫ヲ行フ場合ニ於テハ其ノ船舶若ハ其ノ船舶汽車ノ乘客乗組人ニシテ病毒感染ノ疑アル者ヲ必要ノ日時間停留シ及無償ニテ當該吏員又ハ醫師ヲ船舶汽車中ニ乗込マシムルコトヲ得

船舶汽車ノ檢疫ニ於テ發見シタル患者ハ其ノ地市町村立ノ傳染病院又ハ隔離病舎ニ收容治療セ

シムルコトヲ得市町村ハ相當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス但之カ爲特ニ要シタル費用ハ
地方長官ニ請求スルコトヲ得
前各項ノ外檢疫委員ノ設置及船舶汽車ノ檢疫ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
第十九條 地方長官ハ傳染病豫防上必要ト認ムルトキハ左ノ事項ノ全部又ハ一部ヲ施行スルコト
ヲ得

- 一 傳染病患者ノ有無ヲ檢診セシムルコト
 - 二 市街村落ノ全部又ハ一部ノ交通ヲ遮斷スルコト
 - 三 祭禮、供養、興行、集會等ノ爲人民ノ群集スルコトヲ制限シ若ハ禁止スルコト
 - 四 古著、襪襪、古綿其ノ他病毒傳播ノ虞アル物件ノ出入ヲ制限シ若ハ停止シ又ハ其ノ物件ヲ
廢棄スルコト
 - 五 傳染病毒傳播ノ媒介トナルヘキ飲食物ノ販賣授受ヲ禁止シ又ハ之ヲ廢棄スルコト
 - 六 船舶ニ醫師ノ雇入ヲ命シ又ハ汽車船舶若ハ多數人民ノ集合スル場所ニ豫防上必要ノ設備ヲ
爲サシムルコト
 - 七 清潔方法、消毒方法ノ施行ヲ命シ及井戸、上水、下水、溝渠、芥溜、厠圍ノ新設改築變更
若ハ廢止ヲ命シ又ハ其ノ使用ヲ停止スルコト
 - 八 一定ノ場所ノ漁撈、游泳又ハ其ノ水ノ使用ヲ必要ナル日時間制限シ若ハ停止スルコト
- 第二十條 諸官廳、集治監及官立ノ學校、病院、製造所等ニ傳染病發生シ若ハ發生ノ虞アルトキ
ハ其ノ首長ハ地方長官ト協議シ此ノ法律ニ準シ豫防方法ヲ施行スヘシ
陸海軍所屬ノ部隊、軍艦等ニ傳染病發生シ若ハ發生ノ虞アルトキハ其ノ首長ハ此ノ法律ニ準シ

各其ノ所定ノ規則ニ依リ又必要アル場合ニ於テハ地方長官ト協議シ豫防方法ヲ施行スヘシ
第二十一條 右ノ諸費ハ市町村ノ負擔トス

- 一 豫防委員ニ關スル諸費
 - 二 市町村ニ於テ施行スル清潔方法消毒方法及種痘ニ關スル諸費
 - 三 豫防救治ノ爲雇入タル醫師其ノ他ノ人員並豫防上必要ナル器具、藥品其ノ他ノ物件ニ關ス
ル諸費
 - 四 傳染病院、隔離病舎、隔離所及消毒所ニ關スル諸費
 - 五 豫防救治ニ從事シタル者ニ給スヘキ手當、療治料及其ノ遺族ニ給スヘキ救助料、弔祭料
 - 六 第八條ニ依レル交通遮斷ニ關スル諸費及交通遮斷ノ爲又ハ一時營業ヲ失ヒ自活シ能ハサル
者ノ生活費
 - 七 市町村内ニ於テ發見セル傳染病貧民患者並死者ニ關スル諸費
其ノ他市町村ニ於テ施行スル豫防事務ニ關スル諸費
- 第二十二條 左ノ諸費ハ府縣稅又ハ地方稅ノ負擔トス
- 一 檢疫委員ニ關スル諸費
 - 二 船舶又ハ汽車ノ檢疫ニ關スル諸費
 - 三 第十九條第二ニ依レル交通遮斷ニ關スル諸費及交通遮斷ノ爲自活シ能ハサル者ノ生活費
其ノ他府縣ニ於テ施行スル豫防事務ニ關スル諸費
- 第二十三條 地方長官ハ衛生組合ヲ設ケ清潔方法消毒方法其ノ他傳染病ノ豫防救治ニ關シ規約ヲ
定メシメ之ヲ履行セシムルコトヲ得

市町村ハ其ノ市町村内ノ衛生組合ニ於テ傳染病豫防救治ノ爲支出スル費用ノ全部又ハ一部ヲ補助スルコトヲ得

第二十四條 第二十一條第二十三條第二項ノ支出ニ對シテハ命令ノ規定ニ從ヒ府縣稅又ハ地方稅ヨリ市町村ニ補助スヘシ

第二十五條 國庫ハ第二十二條第二十四條ノ府縣稅又ハ地方稅ノ支出ニ對シ其ノ六分一ヲ補助スルモノトス

第二十六條 此ノ法律若ハ此ノ法律ニ基キテ發スル命令ニ依リ清潔方法、消毒方法ヲ施行スヘキ義務者之ヲ施行セス又ハ之ヲ施行スルモ當該吏員ニ於テ充分ナラスト認ムルトキ及必要ノ時限内ニ施行シ得スト認タルトキハ當該吏員之ヲ施行シ其ノ費用ハ市町村ヲシテ支辨セシムヘシ此ノ場合ニ於テ市町村ハ其ノ費用ヲ義務者ヨリ追徴スルコトヲ得

私人ニ於テ前項ノ費用ヲ指定ノ期限内ニ納付セサルトキハ國稅滯納處分ニ關スル規程ニ依リ之ヲ徵收ス

第二十七條 此ノ法律若ハ此ノ法律ニ基キテ發スル命令ニ依リ市町村又ハ私人ニ於テ施爲スヘキ事項ヲ施爲セス若ハ之ヲ施爲スルモ充分ナラスト認ムルトキ又ハ必要ノ時限内ニ施爲シ得スト認ムルトキハ地方長官ハ府縣稅又ハ地方稅ヲ以テ之ヲ施行シ其ノ費用ヲ市町村又ハ私人ヨリ徵收スルコトヲ得

私人ニ於テ前項ノ費用ヲ指定ノ期限内ニ納付セサルトキハ國稅滯納處分ニ關スル規程ニ依リ之ヲ徵收ス

第二十八條 第二十六條及第二十七條ノ費用追徴ニ關シ不服アル私人ハ訴願法ニ依リ訴願スルコ

トヲ得

第二十九條 此ノ法律若ハ此ノ法律ニ基キテ發スル命令ニ依リ當該吏員ノ指示命令シタル事項ヲ指定ノ期限内ニ履行セサル者ハ五圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第三十條 醫師傳染病患者ヲ診斷シ若ハ其ノ死體ヲ檢案シタル後十二時間以内ニ届出ヲ爲サス又ハ虛偽ノ報告届出ヲ爲シタルトキハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十一條 第四條第五條第一項第九條第十條第十一條第一項第十二條ニ違背シタル者第五條第二項ニ依リ清潔方法及消毒方法ヲ施行セサル者交通遮斷ヲ犯シタル者又ハ醫師ニ請託シテ第三條ノ届出ヲ爲サシメス若ハ其ノ届出ヲ妨ケサル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第三十二條 此ノ法律中ノ規程ニシテ其ノ準用シ得ヘキモノヲ除ク外北海道沖繩縣ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

此ノ法律中市町村ニ關スル規程ニシテ其ノ準用シ得ヘキモノヲ除ク外市制町村制ヲ施行セサル地ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條 海外諸港及臺灣ヨリ來ル船舶ニ對シ施行スル檢疫ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第三十四條 此ノ法律ヲ施行スル爲ニ必要ナル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十五條 此ノ法律ハ明治三十年五月一日ヨリ施行ス但第二十四條及第二十五條ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

第三十六條 明治十三年布告第三十四號傳染病豫防規則ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

◎傳染病豫防法第二十四條補助ニ關スル件

(明治三十年七月内務省令第十八號)

傳染病豫防法第二十四條補助ニ關スル件左ノ通定ム

府縣知事ハ傳染病豫防法第二十四條ニ依リ府縣稅又ハ地方稅ヨリ市町村ニ對スル補助ニ關シ左ノ各項ニ依リ規程ヲ定メ内務大臣ノ認可ヲ受ケヘシ

- 一 傳染病豫防法第二十一條及第二十三條第二項ノ支出總額ニ對シ府縣稅又ハ地方稅ヨリ各市町村ニ補助スル場合ハ精算額ノ六分ノ一以上二分ノ一以下トス但支出ニ伴フ收入アルトキハ支出總額ヨリ其ノ收入ヲ控除シタル額ニ對シ本項ノ補助率合ヲ定ムルコトヲ得
- 二 傳染病豫防法第二十一條及第二十三條第二項ノ支出中特ニ費途ヲ指定シテ別段ノ補助率合ヲ定メ又ハ指定シタル費途ニ限り補助ヲ爲シ又ハ市町村ノ負擔ニ應シテ別段ノ補助率合ヲ定ムルコトヲ得但本項ニ依リ算出シタル補助ノ金額前項六分ノ一ヲ下ルトキハ六分ノ一迄増額シ二分ノ一ヲ超ルトキハ二分ノ一迄減額スヘシ
- 三 市町村ノ支出額其ノ負擔ニ堪ヘスト認ムルトキ其ノ他特別ノ事由アルトキハ二分ノ一以上全部迄ヲ補助スルコトヲ得
- 四 補助ハ現品ヲ以テ之ヲ交付スルコトヲ得但金額ニ換算スヘシ

◎清潔及消毒方法

(明治三十年五月内務省令第十三號)

傳染病豫防法第六條ニ依リ清潔方法消毒方法左ノ通定ム

第一章 清潔方法

第一條 清潔方法ノ要項左ノ如シ

- 一 傳染病患者アリタル家ニ於テハ殊ニ患者ノ居室其ノ他病毒汚染ノ疑アル場所ニ注意シ消毒方法ノ施行ヲ了リタル後掃除ヲ行ヒ其ノ塵芥ハ之ヲ燒却スヘシ
- 二 家屋掃除ノ際床下ノ塵芥其ノ他ノ不潔物ハ之ヲ取除ケ燒却スヘシ
- 三 傳染病患者アリタル家ノ井戸流臺所流便所又ハ芥溜ノ掃除ヲ要スルトキハ消毒方法ノ施行ヲ了リタル後之ヲ行フヘシ但必要ノ場合ニハ修理改造及井戸浚ヲ爲スヘシ
- 四 傳染病豫防法第五條第二項ノ場合ニ於テハ前各號ヲ準用スヘシ
- 第二條 傳染病流行ニ際シ溝渠ヲ攪拌スルハ却テ病毒蔓延ノ媒介ヲ爲スノ虞ナシトセス必要ノ場合ニハ消毒藥生石灰末若クハ石灰ヲ投シタル後浚滌スヘシ
- 第三條 傳染病ノ流行前又ハ流行後ニ於テ清潔方法ヲ行ヒ家宅ノ掃除溝渠ノ浚滌ヲ爲ス場合ニ於テハ濫リニ消毒藥ヲ撒布スヘカラス
- 第四條 溝渠ヲ浚ヘタル汚泥塵芥ハ直ニ一定ノ運搬器ニ入レ健康上有害ナラサル様一定ノ場所ニ棄ツヘシ汚泥ヲ踏傍ニ散逸セシメ又ハ之ヲ堆積スヘカラス

第二章 消毒方法

第五條 消毒方法ハ左ノ四種トス

- 一 燒却
- 二 蒸汽消毒
- 三 煮沸消毒

四 藥物消毒

第六條 燒却ニ適スルモノハ左ノ如シ

一 傳染病患者若クハ死體ニ用ヒタル被服、臥具、布片、便器其ノ他ノ器具等ニシテ甚シク病毒ニ汚染シ消毒後再ヒ用ニ供スル目的ナキモノ

二 傳染病患者ノ吐瀉物其ノ他ノ排泄物等

第七條 蒸汽消毒ニ適スルモノハ左ノ如シ

一 衣服、臥具、布片等總テ絹布、綿布、麻布、毛織物類

二 硝子器陶器、磁器、其ノ他鑲製若クハ木製品類等ニシテ汽熱ニ堪フルモノ

第八條 蒸汽消毒ヲ施行スルトキハ左ノ各項ニ注意スルヲ要ス

一 革類、革製品、漆器其ノ他ノ塗物類、護謨製品、護謨附品、糊附品、膠附品、毛皮、象牙、鼈甲、角ノ類ハ物品ヲ損スルヲ以テ蒸汽消毒ヲ避ケヘシ

二 被服類ニ蒸汽消毒ヲ施スニハ襟メ袖中又ハ衣囊中ヲ檢索シ若シ彈丸、火藥等爆發又ハ發火シ易キ物品アルトキハ之ヲ取出スヘシ又消毒中他物ニ染色ノ恐アルモノ等ハ蒸汽消毒ヲ避ケヘシ

三 蒸汽消毒ハ流通蒸汽ヲ用ヒ成ルヘク消毒中ノ空氣ヲ驅逐シ一時間以上攝氏百度以上ノ濕熱ニ觸レシムヘシ

第九條 煮沸消毒ニ適スルモノハ蒸汽消毒ニ適スルモノニ同シ

煮沸消毒ハ沸騰後一時間以上煮沸スヘシ

第十條 藥物消毒ニ供スル藥劑並其ノ用法ハ左ノ如シ

一 石炭酸水(二十倍)結晶石炭酸五分、鹽酸一分、水九十四分

石炭酸水ヲ製スルニハ石炭酸五分ニ凡水一分ヲ加ヘ攪拌又ハ振盪シツツ徐徐ニ定量ノ水ヲ注キ後鹽酸一分ヲ加フヘシ溫湯ヲ用フレハ其ノ溶解殊ニ速カナリトス但使用ノ際ハ毎同振盪スルヲ要ス

石炭酸水ハ各種物件ノ消毒ニ適ス但使用ノ際ハ左ノ諸件ニ注意スヘシ

一 吐瀉物其ノ他排泄物ニハ同容量ヲ加ヘ能ク攪拌スヘシ

二 器具室内等ヲ消毒スルニハ擦拭又ハ撒布スヘシ

三 手足等ヲ消毒スルニハ洗滌シタル後更ニ淨水ヲ以テ洗淨スヘシ

四 衣類等ヲ消毒スルニハ鹽酸ヲ加ヘサルモノヲ用ヒ十二時間以上浸漬シ其ノ後淨水ヲ以テ更ニ洗濯スヘシ

二 昇汞水(千倍)昇汞一分鹽酸十分水九百八十九分

昇汞水ヲ製スルニハ昇汞ヲ定量ノ水ニ溶解シ後鹽酸ヲ加フヘシ

昇汞水ハ猛毒ニシテ無臭無臭ナル爲メ危險ナ速キ易キノ虞アリ故ニ貯藏使用ノ際充分ニ注意ヲ加ヘ其ノ危險ヲ防カン爲メ凡十萬分ノ一ノ「フロキシシ」ヲ加ヘテ著色シ一見識別シ易カラシムルヲ要ス但金屬製ノ器ニ貯藏スヘカラス

昇汞水ハ陶器、硝子器又ハ木製器具ノ消毒ニ用フヘシ飲食器、玩具、疊、敷物ノ消毒飲料水ニ滲透スヘキ場所ノ消毒及金屬製品、糞便、吐瀉物ノ消毒ニ用フヘカラス

三 生石灰(少量)水ヲ澆ケハ熱ヲ發シテ崩壞スルモノ

生石灰末(生石灰ニ少量ノ水ヲ加ヘ粉末ト爲シタルモノ)

生石灰末ハ用ニ臨ミテ之ヲ製シ吐瀉物其ノ他排泄物、溝渠、芥溜、床下等ノ消毒ニ用フヘシ
吐瀉物其ノ他ノ排泄物ヲ消毒スルニハ少クモ其ノ容量五十分一ヲ投シ能ク攪拌スヘシ溝
渠、芥溜ニ對スル量ハ之ニ準シ床下ニ在テハ其ノ全面ニ撒布スヘシ

石灰乳(十倍)生石灰一分水九分

石灰乳ヲ製スルニハ一分ノ生石灰ニ九分ノ水ヲ徐徐ニ加ヘ能ク攪拌スヘシ其ノ用量ハ生石
灰末ノ五倍トス但石灰乳ハ用ニ臨ミテ之ヲ製シ使用ノ際ニハ毎回攪拌スルヲ要ス

普通石灰ヲ生石灰末石灰乳ニ代用スル場合ニハ倍量ヲ用フヘシ

木灰ハ生石灰等ヲ得ルコト能ハサル場合ニ於テ虎列刺病患者ノ吐瀉物赤痢病患者腸壁
扶私病患者ノ排泄物ノ消毒ニ代用スルコトヲ得其ノ用量ハ吐瀉物排泄物ノ五分ノ一トス

灰汁トシテ使用スルニハ木灰一分ニ水四分ヲ加ヘ之ヲ煮沸シテ製スヘシ其ノ用量ハ吐瀉物
排泄物ノ同容量トス但石灰灰燻灰ハ木灰ト同一ノ效ナシトス

四 格魯兒石灰水(二十倍)格魯兒石灰五分水九十五分

格魯兒石灰水ノ應用並用量ハ石灰乳ニ同シ但用ニ臨ミテ製スヘシ

第十一條 消毒方法ノ應用ハ左ノ如シ

第一 患者

傳染病患者治癒シタルトキハ全身入浴ヲ行ヒ衣服ヲ更メシムヘシ場合ニ依リテハ溫濕布ヲ以
テ拭淨シ入浴ニ代ユルモ妨ケナシ

第二 死體

傳染病死體ヲ棺ニ歛ムルニハ其ノ被服ニ昇永水若クハ石炭酸水ヲ充分ニ撒布シ又ハ昇永水若

クハ石炭酸水ニ浸漬シタル布ヲ以テ包ミ又ハ石灰若クハ木灰ヲ以テ填ツヘシ

第三 看病人病家ノ家人其ノ他病者ニ觸接シタル者

看病人、病家ノ家人其ノ他消毒方法ノ數行又ハ患者、死體、排泄物 運搬等ノ爲病者ニ觸接
シタル者ハ時時若クハ其ノ都度手足及衣服ヲ消毒シ入浴スヘシ

第四 患者、死體等ノ運搬器

傳染病患者、死體等ヲ運搬シタル駕籠釣臺ノ類ハ使用後毎回昇永水若クハ石炭酸水ヲ以テ擦
拭スヘシ

第五 便所、芥溜、溝渠等

傳染病患者ノ吐瀉物其ノ他排泄物ノ入りタル便所ノ糞池、肥料溜等ニハ生石灰末、石灰乳若
クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ能ク攪拌スヘシ但便所ハ石炭酸水ヲ以テ消毒シタル後直ニ使用シ糞
便ハ一週間ノ後肥料ニ供セシムルコトヲ得

病者ニ汚染シタル土地ニハ石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ消毒スヘシ

病者ノ混入シタル芥溜ニハ石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ其ノ塵芥ハ燒却スヘシ

病者ノ混入シタル溝渠ニハ生石灰末、石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌クヘシ

第六 衣服器具敷物等

傳染病患者ノ着用セル衣類臥具並其ノ病室ニ在ル諸器具又ハ看病人及患者ニ接シタル家人ノ
衣類其ノ他病者汚染ノ虞アルモノハ各物件ノ種類ニ從ヒ消毒方法ヲ施行スヘシ

第八條第一ニ掲ケタル物品ノ類ハ曹達石鹼(毛皮ニハ避ケヘシ)ヲ以テ洗ヒ又ハ石炭酸水ヲ以
テ拭淨シ若クハ之ヲ撒布スヘシ

第五條ニ掲クル各消毒方法ヲ施行スルコト能ハサルモノハ日光ニ曝シ若クハ大氣中ニテ乾燥セシムヘシ

第七 患者ノ居室

石炭酸水若クハ昇汞水ヲ以テ室内各部ヲ拭淨スヘシ消毒後ハ日光ノ射入空氣ノ流通ヲ良クシ乾燥セシムルヲ要ス

第八 汽車

傳染病患者若クハ死體アリタル汽車内ノ消毒ハ第七ニ準スヘシ傳染病患者ノ吐瀉物其ノ他排泄物ニ對シテハ消毒藥ヲ混シ適宜處置スヘシ

車室ニ附屬スル便所ハ石炭酸水ヲ以テ消毒スヘシ

第九 船舶

傳染病患者若クハ死體アリタル船室内ノ消毒ハ第七第八ニ準スヘシ其ノ他ノ場所ニ對シテハ消毒藥ノ撒布擦拭等適宜處分スヘシ

船底水ニハ其容量二百分一ノ生石灰末ヲ加ヘ二十四時間ヲ經タル後汲出サシム

傳染病豫防法施行規則

(明治三十年五月内務省令第十一號)

傳染病豫防法施行規則左ノ通定ム

傳染病豫防法施行規則

第一條 警視總監府縣知事ハ其ノ管内ニ傳染病流行ノ兆アリト認ムルトキ及傳染病豫防法第一條ニ掲クル八病ノ外同法ニ依リ豫防方法ノ施行ヲ必要ト認ムル傳染病發生シタルトキハ其ノ性状

ヲ記シテ速ニ内務大臣ニ申報スヘシ但前段ノ場合ニ於テハ鄰接若クハ船舶汽車交通ノ地警視廳府縣廳最寄兵營最寄港灣ニ碇泊ノ軍艦等ニ通報スヘシ

第二條 市町村長區長(沖繩縣ノ區長以下之ニ倣フ)戶長(戶長ニ準スヘキ者ヲ含ム以下之ニ倣フ)又ハ豫防委員ニ於テ傳染病豫防法第三條ノ届出ヲ受ケタルトキハ互ニ通報シ且警察官吏ニ通報スヘシ但町村長又ハ戶長ニ於テ届出又ハ通報ヲ受ケタルトキハ郡役所島廳ニ報告シ郡長市長島司又ハ區長ハ府縣廳ニ報告スヘシ

市町村長區長戶長又ハ豫防委員ニ於テ傳染病豫防法第四條ノ届出又ハ通報ヲ受ケントスルトキハ直ニ醫師ヲシテ診斷セシメ傳染病ナルトキハ前項ノ手續ヲ爲スヘシ

第三條 警察官吏又ハ檢疫委員傳染病豫防法第三條又ハ第四條ノ届出ヲ受ケ又ハ傳染病アルコトヲ知リタルトキハ市町村長區長戶長又ハ豫防委員ニ通報スヘシ但警察署又ハ分署長ヨリ府縣廳(東京府ハ警視廳)ニ報告スヘシ

前項ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ醫師ヲシテ診斷セシムルコトヲ得

第四條 市町村長區長戶長又ハ豫防委員第二條ニ依リ傳染病ノ届出又ハ通報ヲ受ケ又ハ傳染病アルコトヲ知リタルトキハ直ニ其ノ家ニ臨ミ清潔方法消毒方法ヲ施行セシムヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員島司員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戶長又ハ豫防委員ヲ指示シテ其事務ニ從事スヘシ

第五條 市町村長區長戶長又ハ豫防委員ハ豫防上必要ト認ムルトキハ傳染病患者ヲ傳染病院又ハ隔離病舎ニ入ラシメ健康者ヲ隔離所ニ入ラシムヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員島廳吏員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戶長又ハ豫防委員ヲ指示シテ其ノ事務ニ從事スヘシ

第六條 警察官吏又ハ檢疫委員ハ傳染病豫防法第八條又ハ第十九條第二ニ依リ左ノ日時間交通ヲ遮斷スルコトヲ得但第十九條第二ニ依リ交通ヲ遮斷スルハ特ニ府縣知事(東京府ハ警視總監)ノ命アル場合ニ限ル

虎列刺
赤痢

患者又ハ死體アル間及患者ヲ入院若クハ入舎セシメ又ハ患者治癒者クハ死亡シタル後消毒方法ノ施行ヲ了リタル時ヨリ起算シ滿五日間
發疹室扶私
「ペスト」

患者又ハ死體アル間及患者ヲ入院若クハ入舎セシメ又ハ患者治癒者クハ死亡シタル後消毒方法ノ施行ヲ了リタル時ヨリ起算シ滿七日間

前項ノ場合ニ於テ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ハ警察官吏又ハ檢疫委員ノ指示ヲ受ケテ交通遮斷ニ關スル事務ニ從事スヘシ

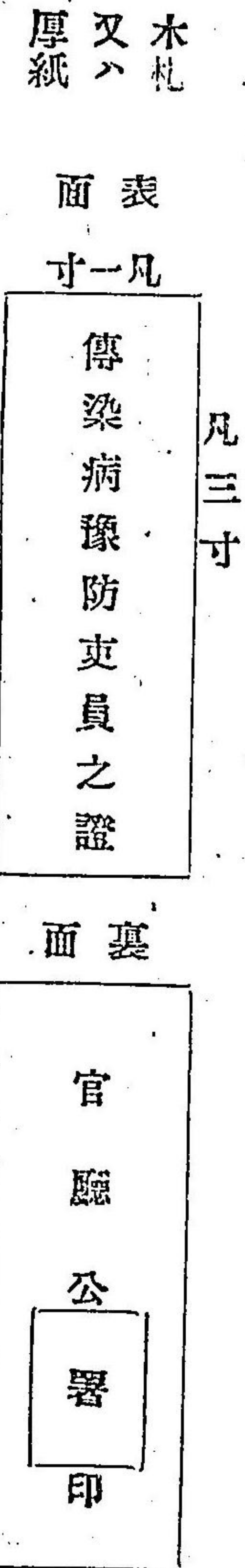
第七條 左ノ場合ニ於テハ書面又ハ口頭ヲ以テ警察官吏市町村長區長戸長檢疫委員又ハ豫防委員ノ認可ヲ受クヘシ但第一ノ場合ニ於テハ認可ヲ爲シタル吏員ヨリ患者又ハ死體ヲ移スヘキ地ノ吏員ニ通報スヘシ

一 傳染病豫防法第九條ニ依リ傳染病患者及其ノ死體ヲ他ニ移サントスルトキ
二 傳染病豫防法第十條ニ依リ傳染病毒ニ汚染シ若クハ汚染ノ疑アル物件ヲ使用授與移轉遺棄又ハ洗滌セントスルトキ

三 傳染病豫防法第十一條第二項ニ依リ傳染病患者ノ死體ヲ二十四時間内ニ埋葬セントスルトキ

第八條 傳染病豫防法第九條第十條及第十一條第一項ノ場合ニ於テハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ハ充分消毒方法ヲ施行セシムヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員島廳吏員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ヲ指示シテ其ノ事務ニ從事スヘシ

第九條 傳染病豫防法第十四條ニ依リ家宅船舶其ノ他ノ場所ニ立入ルハ成ルヘク日出後日没前ニ於テスヘシ其ノ戸首長管理人等ニ示スヘキ證票ハ左ノ如シ



第十條 府縣知事(東京府ハ警視總監)ハ市町村ノ醫師ヲシテ傳染病豫防法第十九條第一ノ檢診ヲ行ハシムルコトヲ得

第十一條 府縣知事(東京府ハ警視總監)傳染病豫防法第十九條第七ニ依リ清潔方法消毒方法等ノ施行ヲ命シタルトキハ第四條ノ規程ヲ準用ス

第十二條 市町村立ノ傳染病院隔離病舎又ハ隔離所ニ於テハ食費藥價ヲ徴收スルコトヲ得其ノ金額ハ市ニ在テハ府縣知事町村ニ在テハ郡長ノ認可ヲ受クヘシ

第十三條 市町村長區長戸長又ハ豫防委員ハ傳染病豫防法第二十六條ニ依リ清潔方法消毒方法ヲ施行スヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員島廳吏員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員

ヲ指示シテ其ノ事務ニ從事スヘシ

前項ノ場合ニ於テ市町村ハ必要ナル人夫器具藥品等ヲ供給シ又ハ其ノ費用ヲ支出スヘシ

第十四條 府縣知事ハ衛生組合ヲ以テ消毒器具藥品等ヲ設備セシムルコトヲ得

第十五條 傳染病豫防法第二條第十八條(第三項但書ノ場合ヲ除ク)及第十九條ノ地方長官ノ職務其ノ他傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ施行ニ關シ警察ニ屬スル事項ハ東京府ニ於テハ警視總監之ヲ行フ

東京市京都市大阪市ニ於テハ傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ施行ニ關シ市長ニ屬スル職務ハ區長ヲシテ之ヲ補助執行セシムルコトヲ得

第十六條 傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ規程ニシテ其ノ準用シ得ヘキモノヲ除ク外沖繩縣ニ關シ必要ナル事項ハ沖繩縣知事之ヲ定ム

第十七條 傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ施行ニ關シ必要ナル細目ハ警視總監府縣知事之ヲ定ム
島地ニ關シ此ノ規則ノ規程ヲ適用シ難キ場合ニ於テハ警視總監府縣知事ハ別段ノ規程ヲ設クルコトヲ得

汽車檢疫規則

(明治三十年七月內務省令第十九號)

傳染病豫防法第十八條ニ依リ汽車檢疫規則左ノ通定ム

汽車檢疫規則

第一條 府縣知事(東京府ハ警視總監)汽車檢疫ヲ施行セントスルトキハ檢疫スヘキ傳染病及其ノ目的地方ヲ指定シ檢疫施行ノ停車場及開始ノ期日ヲ定メテ內務大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ告示シ場

セテ關係府縣廳(東京府ハ警視廳)ニ通知スヘシ其ノ廢止ノトキ亦之ニ準ス但官設鐵道ノ停車場ニ於テ檢疫ヲ施行スルトキハ遞信省ニモ申報スヘシ

關係府縣廳(東京府ハ警視廳)ニ於テ本條ノ通知ヲ受ケタルトキハ其ノ旨ヲ告示スヘシ

第二條 汽車中ニ傳染病患者又ハ死者アリタルトキハ患者ハ之ヲ市町村立ノ傳染病院又ハ隔離病舎其ノ他適當ノ場所ニ收容治療シ死者ハ引受人ニ引渡シ若シ引受人ナキトキハ明治十五年(九月)布告第四十九號行旅死亡人取扱規則ニ準シ市町村長、區長(沖繩縣ノ區長)又ハ戶長(戶長ニ準スヘキモノヲ含ム)ヲシテ其ノ處置ヲ爲サシムヘシ但該規則第二條末段ノ場合ニ於テハ發見地ノ府縣稅又ハ地方稅ヲ以テ其ノ費用ヲ支辨スヘシ

第三條 汽車檢疫ノ際發見シタル傳染病患者ヲ市町村立ノ傳染病院又ハ隔離病舎ニ收容中特ニ要シタル費用ニシテ該患者ヨリ徵收スルキモノハ前條末段ニ依リ取扱ヒ其ノ本籍詳カナラサル場合又ハ身元赤貧ニシテ償却ノ途ナキ場合ニ限リ發見地府縣知事ニ請求スヘシ但本條ノ費用ニシテ患者ヨリ徵收スヘカラサルモノハ直ニ發見地府縣知事ニ請求スルコトヲ得

發見地府縣知事ハ前項ノ請求アリタルトキハ府縣稅又ハ地方稅ヨリ之ヲ支辨スヘシ
第四條 汽車中ニ傳染病患者又ハ死者アリタルトキハ患者死者ト同車室ニ在ルカ否サルモ病毒汚染ノ虞アル乗客及手荷物ハ一時之ヲ留メテ消毒方法ヲ施行スヘシ

第五條 傳染病患者又ハ死者アリタル車室ハ之ヲ取離シテ消毒方法ヲ施行スヘシ此ノ場合ニ於テハ鐵道掛員ヲシテ補助ヲ爲サシメ及器具藥品等ヲ供給セシムルコトヲ得
傳染病患者又ハ死者ナキ車室ト雖モ檢疫掛員ニ於テ必要ト認ムルトキハ清潔方法消毒方法ヲ施行セシムルコトヲ得

第六條 汽車中ニ傳染病者又ハ死者アリタルトキ其ノ停車場ニ於ケル設備ノ都合等ニ俾リ前數條ニ規定シタル事項ヲ施行スルコト能ハサルトキハ假ニ病毒ノ散逸ヲ防クヘキ相當ノ手當ヲ爲シ
汽車室ノ出入口ヲ閉鎖シテ乗客ノ出入ヲ止メ他ノ停車場ニ至リ其ノ處置ヲ爲スヘシ
第七條 檢疫掛員ニ於テ職務執行上必要アルトキハ無償ニテ其ノ列車ニ乗込ミ又ハ必要ナル通信ヲ驛長若クハ掛員ニ求ムルコトヲ得無償乗車ノ場合ニ於テハ官職氏名ヲ記シタル證票ヲ驛長若クハ掛員ニ示スヘシ

附 則

第八條 汽車檢疫施行中府縣知事(東京府ハ警視總監)ノ指定シタル以外ノ地方ヨリ來リタル汽車ニ傳染病者又ハ死者アリタルトキハ此ノ規則ヲ準用ス
第九條 明治二十三年內務省訓第四五二號汽車檢疫心得ハ廢止ス

船舶檢疫規則

(明治三十年七月內務省令第二十號)

傳染病豫防法第十八條ニ依リ船舶檢疫規則左ノ通定ム

船舶檢疫規則

第一條 府縣知事(東京府ハ警視總監)船舶檢疫ヲ施行セントスルトキハ檢疫スヘキ傳染病及其ノ目的地方ヲ指定シ檢疫施行ノ場所及開始ノ期日ヲ定メテ內務大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ告示シ併セテ關係府縣廳(東京府ハ警視廳)ニ通知スヘシ其ノ廢止ノトキ亦之ニ準ス
關係府縣廳(東京府ハ警視廳)ニ於テ本條ノ通知ヲ受ケタルトキハ其ノ旨ヲ告示スヘシ
第二條 府縣知事(東京府ハ警視總監)ノ指定シタル地方ヲ發シ又ハ其ノ地方ヲ經テ檢疫ヲ施行ス

ル港ニ來ル船舶ハ檢疫掛員ノ尋問又ハ検査ヲ受ケ其ノ許可ヲ得タル後ニアラサレハ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ乗客乗組人ヲ上陸セシメ又ハ積荷手荷物ノ陸揚ヲ爲スヘカラス
航行中又ハ現ニ傳染病者若クハ死者ナキ船舶ニハ直ニ前項ノ許可ヲ與フルコトヲ得
第三條 航行中又ハ現ニ傳染病者又ハ死者アリタル船舶及停留中ノ船舶ハ黃旗ヲ前橋ニ掲揚スヘシ但檢疫掛員ノ許可ヲ得ル迄ハ之ヲ下スヘカラス
第四條 航行中又ハ現ニ傳染病者又ハ死者アリタル船舶ニハ消毒方法ヲ施行シ港内適當ノ場所ニ停留セシメ其ノ船舶ノ乗客乗組人ニハ消毒方法ヲ施行シ停留所船中其ノ他適當ノ場所ニ停留セシムルコトヲ得

前項停留ノ日時ハ傳染病豫防法施行規則第六條交通遮斷ノ日時ニ準ス停留中新タニ患者ヲ發シタルトキハ其ノ處置ヲ了シタル時ヨリ起算シ更ニ同期間停留ヲ繼續スルコトヲ得
檢疫掛員ニ於テ消毒方法ヲ施行スルトキハ乗組人ヲシテ補助ヲ爲サシメ及器具藥品等ヲ供給セシムルコトヲ得

第五條 船舶中傳染病者又ハ死者アリタル場合ト雖モ乗客乗組人中患者死者ト飲食起臥ヲ共ニシタル等ニ依リ檢疫掛員ニ旅テ病毒感染ノ虞アリト認ムル者ノ外ハ消毒方法ヲ施行シタル後直チニ上陸ヲ許可スルコトヲ得

第六條 船舶中傳染病者又ハ死者アリタル場合ト雖モ積荷手荷物ハ消毒方法ヲ施行シタル後直ニ陸揚ヲ許可スルコトヲ得但檢疫掛員ニ於テ病毒汚染ノ虞ナシト認ムル積荷手荷物ニハ消毒サルモ妨ケナシ

第七條 船舶檢疫ノ際發見シタル傳染病患者ハ市町村立ノ傳染病院又ハ隔離病舎其ノ他適當ノ場

所ニ收容治療シ死者ハ引受人ニ引渡シ若シ引受人ナキトキハ明治十五年(九月)布告第四十九號
行旅死亡人取扱規則ニ準シ市町村長、區長(沖繩縣ノ區長)又ハ戶長(戶長ニ準スヘキ者ヲ含ム)
ヲシテ其ノ處置ヲ爲サシムヘシ但該規則第二條末段ノ場合ニ於テハ發見地ノ府縣稅又ハ地方稅
ヲ以テ其ノ費用ヲ支辨スヘシ

第八條 船舶檢疫ノ際發見シタル傳染病患者ヲ市町村立ノ傳染病院又ハ隔離病舎ニ收容中特ニ要
シタル費用ニシテ該患者ヨリ徵收スヘキモノハ前條末段ニ依リ取扱ヒ其ノ本籍詳カラサル場合
又ハ身元赤貧ニシテ償却ノ途ナキ場合ニ限リ發見地府縣知事ニ請求スヘシ但本條ノ費用ニシテ
患者ヨリ徵收スヘカラサルモノハ直ニ發見地府縣知事ニ請求スルコトヲ得

發見地府縣知事ハ前項ノ請求アリタルトキハ府縣稅又ハ地方稅ヨリ之ヲ支辨スヘシ
第九條 消毒方法ヲ施行スヘキ船舶ハ其ノ港ニ於ケル消毒設備ノ都合等ニ依リ他ノ港ニ回航セシ
ムルコトヲ得

第十條 檢疫掛員ハ職務執行上必要アリト認ムルトキハ無償ニテ其ノ船舶ニ乗込ムコトヲ得此ノ
場合ニ於テハ船長若クハ事務員ニ其ノ旨ヲ通告スヘシ

第十一條 傳染病患者又ハ死者ナキ船舶ト雖モ檢疫掛員ニ於テ必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ
一部ニ清潔方法消毒方法ヲ施行セシムルコトヲ得

附 則

第十二條 船舶檢疫施行中府縣知事(東京府ハ警視總監)ノ指定シタル以外ノ地方ヨリ來リタル船
舶又ハ其ノ港ニ碇泊中ノ船舶ニ傳染病患者又ハ死者アリタルトキハ此ノ規則ヲ準用ス

第十三條 府縣知事(東京府ハ警視總監)ハ大和船漁船等ノ檢疫ニ關シ別段ノ規程ヲ設ケトルコトヲ
得

第十四條 明治十四年内務省達乙第四十九號傳染病豫防規則第十三條船舶檢査手續ハ廢止ス

種痘規則

(明治十八年十一月第三十四號)

種痘規則左ノ通制定シ明治十九年一月一日ヨリ施行ス但明治九年内務省甲第八號及甲第十六號布
達ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

種痘規則

第一條 種痘ハ小兒出生後滿一年以内ニ之ヲ行フヘシ若シ不善感ナルトキハ更ニ一週年内ニ再三
種ヲ行フヘシ

第二條 種痘ハ善感後ト雖モ五年乃至七年ニ再種ヲ行ヒ再種後五年乃至七年ニ三種ヲ行フヘシ

第三條 天然痘流行ノ兆アルトキハ第一條第二條ノ期限ニ拘ハラズ掛官吏ノ指定シタル期日内ニ
種痘ヲ行フヘシ

第四條 種痘ヲ受クヘキ者病氣或ハ事故アリテ第一條第二條第三條ノ時期ニ種痘ヲ行フコト能ハ
サルトキ病氣ハ醫師ノ診斷書事故ハ親戚又ハ隣保ノ證印ヲ爲シタル證書ヲ副ヘ戶長役場ニ届出
スヘシ

第五條 種痘ヲ受ケシ者ハ醫師ノ指定シタル日ニ於テ檢診ヲ受ケ痘漿採取ヲ要スルトキハ之ヲ拒
ムコトヲ得ス

第六條 種痘濟ノ者ハ醫師ヨリ種痘證ヲ受領シ戶長役場ニ届出ヘシ但天然痘ニ罹リタル者ハ醫師
ヨリ其證ヲ受領シ本條ニ準スヘシ

第七條 十六歳未満ノ者ノ尊長後見人若クハ雇主等ニシテ現ニ其幼者ヲ監督スル者ハ前各條ノ責ニ任スヘシ

貧院育兒院等へ入院ノ者ハ該主長ニ於テ前各條ノ責ニ任スヘシ

第八條 醫師ハ種痘ノ善感不善感ヲ檢診シ種痘證ヲ付與スヘシ但天然痘ニ罹リタル者ヲ治療シタルトキハ本條ニ準シ其證ヲ付與スヘシ

第九條 第一條第二條第三條第四條第五條第六條及第八條ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス

第十條 府知事「縣令」ハ種痘明細表ヲ製シ毎年一月七月ノ兩度「内務卿」へ報告スヘシ

第十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ府知事「縣令」ニ於テ便宜取設ク「内務卿」ニ届出ヘシ

牛豚類豢養取締

(明治六年五月第百六十三號布告)

方今牛豚類ノ牧畜盛ニ行ハレ候處温暑ノ時ニ方テハ其臭氣人身ノ健康ヲ害スルノミナラス近來獸類ノ傳染病流行往往人生ノ傷害ヲ醸シ候ニ付自今三府市街ノ区内ハ勿論各地一般人家稠密ノ場所ニテ豢養ノ儀堅ク禁止候條右区内ニ於テ從前營業ノ者ハ布令到達ノ日ヨリ十五日以内ヲ以テ郊外便宜ノ地ニ立退豢養可致事但東京府下朱引内ハ假令草野空間ノ地下雖モ豢養不相成候尤乳汁搾取ノタメ豢養候ハ被差許候へ共不潔臭穢ノ儀モ有之候へハ證議ノ上可令取拂事

豢養制限斟酌方

(明治七年一月大藏省達第三號)

昨明治六年第百六十三號ヲ以テ公布相成候趣者專人命保護ノタメ市街等人家稠密ノ地ニテ豢養候

ヲ制限候旨ニ候條山村僻邑等ハ實地適宜ニ斟酌可致此旨相達候事

牛馬羊豕ノ埋没後發掘ニ關スル罰則

(明治二十六年八月農商務省令第十四號)

左ノ諸病ニ罹リタル牛馬羊豕ノ死體埋没後十二箇年ヲ經過セサレハ發掘スルコトヲ得ス違背シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス但獸類傳染病豫防規則ニ正條アルモノハ此限ニ在ラス

一 牛疫

二 炭疽熱

三 鼻疽及皮疽

四 傳染性胸膜肺炎

五 傳染性鵝口瘡

六 羊痘

獸疫豫防法

(明治二十九年三月法律第六十號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル獸疫豫防法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

獸疫豫防法

第一條 此ノ法律ニ獸類ト稱スルハ牛、馬、羊、豕、犬ヲ謂ヒ獸疫ト稱スルハ左ノ十病ヲ謂フ

一 牛疫

二 炭疽

三 氣腫疽

四 鼻疽及皮疽

五 傳染性胸膜肺炎

六 流行性鵝口瘡

- 七 羊痘
- 八 豕虎列刺
- 九 豕羅斯疫
- 十 狂犬病

第二條 獸類獸疫ニ罹リタルコト若ハ其ノ疑アルコトヲ發見シタル所有者、管理人又ハ獸醫ハ直ニ其ノ旨ヲ所轄警察署又ハ市町村長(特別市制ヲ施行スル市ニ於テハ區長、市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ區戶長、又ハ之ニ準スヘキ者)ニ届出ヘシ

所有者又ハ管理人ニ於テ狂犬病ニ罹リタル獸類ヲ撲殺シタルトキ亦同シ

第三條 獸類獸疫ニ罹リタルトキ若ハ其ノ疑アルトキハ所有者又ハ管理人ニ於テ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ鎖飼シ若ハ健獸ト隔離シ其ノ監督ヲ承クヘシ

第四條 牛疫感染ノ疑アリ又ハ之ニ罹リタル牛、羊及狂犬病ニ罹リタル犬ハ所有者又ハ管理人ニ於テ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ撲殺スヘシ

前項ノ所有者又ハ管理人現場ニ在ラサルトキハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ニ於テ直ニ撲殺シ及病毒ニ汚染シ又ハ其ノ疑アル物品ヲ燒棄埋却シ若ハ之ニ消毒ヲ行フコトヲ得

第五條 地方長官(東京府ハ警視總監以下之ニ倣フ)ハ獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ病性鑑定ノ爲剖檢ヲ要スル獸類ヲ撲殺シ又ハ鼻疽及皮疽、傳染性胸膜肺炎、豕虎列刺、豕羅斯疫ニ罹リタル獸類ノ撲殺ヲ命スルコトヲ得

第六條 所有者又ハ管理人第四條ノ指揮ニ從ハス及前條ノ命令ニ從ハサルトキハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ニ於テ直ニ撲殺スルコトヲ得

第七條 病性鑑定ノ爲撲殺シタル獸類ヲ除クノ外此ノ法律ニ依リ撲殺シ又ハ獸疫ニ罹リ斃死シタル獸類ノ屍體ハ所有者又ハ管理人ニ於テ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ燒棄又ハ埋却スヘシ

前項ノ屍體ハ各部ヲ截取シ乙ハ剖檢ヲ爲スコトヲ得ス但病性鑑定又ハ醫術研究ノ爲特ニ地方長官ノ許可ヲ得タルトキ此ノ限ニ在ラス

第八條 所有者又ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ病毒ニ汚染シ又ハ其ノ疑アル物品ヲ燒棄埋却シ若ハ之ニ消毒ヲ行フヘシ

所有者、管理人、車長又ハ船長ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ獸疫ニ罹リ若ハ其ノ疑アル獸類ヲ繫留シタル場所、汽車、船舶等ニ消毒ヲ行フヘシ

所有者又ハ管理人前二項ノ指揮ニ從ハサルトキ及車長、船長前項ノ指揮ニ從ハサルトキハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ハ直ニ燒棄埋却シ若ハ消毒ヲ行フコトヲ得

第九條 此ノ法律ニ依リ撲殺シ又ハ獸疫ニ罹リ斃死シタル獸類ノ屍體及病毒ニ汚染シタル物品ノ埋却地ハ發掘若ハ使用スルコトヲ得ス但地方長官ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十條 第四條、第五條及第八條第一項ノ場合ニ於テ地方長官ハ三人以上ノ評價人ヲシテ物品及發病前ノ獸類ノ價格ヲ評價セシメ左ノ標準ニ依リ所有者ニ手當金ヲ下付ス其ノ評價格ヲ不當ト認ムルトキハ更ニ他ノ三人以上ノ評價人ヲシテ評價セシムルコトヲ得

一 牛疫、鼻疽及皮疽、傳染性胸膜肺炎、豕虎列刺、豕羅斯疫ニ罹リ撲殺シタル獸類
 評價額三分ノ一

二 病性鑑定ノ爲撲殺シタル獸類
 評價額五分ノ三

三 牛疫ニ感染ノ疑アル爲撲殺シタル牛羊
四 燒棄又ハ埋却シタル物品

評價額五分ノ四
評價額二分ノ一

手當金額ハ第一ノ場合ニ於テハ一頭六十圓、第二ノ場合ニ於テハ一頭百五十圓、第三ノ場合ニ於テハ一頭二百圓、第四ノ場合ニ於テハ總計十圓ヲ超過スルコトヲ得ス、
第十一條 此ノ法律ニ係リ左ニ掲クル獸類ヲ撲殺シ又ハ物品ヲ燒棄若ハ埋却シタルトキハ手當金ヲ下付セス

一 第二條ニ違背シ届出ナキ獸類及之ニ觸接シタル物品

二 第六條ノ場合ニ於ケル獸類及第八條第一項ニ違背シタル場合ニ於ケル物品

三 狂犬病ニ罹リタル犬及其ノ病毒感染ノ疑アル物品

四 第十二條ノ命令ニ違背シ移動シタル獸類及物品

五 第十五條ノ命令ニ違背シ檢疫ヲ受ケス又ハ輸入シタル獸類及物品

第十二條 地方長官ハ獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ區域ヲ定メ獸類ノ種類ヲ限リ其ノ出入、往來並病毒傳播ノ疑アル物品ノ運搬ヲ停止スルコトヲ得

第十三條 地方長官ハ獸疫流行中必要ト認ムルトキハ屠獸場及獸類化製場ノ營業ヲ停止シ又ハ獸類ノ種類ヲ限リ其ノ市場共進會等ノ開設ヲ停止スルコトヲ得但此ノ場合ニ於テハ直ニ其ノ旨ヲ農商務大臣ニ届出ヘシ

第十四條 地方長官ハ獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ區域ヲ限リ健獸ノ検査ヲ行フコトヲ得

第十五條 外國ヨリ獸疫侵入ノ危險アリト認ムルトキハ有病地ヨリ又ハ有病地ヲ經テ輸入スル獸類及物品ノ檢疫ヲ行ヒ若ハ其ノ輸入ヲ停止スルコトヲ得

第十六條 獸疫豫防ニ關スル費用ハ國庫府縣市町村及一個人ノ負擔トス其ノ負擔ノ區分ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十七條 第四條第一項ニ違背シタル者、第五條ノ命令ニ違背シタル者及第十五條ノ檢疫ヲ受ケス又ハ輸入停止ニ違背シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

獸醫第二條ニ違背シタルトキハ罰前項ニ同シ

第十八條 第七條、第八條、第一項第二項、第九條ニ違背シタル者及第十三條ノ命令ニ違背シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

所有者又ハ管理人第二條ニ違背シタルトキハ罰前項ニ同シ

第十九條 第三條ニ違背シタル者及第十二條ノ命令ニ違背シタル者ハ刑法第二百四十九條ノ例ニ依リ處罰ス

第二十條 第一條ニ掲ケタル獸類獸疫ノ外獸畜傳染病豫防上必要ト認ムルトキハ勅令ヲ以テ此ノ法律ノ全部又ハ一部ヲ他ノ獸畜又ハ他ノ獸畜傳染病ニ適用スルコトヲ得

附 則

第二十二條 此ノ法律ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス

獸畜傳染病豫防ニ關スル從前ノ規則ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

獸疫豫防法施行細則

(明治三十年一月農商務省令第一號)

明治二十九年(三月)法律第六十號獸疫豫防法施行細則左ノ通相定ム

獸疫豫防法施行細則

第一條 警察官又ハ市町村長（特別市制ヲ施行スル市ニ於テハ區長市町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ區長又ハ之ニ準スヘキ者）獸疫發生ノ届出ヲ受ケタルトキハ地方長官ニ其旨ヲ報告シ同時ニ其部内ニ榜示スヘシ

第二條 獸疫ニ罹リタル獸類ノ全癒、斃死若クハ撲殺ハ所有者又ハ管理者ニ於テ獸醫ト連署シ直ニ所轄警察官署又ハ市町村役場ニ届出ヘシ

前項ノ届出ヲ受ケタル警察官又ハ市町村長ハ地方長官ニ報告スヘシ

第三條 第一條及第二條第一項ノ届出ヲ受ケタル警察官及市町村長ハ相互速ニ通報スヘシ

第四條 獸疫發生ノ届出又ハ通知ヲ受ケ若クハ其發生ヲ探知シタル警察官ハ直ニ現場ニ出張シ必要アルトキハ獸醫ヲシテ診斷セシムヘシ

第五條 第一條及第二條第二項ノ報告ヲ受ケタル地方長官ハ直ニ其官管内ニ告示シ農商務大臣及鄰接府縣ノ地方長官ニ報告スヘシ

外國ノ獸疫侵入スルカ又ハ一地方ニ於テ獸疫蔓延ノ兆アルトキハ地方長官ハ農商務大臣及鄰接地並ニ航路ノ關係アル道廳府縣ノ地方長官ニ急報スヘシ

第六條 地方長官ハ獸疫流行中其狀況ヲ調査シ毎週別記様式ニ依リ農商務大臣ニ報告スヘシ但鼻疽及皮疽ハ毎月末ニ報告スルモ妨ケナシ

第七條 地方長官ハ獸疫豫防法第十二條及第十三條ニ依リ停止ヲ命シタルトキハ其旨農商務大臣及鄰接地並ニ航路ノ關係アル道廳府縣ノ地方長官ニ報告スヘシ

第八條 獸疫豫防法第三條ニ依リ獸類ノ鎖飼ヲ要スルトキハ之ヲ一定ノ場所ニ繋キ其逸出ヲ防キ

又隔離ヲ要スルトキハ病獸ヲ在來ノ場所ニ留置シ健獸ヲ安全ノ場所ニ移シ相互ノ交通ヲ絶チ病毒傳播ノ媒介ヲ防クヘシ

前項ノ隔離ヲ實行シ難キ場合ニハ特ニ警察官ノ許可ヲ得健獸ヲ留置シ病獸ヲ他ニ移スコトヲ得

第九條 獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ヲ鎖飼シ又ハ隔離シタル場所ニハ警察官ノ許可ヲ得タル者ノ外出入スルヲ許サス

第十條 地方長官ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ヲシテ獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ鎖飼若クハ隔離ヲ嚴重ニ監督セシムヘシ但シ必要アルトキハ警察官ヲシテ病獸ヲ看守セシムルコトヲ得

第十一條 地方長官ハ所屬官吏、市町村吏及獸醫ニ檢疫委員ヲ命スルコトヲ得

第十二條 地方長官ハ獸疫豫防法第十四條ニ依リ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ヲシテ健獸ノ検査ヲ行ハシムルコトヲ得

第十三條 地方長官ハ獸疫流行中屠獸場又ハ獸類化製場ノ監督ヲ嚴重ニスヘシ

第十四條 地方長官ハ必要ト認ムルトキハ豫防區域ノ各要所ニ警察官又ハ相當ノ看守人ヲ配置スヘシ

第十五條 獸類ノ撲殺ハ其所在地ニ於テ行フヘシ但シ特別ノ事由アルトキハ燒棄又ハ埋却スヘキ場所ニ於テスルコトヲ得

第十六條 獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ屍體ヲ運搬セントスルトキハ天然孔ヲ塞キ全體ヲ消毒包裏シテ汚物ノ脱漏ヲ防クヘシ其脱漏シタル場合ニハ直ニ之ヲ除去シ其場所ヲ消毒スヘシ

第十七條 獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ屍體ヲ埋却セントスルトキハ皮膚ヲ亂截シ消毒藥ヲ散布スヘシ

屍體及病毒汚染ノ物品ヲ埋却スル土坑ハ深サ八尺以上トシ屍體及物品ヲ投入シタル後石灰ヲ散布シ土ヲ以テ土坑ヲ填塞スヘシ但シ羊痘、豚虎列刺、豚羅斯疫、狂犬病ノ場合ニ於テハ土坑ノ深サ四尺以上トス

第十八條 獸疫豫防法第九條ノ埋却地ハ人家、飲料水、河流及道路ニ接近セサル適當ノ位置ヲ區畫ノ木標ヲ建テ入及獸類ノ往來ヲ禁スヘシ

第十九條 獸疫ノ病毒ニ觸接シタル者又ハ其疑アル者ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ消毒シタル後ニアラサレハ他ノ獸類ニ接近スルコトヲ得ス

第二十條 地方長官ハ獸疫豫防法第十二條及第十三條ノ停止ヲ解キタルトキハ其旨管内ニ告示シ農商務大臣及鄰接地並ニ航路ノ關係アル道廳府縣ノ地方長官ニ報告スヘシ

第二十一條 第五條第七條及第二十條ノ報告ヲ受ケル地方長官ハ其旨管内ニ告示スヘシ

第二十二條 獸類ノ屍體及其病毒感染ノ物品ヲ運搬スルニハ牛疫、傳染性胸膜肺炎及氣腫痘ノ場合ニ於テハ牛、鼻疽及皮疽ノ場合ニ於テハ馬又炭疽ノ場合ニ於テハ牛馬ヲ用フヘカラス

第二十三條 地方長官ハ狂犬病流行ノ際危險アリト認ムル區域ニ於テハ所有者ナキ犬ヲ撲殺セシメ所有者ノ記名アル犬ハ嚴重ニ繋留セシムヘシ但使用上必要ナル飼犬ハ口網ヲ施シ綱ヲ附シテ牽キ行カシムルコトヲ得

第二十四條 消毒ヲ行ハントスル者ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ獸疫豫防心得ニ據ケタル消毒法ニ依ルヘシ

(別記様式ハ之ヲ畧ス)

牛疫檢疫規則

(明治三十年九月農商務省令第十八號)

牛疫檢疫規則左ノ通相定ム

牛疫檢疫規則

第一條 牛疫流行地ヨリ牛羊ヲ搭載シ來ル船舶ニシテ該獸類ヲ陸揚セントスルトキハ檢疫官ノ指揮ニ從フヘシ

皮骨類及其他ノ物品ニシテ牛疫傳播ノ虞アルモノヲ陸揚セントスルトキ亦同シ

第二條 前條ノ獸類ハ檢疫官ニ於テ其所有者(所有者ナキトキハ管理人又ハ船長)ヲシテ檢疫所ニ送致セシメ必要アルトキハ之ヲ繋留スヘシ

第三條 檢疫所ニ於テ牛疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ヲ發見シタルトキハ檢疫官ハ獸疫豫防法ノ規定ニ依リ之ヲ處分スヘシ

第一條ニ依リ陸揚シタル物品ニシテ病毒ニ汚染シ若クハ其疑アルモノハ消毒ヲ行フニアラサレハ他ニ移スヘカラス

第四條 檢疫委員ハ獸類ニ於テ牛疫發生ノ虞ナシト認メタルトキハ其所有者(所有者ナキトキハ管理人又ハ船長)ニ證明書ヲ交付スヘシ

第五條 檢疫所所在地ノ地方長官ハ所屬官吏及獸醫ヲ以テ檢疫官トシ檢疫ヲ行フヘシ

醫師免許規則

(明治十六年十月第三十五號布告)

醫師免許規則別冊ノ通制定シ明治十七年一月一日ヨリ施行ス

但明治十五年二月第四號布達同年八月第三十九號布告ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

(別冊)

醫師免許規則

第一條 醫師ハ醫術開業試験ヲ受ケ「内務卿」ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス

但此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ證ハ仍ホ其效アリトス

第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ

第三條 官立及府縣立醫學校ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツル

トキハ「内務卿」ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第四條 外國ノ大學醫學部若クハ醫學校ニ於テ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ醫術開業免許ヲ得タ

ル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキハ「内務卿」ハ其證書ヲ

審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第五條 醫師ニ乏キ地ニ於テハ府知事「縣令」ノ具狀ニヨリ「内務卿」ハ醫術開業試験ヲ經サル者ト

雖トモ其履歷ニヨリ假開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第六條 (明治二十九年法律第二十七號ヲ以テ消滅)

第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ内務省ノ醫籍ニ登錄シ時時之ヲ公告スヘシ

第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニ由リ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ其事由ヲ記シ地

欠

MISSING

實地試験ヲ受ケントスル者ハ其試験願書ニ試験委員長ノ學說合格承認證ヲ添ヘ願出ヘシ
但試験手数料金三圓ヲ納ムヘシ
本令ハ明治二十六年七月二十日ヨリ施行ス

試験ヲ要セスシテ醫師ノ免狀ヲ授與スヘキ者

(明治十六年十一月内務省達乙第四十六號)

本年第三十五號布告醫師免許規則第三條ニ據リ試験ヲ要セス免狀ヲ授與スヘキ者ハ東京大學及左ノ條件ヲ具ヘ當省ノ特許ヲ得タル醫學校ノ卒業證書ヲ有スル者ニ限り候條右ニ適應スル醫學校有之候向ハ其校則教則及教員履歷書生徒員數其他學校ニ關スル一切ノ書類取纏メ當省ヘ稟議スヘシ此旨相達候事

- 一 但明治十五年太政官第四號布達ニ依リ既ニ特許ヲ得タル向ハ此際更ニ稟議ニ及ハス
- 一 三名以上ノ醫學士(歐米ノ大學校ニ於テ卒業シタル者)ノ等其履歷ニヨリ本條ニ準スルコトアルヘシ)ヲ以テ教諭ニ充ルモノ
- 一 生徒ノ員數ニ相當セル助教ヲ置クモノ
- 一 四年以上ノ學期ヲ定メ教則並ニ試験法ノ完備スルモノ
- 一 生徒ノ實地演習ヲ爲スヘキ病院アルモノ
- 一 器械標本ノ具備スルモノ

臺灣醫業規則

(明治二十九年五月臺灣總督府令第六號)

臺灣醫業規則左ノ通相定ム

臺灣醫業規則

第一條 醫師ハ内務大臣ヨリ醫術開業免狀ヲ得タル者及民政局長ヨリ醫業免許證ヲ得タル者トス

第二條 内務大臣ノ醫術開業免狀ヲ有セル者開業セントスルトキハ開業ノ場所ヲ定メ該免狀ヲ添

ヘ五日以内ニ地方廳ニ届出ツヘシ

第三條 醫業免許證ノ下附ヲ受ケントスル者ハ醫術ニ關スル履歷書ヲ添ヘ地方廳ヲ經テ民政局ニ

出願スヘシ

第四條 醫業免許證ハ臺灣及澎湖島ヲ限り有效トス但特ニ區域ヲ限り下付スルコトアルヘシ

第五條 醫業免許證ヲ得ル者ハ下付ノ際手数料金五圓ヲ納ムヘシ

第六條 醫業免許證ノ書換着ハ再下付ヲ請求スル者ハ手数料金一圓ヲ納ムヘシ

第七條 内務大臣ノ免狀ヲ有スル者廢業スルトキハ地方廳ニ届出ヘシ

第八條 醫師其業ニ關シ犯罪者ハ不正ノ行爲アルトキハ民政局長ハ其業ヲ停止若ハ禁止スルコト

アルヘシ

第九條 地方廳ハ第八條ニ依リ醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ直ニ其免許證ヲ取上ケ之

ヲ民政局長ニ送付スヘシ其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日間停業ノ旨ヲ免許證ニ裏書シ驛印

ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ

第十條 内務大臣ヨリ醫業ヲ禁止又ハ停止セラレタル者ハ開業ノ效ヲ失ヒ又ハ其期間開業ノ效ヲ

失フモノトス

第十一條 醫業免許證ヲ得ス又ハ醫業免許區域外ニ於テ醫業ヲ爲シタル者ハ二十五日以下ノ輕禁

綱又ハ二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條 第二條ニ背キタル者ハ一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十三條 知事島司ハ醫師取締細則ヲ設クルコトヲ得

第十四條 此規則ハ明治二十九年七月一日ヨリ施行ス

獸醫免許規則

(明治二十三年八月法律第七十六號)

朕獸醫免許規則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

獸醫免許規則

第一條 獸醫ノ開業ハ農商務大臣ヨリ獸醫免狀ヲ受ケタル者ニ限ル

第二條 獸醫免狀ヲ受クルコトヲ得ル者左ノ如シ

一 獸醫免許試験ニ合格シ其ノ證書ヲ有スル者

一 官立府縣立ノ獸醫學校若ハ農學校ニ於テ獸醫學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

一 公立又ハ私立學校ニ於テ農商務大臣ノ認可シタル學則ニ依リ獸醫學ヲ專修シ其ノ卒業證書

ヲ有スル者

一 外國ニ於テ官立府縣立ノ獸醫學校若ハ農學校ト同等以上ノ學則ニ依リ獸醫ヲ專修シ其卒業

證書ヲ有スル者

第三條 第一條ノ資格ヲ有スル者ニシテ獸醫免狀ヲ受ケント欲スルトキハ試験及第證書又ハ卒業

證書ノ寫ヲ添ヘ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ出願スヘシ

第四條 獸醫免狀ヲ受ケタル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ獸醫籍ニ登錄シ之ヲ公告スヘシ

第五條 獸醫廢業シタルトキハ本人ヨリ死亡シタルトキハ其ノ遺族又ハ親戚ヨリ三十日以内ニ地方廳ヲ經由シテ其ノ免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第六條 (明治二十九年法律第二十七號ニ依リ消滅)

第七條 獸醫免狀ヲ毀損亡失シ若ハ氏名本籍ヲ變換シタルトキハ其ノ事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ免狀ノ書換ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ(同上法令ニ依リ本條改正)

第八條 獸醫業ニ關シ犯罪者ハ不正ノ行爲アリタルトキハ農商務大臣ハ情狀ヲ參酌シ五日以上五十日以下ノ範圍内ニ於テ其業ヲ停止シ情狀ノ最モ重キモノハ之ヲ禁止スルコトアルヘシ

禁止ノ處分ヲ受ケタル者ハ十日以内ニ地方廳ヲ經由シテ獸醫免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第九條 第八條ノ禁止ノ處分ヲ爲シタル者ト雖モ三年ヲ經過シタル後情狀ニ依リ其ノ禁止ヲ解クコトアルヘシ

禁止ヲ解カレタル者ニシテ再ヒ獸醫免狀ヲ受ケント欲スル者ハ第三條及第六條ニ依ルヘシ

第十條 免狀ヲ受ケスシテ獸醫ノ業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條 獸醫業停止中其業ヲ爲シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條 獸醫正當ノ事由ナクシテ其ノ業ニ關シ他人ノ依頼ヲ拒ミタルトキハ一圓以上一圓九角五分以下ノ科料ニ處ス

第十三條 獸醫免許試驗規則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附 則

第十四條 獸醫ニ乏シキ地ニ於テハ當分ノ内北海道廳長官府縣知事ノ具狀ニ依リ農商務大臣ハ第二條ノ資格ナキ者ト雖モ出願者ノ履歷ニ依リ營業區域及年限ヲ定メ獸醫假免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第十五條 第十四條ニ依リ獸醫假免狀ヲ受ケタル者ニモ亦此規則ヲ適用ス

第十六條 明治十八年第十七號布達獸醫開業試驗規則其他此ノ法律ニ牴觸スル規定ハ總テ廢止ス

獸醫免許試驗規則 (明治二十三年九月農商務省令第十一號)

明治二十三年八月法律第七十六號第十三條ニ據リ獸醫免許試驗規則左ノ通之ヲ定ム

獸醫免許試驗規則

- 第一條 試驗ノ科目ハ左ノ如シ
 - 一 家畜解剖學
 - 一 同 生理學
 - 一 同 藥物學
 - 一 同 內科學及其ノ實地
 - 一 同 外科學及其ノ實地
 - 一 蹄鐵學及其ノ實地

第二條 試驗法ハ筆記及實地ノ二様トシ實地試驗ハ筆記試驗ヲ終ハリタル後之ヲ行フ但時宜ニ依リ口述試験ヲ以テ實地ニ代フルコトアルヘシ

第三條 試験ハ毎年二回之ヲ行ヒ其ノ場所及期日ハ六月十二月告示スヘシ

第四條 農商務大臣ハ試験主事及委員ヲ選定シテ試験ヲ行ハシム

第五條 試験ヲ受ケント欲スル者ハ住所族籍生年月及受験地名ヲ願書ニ記載シ修學歷書ヲ添ヘ一月若クハ七月中其ノ居住ノ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ差出スヘシ

第六條 受験者ハ試験期日三日前受験地ノ宿處ヲ其ノ地方廳ニ届出ヘシ

第七條 試験及第者ニハ試験主事ヨリ及第證書ヲ附與スヘシ

第八條 不正ノ方法ヲ以テ及第シタルトキハ及第ノ效ナキモノトス

附則

第九條 第十回獸醫免許試験ニ限リ家畜ノ解剖學、生理學、藥物學、內科學、外科學ニ就キ筆記試験ヲ行フ

● 藥劑師試験規則 (明治二十二年三月內務省令第三號)

藥劑師試験規則左ノ通之ヲ定ム

藥劑師試験規則

第一條 藥劑師タラントスル者ハ此規則ニ據リ試験ヲ受クヘシ

第二條 藥劑師試験ハ毎年二回舉行シ其舉行ノ地及ヒ期日ハ六箇月前之ヲ告示スヘシ (明治二十七年內務省令第六號ヲ以テ本條改正)

第三條 試験科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

學 說

第一 物理學

第二 化學

第三 植物學

第四 生藥學

第五 製藥化學

實 地

第一 分析術

第二 藥品鑑定

第三 藥物製煉

第四 調劑術

第四條 試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ヲ試験期日三箇月前ニ內務省宛ニテ地方廳ニ差出スヘシ 試験期日一箇月前ニ之ヲ取纏メ內務省ニ進達スヘシ

第五條 (明治二十七年內務省令第六號ヲ以テ本條ヲ削ル)

第六條 藥劑師試験ヲ出願スル者ハ其際試験手数料金五圓ヲ納付スヘシ但納付シタル手数料ハ返付セス (明治二十六年內務省令第五號ヲ以テ本條改正)

第七條 受験上不都合ノ所爲アル者ハ試験委員長ヨリ退場ヲ命スルコトアルヘシ (明治二十七年內務省令第六號ヲ以テ本條改正)

第八條 (明治二十六年同省令第五號ヲ以テ本條ヲ削ル)

第九條 此規則ハ明治二十三年三月一日ヨリ施行ス

● 藥劑師試験ノ學說ニ合格シタル者次回以後ノ 試験ニ實施試験ノミヲ受ケントスル者出願方

(明治二十六年七月內務省令第十一號)

藥劑師試験ノ學說試験ニ合格シタル者ハ次回以後ノ試験ニ於テ實地試験ノミヲ受クルコトヲ得
前項ニ據リ實地試験ノミヲ受ケントスル者ハ試験主事ノ示定シタル期限内ニ願出テ其學說合格承
認證ヲ受ヘシ
實地試験ヲ受ケントスル者ハ其試験願書ニ試験主事ノ學說合格承認證ヲ添ヘ願出ヘシ但試験手數
料金五圓ヲ納ムヘシ(明治三十年四月内務省令第九號ニテ手數料ニ改正ヲ施ス)
本令ハ明治二十六年七月二十日ヨリ施行ス

臺灣藥劑師藥種商製藥者取締規則

(明治二十九年六月臺灣總督府令第十號)

臺灣藥劑師藥種商製藥者取締規則左ノ通相定ム
臺灣藥劑師藥種商製藥者取締規則

- 第一條 藥劑師トハ醫師ノ處方箋ニ據リ藥劑ヲ調合スル者ヲ云フ
- 藥劑師ハ藥品ノ製造及販賣ヲ爲スコトヲ得
- 藥種商トハ藥品ノ販賣ヲ爲ス者ヲ云フ
- 製藥者トハ單ニ藥品ヲ製造シ自製ノ藥品ヲ販賣スル者ヲ云フ
- 第二條 藥劑師ハ内務大臣ヨリ得タル藥劑師免狀ヲ有スル者ニ限ル
- 藥劑師附業セントスルトキハ開業ノ場所ヲ定メ該免狀ヲ添ヘ地方廳ニ届出ヘシ
- 第三條 藥種商及製藥者開業セントスルトキハ地方廳ニ願出免許證札ヲ受クヘシ
- 第四條 日本藥局方ニ記載スル所ノ藥品ハ其性状品質該局方ノ所定ニ適合スルモノニアラザレハ

- 販賣若ハ授受スルコトヲ得ス
- 日本藥局方ニ記載セサル外國藥局方ノ藥品ハ其性状品質該局方ノ所定ニ適合スルモノニアラザ
レハ販賣若ハ授受スルコトヲ得ス
- 第五條 官許ヲ得スシテ藥劑師ノ業ヲ爲シタル者又ハ此規則第四條ニ違犯シタル者ハ二十五日以
内ノ輕禁錮又ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス
- 第六條 知事及島司ハ此規則施行細則ヲ設クルコトヲ得
- 第七條 此規則ハ明治二十九年七月一日ヨリ施行ス

蹄鐵工免許規則 (明治二十三年四月法律第三十一號)

朕蹄鐵工免許規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
蹄鐵工免許規則

- 第一條 蹄鐵工ハ農商務大臣ヨリ蹄鐵工免狀ヲ受ケタル者ニ限ル
- 蹄鐵工トハ他人ノ依頼ニ應ジ蹄鐵ヲ裝シ又ハ蹄ヲ剪ルヲ以テ其ノ業ト爲ス者ヲ謂フ
- 第二條 蹄鐵工免狀ヲ受クルコトヲ得ル者左ノ如シ
 - 一 蹄鐵工免許試験ニ合格シ其及第證書ヲ有スル者
 - 一 官立府縣立ノ農學校若クハ獸醫學校又ハ陸軍部内ニ於テ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者
 - 一 公立又ハ私立學校ニ於テ農商務大臣ノ認可シタル學則ニ依リ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其

ノ卒業證書ヲ有スル者

一 外國ニ於テ官立府縣立ノ農學校若クハ獸醫學校ト同等以上ノ學則ニ依リ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

一 獸醫開業免狀ヲ有スル者但獸醫假開業免狀ヲ有スル者ヲ除ク

第三條 第二條ノ資格ヲ有スル者ニシテ蹄鐵工免狀ヲ受ケント欲スルトキハ試驗及第證書又ハ卒業證書若クハ獸醫開業免狀ノ寫ヲ添ヘ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ出願スヘシ

第四條 蹄鐵工免狀ヲ受ケタル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ蹄鐵工籍ニ登錄シ之ヲ公告スヘシ

第五條 蹄鐵工廢業シタルトキハ本人ヨリ死亡シタルトキハ其ノ遺族又ハ親戚ヨリ三十日以内ニ

地方廳ヲ經由シテ其ノ免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第六條 (明治二十九年法律第二十七號ニ依リ本條消滅)

第七條 蹄鐵工免狀ヲ毀損亡失シ若クハ氏名本籍ヲ變換シタルトキハ其ノ事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ免狀ノ書換ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ(同上法令ニ依リ本條改正)

第八條 蹄鐵工ハ正當ノ事由ナクシテ其ノ業ニ關シ他人ノ依頼ヲ拒ムコトヲ得ス

第九條 免狀ヲ受ケスシテ蹄鐵工ノ業ヲ爲シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條 第八條ヲ犯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十一條 蹄鐵工免許試驗規則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附則

第十二條 蹄鐵工ニ乏シキ地ニ於テハ當分ノ内北海道廳長官府縣知事ノ具狀ニ依リ農商務大臣ハ

第二條ノ資格ナキ者ト雖モ出願者ノ履歷ニ依リ營業區域及年限ヲ定メ蹄鐵工假免狀ヲ授與スル

コトアルヘシ
第十三條 第十二條ニ依リ蹄鐵工假免狀ヲ受ケタル者ニモ亦此ノ規則ヲ適用ス
第十四條 此ノ規則施行以前免許ヲ受ケタル獸醫ニシテ蹄鐵工ヲ兼テシテ欲スル者ハ第三條ニ依リ蹄鐵工免狀ノ下付ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ其ノ免狀ヲ受ケル者ハ第六條ノ手数料ヲ要セス
第十五條 此ノ規則ハ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

蹄鐵工免許試驗規則 (明治二十三年七月農商務省令第六號)

蹄鐵工免許試驗規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

蹄鐵工免許試驗規則

第一條 蹄鐵工免許試驗ハ蹄鐵ノ學術ニ就キ筆記口述及實地ヲ以テ之ヲ行フ

第二條 試驗ハ毎年二回之ヲ行ヒ其ノ場所及期日ハ六月十二月告示スヘシ

第三條 農商務大臣ハ試驗主事及委員ヲ選定シテ試驗ヲ行ハシム

第四條 試驗ヲ受ケント欲スル者ハ住所族籍生年月及受験ノ地名ヲ願書ニ記載シ一月若クハ七月

中其居住ノ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ差出スヘシ

第五條 受験者ハ試驗期日三日前受験地ノ宿處ヲ其地方廳ニ届出ヘシ

第六條 試驗及第者ニハ試驗主事ヨリ及第證書ヲ附與スヘシ

第七條 不正ノ方法ヲ以テ及第シタルトキハ及第ノ效ナキモノトス

賣藥規則 (明治十年一月第七號布告)

賣藥規則別冊ノ通相定候條此旨布告候事

(別冊)

賣藥規則

第一章

第一條 規則ニ稱スル處ノ賣藥トハ丸藥膏藥練藥水藥浴劑散藥煎藥等ヲ調製シ效能書ヲ附シ販賣スルモノヲ云フ(明治十年第八十九號布告ヲ以テ本條改正)

第二條 此賣藥營業者ハ藥味分量用法服量效能ヲ詳記シタル書ニ族籍氏名ヲ記シ其管轄廳ニ願出免許鑑札ヲ受クヘシ(明治十一年第二十七號布告ヲ以テ本項改正)

但免許ヲ受ケタル者ニ箇所以上ニ於テ之ヲ調製スル時ハ其箇所毎ニ免許鑑札ヲ受クヘシ(明治十五年第五十二號布告ヲ以テ但書追加)

第三條 管轄廳ニ於テハ願書ヲ檢査シ其製藥配伍ノ藥品劇毒微毒ニ拘ハラヌ取扱上失誤ヲ生シ易キモノ及ヒ毒藥劇藥取締ニ關係スルモノハ之ヲ許ササルヘシ(明治十一年第二十七號布告ヲ以テ本條改正)

第四條 「第八條ニ記シタル期限中」藥味分量用法服量能書ヲ改正セント欲スルモノ其由ヲ届出箇鑑札ヲ返納シテ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ

第五條 賣藥ヲ請賣セント欲シ其營業者ノ許諾ヲ得タルモノハ族籍氏名ヲ記シタル願書ニ營業者所持ノ免許鑑札寫及ヒ營業者ト取結タル約定書トヲ添ヘ其管轄廳へ願出 免許鑑札ヲ受クヘシ(明治十一年第二十七號ヲ以テ本條改正)

第六條 賣藥營業者及ヒ請賣者共必ス免許ノ看板ヲ掲クヘシ

第七條 賣藥營業者及ヒ請賣者ニ於テ自ラ行商シ又ハ賣子ヲ派出シテ行商ヲ爲サシメント欲スルトキハ其由ヲ管轄廳へ届出行商鑑札ヲ願受ケ行商スル時ハ必ス之ヲ所持スヘシ

第八條 「營業鑑札請賣鑑札行商鑑札」ハ其鑑札記載ノ月ヨリ滿五年ヲ以テ免許ノ期限トス此期限ヲ過キ尙免許ヲ得ント欲スルモノハ舊鑑札ヲ返納シ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ

第九條 「第八條ニ記シタル期限中」第四條ノ改正發賣ヲ願出之ヲ免許スル時ハ新鑑札記載ノ月ヲ以テ一期ノ初月トナスヘシ

第十條 「免許期限内」ト雖トモ「其製藥第三條ニ掲グル處」ノ有害品ナルヲ更ニ發見スル時或ハ營業者製藥ヲ粗惡ニスル等ノコトアル時ハ直ニ鑑札ヲ取上ケ發賣ヲ禁止スルコトアルヘシ(明治十一年第二十七號布告ヲ以テ本條改正)

第十一條 營業者廢業スルカ又ハ禁止セラレル時ハ其請賣者及ヒ賣子共其販賣ヲ許サス

第十二條 請賣札ヲ遺失シ又ハ水火盜難ニ因テ毀失シタル時ハ其仔細ヲ詳記シテ管轄廳へ届出再ヒ之ヲ願受クヘシ

第十三條 免許鑑札ヲ他人ニ讓渡サント欲スル者ハ雙方連印ノ願書ヲ管轄廳ニ差出シ名前書換ヲ請フヘシ

第十四條 賣藥營業者及ヒ請賣者「免許期限内」其相續人ニ於テ之ヲ相續スル時ハ其由ヲ記シ管轄廳へ鑑札名前書換ヲ請フヘシ(明治十年第八十九號布告ヲ以テ本條改正)

第十五條 賣藥營業者廢業シ若クハ禁止セラレタルトキハ營業者ハ勿論其請賣者ニ於テモ總テ諸鑑札ヲ返納スヘシ

第二章

第十六條 賣藥營業者ハ左ノ通税金並鑑札料ヲ上納スヘシ(明治十四年第二十六號布告ヲ以テ本條改正)

賣藥營業稅 藥劑一方ニ付一ケ年 金二圓
右鑑札料 藥劑一方ニ付一枚 金二十錢

但第二條但書ニ依リ免許鑑札ヲ受クル者ハ其箇所毎ニ本文ノ税金並鑑札料ヲ納ムヘシ(明治十五年第五十二號布告ヲ以テ但書追加)

第十七條 水火盜難ニ因リ鑑札ヲ毀失シ更ニ新鑑札ヲ願受ル時ハ其鑑札料ノ半高ヲ納ムヘシ

第十八條 税金ハ毎年兩度ニ區分シ前半年分ハ一月三十一日限リ後半年分ハ七月三十一日限リ鑑札料ハ其都府並ニ管轄廳ニ上納スヘシ(明治十一年第四號布告ヲ以テ税金納期ヲ改正ス)

第十九條 税金ハ六月以前免許ノ者ハ全年分七月以後ハ半年分廢業ノ者ハ七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分ヲ納ムヘシ但第十條ノ有害品ナルヲ更ニ發見セシ時ニ限リ月割ヲ以テ税金ヲ納メシムヘシ(明治十一年第二十七號布告ヲ以テ本條改正)

第三章

第二十條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ又ハ自ラ行商シ又ハ行商セシムル者及ヒ之ヲ貸ス者「又ハ期限過タル鑑札ヲ以テ自ラ行商シ又ハ行商セシムル者」ハ其鑑札ヲ取上ケ藥劑一方ニ付五圓ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十一條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ「又ハ期限過タル鑑札ヲ以テ請賣スル者」及ヒ無鑑札ノ者ヲシテ請賣セシメ又ハ鑑札ヲ貸ス者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥ヲ沒收シ藥劑一方ニ付十圓ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十二條 免許ヲ受ケスシテ私ニ藥味分量用法服量能書等ヲ改更シ又ハ許可ヲ經スシテ無稽ノ妄說ヲ記載シ世人ヲ街惑スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥ヲ沒入シ藥劑一方ニ付十圓以上二十五圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十三條 無鑑札ニテ營業スル者又ハ營業者ニシテ私ニ請賣者ニ藥劑ヲ調製セシムル者又ハ請賣者自ラ之ヲ調製スル者ハ其製藥及ヒ賣得金ヲ沒入シ藥劑一方ニ付二十五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ(明治十四年第二十六號布告ヲ以テ本條改正)

第二十四條 諸鑑札ヲ偽造シ又ハ他人ノ賣藥ヲ贋造シテ發賣スル者ハ其製藥及ヒ其賣得金ヲ沒入シ藥劑一方ニ付五十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十五條 私ニ有毒藥ヲ配伍スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥及ヒ其賣得金ヲ沒入シ藥劑一方ニ付百圓以上五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十六條 以上ノ犯則者ヲ見届ケ訴出ル者アル時ハ事實取糺ノ上相違ナキニ於テハ其實トシテ其罰金ノ半高ヲ與フヘシ

藥品營業並藥品取扱規則

(明治二十二年三月法律第十號)

除藥品營業並藥品取扱規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
藥品營業並藥品取扱規則

第一章 藥劑師

第一條 藥劑師トハ藥局ヲ開設シ醫師ノ處方箋ニ據リ藥劑ヲ調合スル者ヲ云フ
藥劑師ハ藥品ノ製造及販賣ヲ爲スコトヲ得

第二條 藥劑師ハ其學術試驗ヲ受ケ年齡滿二十年以上ニシテ內務大臣ヨリ藥劑師免狀ヲ得タル者ニ限ル

第三條 藥劑師免狀ヲ得ントスル者ハ試驗及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シ內務省ニ願出ヘシ

第四條 (明治二十九年法律第二十七號ニ依リ本條消滅)

第五條 藥劑師免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ內務省ノ藥劑師名簿ニ登錄シ之ヲ公告スヘシ

第六條 藥劑師免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ヲ變換スル等免狀面ニ異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シ免狀書換ヲ內務省ニ願出ヘシ

第七條 (同上)

第八條 藥劑師廢業又ハ死亡シタルトキハ十日以内ニ地方廳ニ届出ヘシ

第九條 藥劑師ニ非ラサレハ藥局ヲ開設スルコトヲ得ス

第十條 藥劑師藥局ヲ開設シ又ハ閉鎖シタルトキハ十日以内ニ地方廳ニ届出ヘシ

第十一條 藥劑師 人ニシテ二箇所以上ノ藥局ヲ開設スルコトヲ得ス但支局ヲ設クルトキハ別ニ藥劑師ヲ置キ之ヲ管理セシムヘシ

第十二條 藥局ニハ日本藥局方第一表ノ藥品ヲ備フヘシ

第十三條 藥局ニ備付ノ秤量器ハ最モ精確ナルヲ要シ權衡ハ少クモ一「サンチグラム」ヲ定量シ得ルモノヲ備フヘシ

第十四條 藥劑師ハ患者ノ氏名、年齡、藥名、分量、用法、用量、處方ノ年月日及醫師ノ氏名ヲ自記シ又ハ調印シタル處方箋ニ據リ調劑スヘキモノトス但處方箋中疑ハシキ點アルトキハ其醫師ニ實シ證明書ヲ得ルニ非サレハ調劑スルコトヲ得ス

第十五條 藥劑師ハ調劑劑ヲ備ヘ處方箋ヲ謄寫シ置クヘシ

第十六條 處方箋ヲ受ケタルトキハ晝夜ヲ問ハス何時ニテモ調劑スヘキモノトス正當ノ事故ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十七條 處方箋中ノ藥品ニ關テアルトキハ其醫師ニ通知シテ指揮ヲ乞フヘシ藥劑師隨意ニ之ヲ省畧シ又ハ他藥ヲ代用スルコトヲ得ス

第十八條 毒藥劇藥ノ處方箋ハ藥劑師檢印シテ處方箋ノ日付ヨリ滿十年間之ヲ保存スヘシ

第十九條 毒藥劇藥ハ一回使用セシ處方箋ニ據リ再ヒ調劑スルコトヲ得ス但特ニ醫師ノ通知アルモノハ此限ニアラス

第二十條 患者ニ與フル藥劑ノ容器又ハ包紙ニハ處方箋ニ據リ内外用ノ別、用法、用量、年月日、患者ノ氏名、藥局ノ地名及藥劑師ノ氏名ヲ記スヘシ

第二十一條 藥種商 藥種商トハ藥品販賣ヲ爲ス者ヲ云フ

第二十二條 藥種商ハ地方廳ノ免許證札ヲ受クヘシ

第二十三條 毒藥劇藥ハ衛生試驗所又ハ藥劑師製藥者ニ於テ封緘シタル容器ヲ開キテ零賣スルコトヲ得ス

第二十四條 毒藥劇藥ハ適當ノ容器ニ納メ之ヲ封緘スヘシ其容器ヲ開キテ零賣スルコトヲ得ス

第三章 製藥者

第二十三條 製藥者トハ單ニ藥品ヲ製造シ自製ノ藥品ヲ販賣スル者ヲ云フ

第二十四條 製藥者ハ地方廳ノ免許證札ヲ受クヘシ

第二十五條 毒藥劇藥ハ適當ノ容器ニ納メ之ヲ封緘スヘシ其容器ヲ開キテ零賣スルコトヲ得ス

第四章 藥品取扱

- 第二十六條 日本藥局方ニ記載スル所ノ藥品ハ其性状、品質、該局方ノ所定ニ適合スルモノニ非サレハ販賣者クハ授與スルコトヲ得ス
- 第二十七條 日本藥局方ニ記載セサル藥品ハ其據ル所ノ外國藥局方名ヲ記スヘシ其性状、品質、該局方ノ所定ニ適合シタルモノニ非サレハ販賣者クハ授與スルコトヲ得ス
何レノ藥局方ニモ記載セサル新規ノ藥品ハ衛生試驗所ノ検査ヲ經其試驗成績ヲ記スルモノニ非サレハ販賣者クハ授與スルコトヲ得ス
- 第二十八條 藥局方中特ニ貯藏法ヲ示シタルモノハ其所定ニ從フヘシ
- 第二十九條 毒藥劇藥ハ他ノ藥品ト區別シ毒藥ハ鎖鑰ヲ備ヘタル場所ニ貯藏スヘシ
- 第三十條 毒藥劇藥ハ職業上必要ト認メタル者ヨリ其藥名、量數、使用ノ目的、年月日及住所、氏名職業ヲ記シ且捺印シタル證書ヲ差出スニ非サレハ之ヲ販賣者クハ授與スルコトヲ得ス
前項ノ證書ハ其日付ヨリ滿十年間之ヲ保存スヘシ
- 第三十一條 毒藥劇藥ハ前條ニ記載シタル證書アルモ幼稚ノ者其他不安心ト認ムル者ニハ交付スヘカラス
- 第三十二條 毒藥劇藥ハ藥品ノ容器又ハ包紙ニ其名稱及販賣授與者ノ住所氏名ヲ記シ毒藥ハ毒字劇藥ハ劇字ヲ付記スヘシ
- 第三十三條 藥劑師ニ於テ醫師ノ處方箋ニ據リ患者ニ與フル藥劑ハ第三十條及第三十二條ノ手續ヲ爲スヲ要セス
- 第三十四條 藥劑師藥種商製藥者ノ間ニ於テハ第三十條及第三十二條ニ記載シタル手續ヲ要セス

其藥劑師藥種商製藥者タルノ證明書ヲ以テ毒藥劇藥ヲ賣買スルコトヲ得

第三十五條 毒藥劇藥ノ品目ハ内務省令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十六條 藥品ノ容器又ハ包紙ニハ假名又ハ漢字ヲ以テ其藥名ヲ記スヘシ但羅旬語又ハ他ノ外國語ト併記スルハ妨ケナシ

第三十七條 藥品ノ容器又ハ包紙ニハ製造者ノ住所氏名ヲ記スヘシ其外國製ニ係ルモノハ引取人ノ住所氏名ヲ記スヘシ但藥品製造會社ニ在テハ其所在地名及會社名ヲ記スルモ妨ケナシ

第三十八條 内務大臣ハ監視員ヲシテ藥局及藥品販賣又ハ製造スル場所ヲ巡視セシムルコトアルヘシ

監視員ハ巡視ノ際其證票ヲ携帯スヘシ

第五章 罰則

第三十九條 官許ヲ得シテ藥劑師ノ業ヲ爲シタル者又ハ第十六條第十八條第二十二條第二十五條第二十六條第二十七條第三十條第一項ニ違背シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十條 第十一條第十四條第一項第十七條第十九條第二十九條第三十條第二項第三十一條第三十二條ニ違背シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十一條 第六條第八條第十條第十二條第十三條第十四條第二項第十五條第二十一條第二十四條第二十八條第三十六條第三十七條ニ違背シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第四十二條 内務大臣ハ此規則實行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令及訓令ヲ發布スヘシ但藥種商製藥者取締ニ係ル細則ハ北海道廳長官府縣知事之ヲ定ムヘシ

附則

第四十三條 醫師ハ自ら診察スル患者ノ處方ニ限り第二十六條第二十七條第二十九條ニ從ヒ自宅ニ於テ藥劑ヲ調合シ販賣授與スルコトヲ得此場合ニ於テハ第三十八條ノ監視ヲ受クヘシ
醫師ハ第三十四條ニ從ヒ醫師タルノ證明書ヲ以テ藥劑師藥種調製藥者ヨリ毒藥劇藥ヲ買取ルコトヲ得

第四十四條 此規則施行以前ニ於テ内務省ヨリ藥舖開業免狀ヲ受ケタル者ハ藥劑師タルノ效ヲ有ス

第四十五條 阿片賣買ニ關スル事項ハ明治十一年(八月)第二十號布告ニ據ル

第四十六條 醫科大學藥學科及高等「中」學校醫學部藥學科ノ卒業證書ヲ有シ年齡滿二十年以上ノ者ハ其證書ヲ以テ此規則第三條ニ據リ藥劑師免狀ノ下付ヲ願出ルコトヲ得此場合ニ於テハ内務大臣ハ試驗ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ(明治二十五年法律第六號ヲ以テ本條改正)

第四十七條 此規則ハ明治二十三年三月一日ヨリ施行ス

第四十八條 明治十三年(一月)第一號布告藥品取扱規則ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

藥品巡視規則 (明治二十二年三月内務省令第四號)

藥品巡視規則左ノ通之ヲ定メ明治二十三年三月一日ヨリ施行ス

藥品巡視規則

第一條 衛生官吏警察官吏及ヒ藥劑師ヲ以テ監視員ト爲シ藥局及ヒ藥品ヲ販賣又ハ製造スル場所ヲ巡視セシムヘシ

第二條 監視員藥局ヲ巡視スルトキハ左ノ各項ヲ検査スヘシ

一 藥品

二 藥品營業並藥品取扱規則第十二條第十三條第二十八條第二十九條第三十六條第三十七條ノ事項

三 調劑錄

第三條 監視員藥品ヲ販賣又ハ製造スル場所ヲ巡視スルトキハ左ノ各項ヲ検査スヘシ

一 藥品

二 藥品營業並藥品取扱規則第二十二條第二十八條第二十九條第三十六條第三十七條ノ事項

第四條 監視員ハ公立病院及ヒ醫師ノ調劑所ニ臨ミ藥品ヲ検査スルコトアルヘシ

第五條 第二條第三條ノ外ニ於テ藥品ヲ貯藏スル場所アレハ其場所ニ就キ検査スルコトアルヘシ

第六條 巡視ノ期日ハ豫メ告示セル其時間午前八時ヨリ午後五時迄ノ間トス

第七條 監視員ハ必要量ノ藥品ヲ携歸シテ検査スルコトアルヘシ

第八條 監視員ノ検査ニ消費シタル藥品ハ其代價ヲ請求スルコトヲ得

日本藥局方 (明治二十四年五月内務省令第五號)

明治十九年(六月)當省令第十號日本藥局方左ノ通改正シ明治二十五年一月一日ヨリ施行ス但前日本藥局方所載ノ藥品ハ本法施行ノ後ト雖モ明治二十六年十二月三十一日マテハ本方ト共ニ仍ホ其效ヲ有ス其前日本藥局方ニ據ルモノハ「前日本藥局方」ノ六字ヲ明記スヘシ

(別冊ハ別ニ單行ス)

藥用阿片賣買並製造規則

(明治十一年八月第二十一號布告)

明治三年八月布告生阿片取扱規則ヲ廢シ藥用阿片賣買並製造規則左ノ通相定候條此旨布告候事但施行時日ハ追テ内務省ヨリ可相達事

藥用阿片賣買並製造規則

第一條 阿片ノ賣買及ヒ製造ハ藥用品ニ限リ此規則ニ依テ之ヲ許可ス

第二條 藥用阿片ハ内國產若クハ外國產ヲ論セス總テ内務省ニ於テ其品位ヲ定メテ之ヲ買上ケ地方廳ヲシテ阿片卸賣特許藥舖ニ之ヲ拂下シムヘシ(明治二十年勅令第五十二號ヲ以テ本條改正)

第三條 地方廳ヨリ拂下クル阿片ハ量目ニ及テ以テ一器トシ每器衛生試驗所ノ印紙ヲ貼附スルモノトス(同上)

第四條 地方廳ハ土地ノ廣狹位置ヲ度リ一管内相當ノ人員ヲ限リ藥舖ノ身元人物ヲ選ミテ内務省

ニ稟議シ鑑札ヲ受ケテ之ヲ本人ニ交付スヘシ但廢業ノ者アル節ハ其鑑札ヲ内務省ニ返納スヘシ

第五條 特許鑑札ヲ受タル藥舖ノ住所姓名ハ該管轄廳ヨリ管内ノ公私病院醫師藥舖一般ニ報告スヘシ但廢業ノ者アル節モ本文ニ準シ速ニ報告スヘシ

第六條 特許鑑札ヲ受タル藥舖ハ其店頭ニ特許藥用阿片賣捌所ト大書シタル看板ヲ掲ケ置ケヘシ

第七條 特許ヲ受タル藥舖ハ半年分賣捌ノ高ヲ豫算シ毎年兩度該地方廳ニ申立テ其拂下ケヲ請フヘシ但闕乏ノ節ハ臨時拂下ヲ請フコトヲ得(同上)

第八條 凡ソ醫師病院及ヒ一般藥舖等ニ於テ藥用阿片ヲ要スルトキハ其量目並ニ其住所姓名及年

月日(病院ハ其名稱及ヒ院長若クハ副長ノ姓名)ヲ記シ調印シタル證書ヲ以テ特許藥舖ニ就キ之ヲ購求スヘシ特許藥舖ニ於テハ之ヲ賣渡スニ其量目一度ニ四十匁ヲ超エヘカラス但病院及醫師等ニ於テ便宜ニ依リ一般藥舖ニ就キ之ヲ購求スルト一般藥舖相互ニ賣買スルトハ妨ケスト雖モ必ス本條ノ證書ヲ以テスヘシ且其量目一度ニ八匁ヲ超ヘカラス

第九條 凡テ内外國人共醫師ノ處方箋ヲ持參シタル者ノ外ハ特許藥舖並ニ一般藥舖ニ於テ一切之ヲ賣渡スヘカラス

第十條 特許藥舖ハ每半年分阿片拂受並ニ一匁以上賣捌ノ高及ヒ買入ノ住所姓名並ニ一匁以下賣捌ノ總高算明細表正副二通ヲ造リ其管轄廳ニ差出スヘシ尤一匁以下ノ分ハ平常其明細ヲ簿記シ

置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ但管轄廳ハ其一通ヲ内務省ニ進達スヘシ

第十一條 醫師病院一般藥舖ニ於テハ每半年必シモ前條明細表ヲ差出スヲ要セスト雖モ平常其明細ヲ簿記シ置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ

第十二條 藥用阿片ヲ製造セント欲スル者ハ罌粟ノ種類及ヒ培養採取製造ノ方法ヲ記シ管轄廳ヲ經由シテ内務省ノ免許鑑札ヲ受ケヘシ

第十三條 阿片製造人ハ其製造シタル阿片ノ量目ヲ記シ署名調印シタル願書ヲ以テ地方廳ヲ經由シ内務省ノ買上テ願フヘシ右買上ケテ受クルノ外決シテ内外人民ニ販賣スルコトヲ許サス但内務省ニ於テ其品位藥用ニ適セサルモノトスルトキハ地方廳ヨリ其旨ヲ製造人ニ通知シ其阿片ハ其願ニ預リ置クヘシ(明治二十年勅令第五十二號ヲ以テ但書改正)

第十四條 阿片買上ケ及ヒ拂下ケノ代價ハ歲ノ豊凶及ヒ外國一般ノ相場等ニ因テ高低アルヘシト雖トモ其品位ニ應シテ價格ヲ定ムルハ該藥主用ノ性分即チ「モルヒチ」ノ多少ニ因ルヘシ

第十五條 内務省ニ於テ買上ケ及拂下クル阿片ノ「モルヒネ」含量ハ買上ケ品ハ百分中ニ九分以上
拂下ケ品ハ百分中ニ十分以上ヲ含有スルモノトス(二十年勅令第五十二號ヲ以テ本條改正)
第十六條 此規則ニ違背スル者ハ其犯情ニ從ヒ阿片賣買者クハ製造ヲ禁シ其所有ノ阿片ヲ沒收シ
百五十圓ヨリ五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

◎石炭酸等傳染病流行ノ際販賣方

(明治十三年五月第二十三號布告)

石炭酸其他劇藥ハ「本年(一月)第一號布告」藥品取扱規則第四條ニ照シ可取扱ノ處傳染病流行ノ際
ハ内務省布達ニ從ヒ消毒藥ニ調製候分ニ限リ藥舖ニ於テ販賣差許條販賣望ノ者ハ其管轄廳ニ可願
出此旨布告候事

◎藥品ノ證明ニ關スル件

(明治三十年九月内務省令第二十六號)

藥劑師化學者及會社等ニシテ醫療用藥品ノ検査證明ヲ業務トスル者ハ藥品ノ性状、品質日本藥局
方ニ記載アルモノハ該局方記載ナキモノハ其ノ據ル所ノ外國藥局方ノ所定ニ適合スルモノニアラ
サレハ試験濟印紙ヲ貼付シ又ハ適合ノ證明ヲ與フルコトヲ得ス違背シタル者ハ二圓以上十圓以下
ノ罰金ニ處ス
前項ニ依リ處罰セラレタル者ニハ爾後検査證明ノ業務ヲ停止又ハ禁止スルコトアルヘシ

停止禁止ノ命令ニ背キ検査證明ヲ爲シタル者ハ五圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

衛生醫藥終

第二十五類 社 寺

●神社改正規則 (明治六年十二月布告第四百二十一號)

去ル明治四年辛未五月中相達候神社改正規則今般左之通更定候條此旨相心得神官へ布告スへキ事
神社改正規則

- 第一 (明治二十年閣令第四號ニ依リ本條消滅) -
- 第二 (明治二十年内務省訓令第十八號ニ依リテ本條消滅)
- 第三 同上二社ノ私祭及土地或ハ人民ニ係ル事件ハ其地方官ノ指揮ヲ受クルコト勿論タルヘシ
- 第四 (明治七年第十二號布告ヲ以テ本條ヲ改正シタリシカ明治二十年内務省訓令第十八條ニ依
リテ消滅ス)
- 第五 府縣社以下ハ地方官ノ管轄ニ屬スト雖其社格等差ヲ定メ或ハ之ヲ増減スル等都テ同旨ヘシ
申シテ其處分ヲ乞フヘシ其他ノ事件ト雖モ臨時難決モノ亦之ニ同シ
- 第六 (同上法令ニ依リテ消滅ス)

●官國幣社保存費ニ關スル件

朕官國幣社保存費ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
(明治三十年三月勅令第五十四號)

第一條 毎年度官國幣社保存費中各社共通ノ費途ニ充ツル金額ハ内務大臣ニ於テ内務省社寺局長

ヲシテ之ヲ保管セシメ其ノ收支ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第二條 前條ノ金額ハ預金トシテ金庫ニ寄託スヘシ

附則

第三條 本令ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス

◎ 鄉村社祠官祠掌給料ハ人民ノ信仰ニ任セ適宜

給與セシム (明治六年二月太政官達第六十七號)

壬申第五十八號布告ノ通各地方鄉村社祠官祠掌給料ノ儀ハ是迄民費課出ノ規則ニ候處自今相廢シ候條人民ノ信仰ニ任セ適宜給與爲致可申此段相違候事

◎ 府縣社以下祠官祠掌ノ等級ヲ廢シ身分取扱

方 (明治十二年十一月太政官達第四十五號)

府縣社以下祠官祠掌ノ等級ヲ廢シ身分取扱ハ一寺住職同様タルヘシ此旨相違候事

◎ 府縣社以下祠官祠掌ノ進退取扱方

(明治八年五月教部省達書第十八號)

府縣社以下祠官祠掌進退是迄成規無之候處自今氏子共歸依之者相選氏子總代或(同區内)ニテ重立

候神官二名以上進退爲願出候上猶人體可否篤ト取調進退可申付此旨相違候事但氏子無之向ハ其地人民ヨリ本文同様之手續ヲ以可爲願出事

◎ 府縣社以下祠官祠掌進退取扱方

(明治十二年十一月内務省乙第四十八號)

本年(十一月)第四十五號公達ノ趣ニ付自今府縣社以下祠官祠掌進退ノ節ハ八年(五月)教部省第十入號達書ノ手續ニ準シ爲願出候上於其地方應許可スヘシ此旨相違候事但出願ノ節地方長官ニ於テ許可難致事情有之モノハ委詳具狀同省へ處分方向出ヘシ

◎ 官國幣社神官ヲ廢シ更ニ神職ヲ置ク

(明治二十年三月閣令第四號)

官國幣社ノ神官ヲ廢シ更ニ左ノ神職ヲ置ク

宮司
禰宜
主典

宮司ハ内務省ニ於テ之ヲ補シ禰宜主典ハ北海道廳府縣ニ於テ之ヲ補ス靖國神社宮司以下ハ陸軍省海軍省ニ於テ之ヲ補ス
宮司ハ奏任ノ待遇ヲ受ケ禰宜主典ハ判任ノ待遇ヲ受ク

府社縣社以下神社ノ神職ニ關スル件

(明治二十七年二月勅令第二十二號)

朕府社縣社以下ノ神社ノ神職ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 府社縣社郷社ニ左ノ神職ヲ置ク

社司 一人

社掌 若干人

官國幣社神職奉務規則 (明治二十四年八月内務省令第十七號)

官國幣社神職奉務規則左ノ通相定ム

官國幣社神職奉務規則

第一條 官國幣社神職ハ國家ノ宗祀ニ從事シ國家ノ禮典ヲ代表スル職務タルヲ以テ平素國體ヲ辨シ

國典ヲ修メ躬行ヲ正シクシテ以テ本務ヲ盡スヘシ

第二條 官國幣社祭典ハ國家彝倫ノ標準タルヲ以テ齊肅恭敬首トシテ報本反始ノ誠意ヲ表スヘシ

第三條 新年新嘗例祭等總テ官祭ノ典則ハ非常ノ事故ニアラサレハ成規ノ時間ヲ猥リニ伸縮スヘ

カラス

第四條 祭祀典則ハ舊來ノ儀式ヲ遵守シ其社ノ禮祭民俗因襲ノ神賑等適宜行フコトヲ得但臨時祭

ヲ行ハントスルトキハ地方廳及所轄警察署又ハ分署ニ届出スヘシ

第五條 人民ノ請求ニ應シ神符神像等ヲ授クルハ妨ナシト雖トモ苟モ食汚ノ所爲アルヘカラス

第六條 社殿及其境内ヲ清潔ニシ修造取締等常ニ意ヲ注キ蓄積ヲ失墜セス悠久ノ保存ヲ要ス

第七條 神社所藏ノ寶物什器古文書類等常ニ散失ナキ樣監護シ神社所有ノ財産ヲ管理シ金穀ヲ出

納スヘシ

第八條 神社ノ財産中人民ノ寄附ニ係リ永遠ノ目的ヲ以テ備ヘタル土地金穀ヲ變更セントスル場

合ハ官國幣社ト雖トモ氏子又ハ講社アルトキハ其總代協議ノ上地方廳ノ許可ヲ得ヘシ

第九條 神社ニ委託山林アルトキハ其栽植伐採其他山林ノ保護ニ注意シ損害ヲ來スカ如キゴトナ

カラシムルヲ要ス

府縣鄉村社神官奉務規則

(明治二十四年七月内務省令第十二號)

府縣鄉村社神官奉務規則左ノ通改正ス

府縣鄉村社神官奉務規則

第一條 神官ハ神明ニ對シ尊崇悃誠ヲ主トシ典例ニ從ヒ各其本務ヲ盡スヘシ

第二條 神官ハ祭祀ノ典則舊來ノ儀式ヲ遵守シ決テ紛亂スヘカラス其社ノ例祭民俗因襲ノ神賑等

ハ適宜行フコトヲ得但臨時祭ヲ行ハントスルトキハ所轄警察署又ハ分署ヘ届出ヘシ

第三條 神官ハ人民ノ請求ニ應シ神符神像等ヲ授クルハ妨ケナシト雖トモ苟モ食汚ノ所爲アルヘ

カラス

第四條 神官ハ社殿及其境内ヲ清潔ニシ修造取締等常ニ意ヲ注キ蓄積ヲ失墜セス汚穢破損ニ至ラ

シムヘカラス

第五條 神官ハ神社所藏ノ寶物什器及古文書類ヲ監護シテ散逸セシムヘカラス如何ナル場合ト雖モ賣却讓與又ハ質入書入スヘカラス

第六條 神官ハ神社所有ノ財産ヲ管理シ金穀ヲ出納スヘシ

第七條 神官ハ其管理ニ係ル不動産積立金穀ヲ濫リニ賣却讓與又ハ質入書入スヘカラス若シ不得止必要アルトキハ氏子又ハ信徒ノ協議ヲ經地方廳ノ許可ヲ受クヘシ

第八條 神社ニ委託山林アルトキハ其植栽伐採其他山林ノ保護ニ注意シ損害ヲ來スカ如キコトナカラシムルヲ要ス

官國幣社神職試驗規則 (明治二十五年內務省訓令第四號)

官國幣社神職試驗規則左ノ通相定ム

官國幣社神職試驗規則

第一條 神職試驗ハ高等尋常ノ二種ニ分ツ

第二條 宮司權宮司ハ高等試驗合格ノ者禰宜主典ハ尋常試驗合格ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 高等試驗ハ內務省ニ委員ヲ設ケ本省ニ於テ施行ス尋常試驗ハ各地方廳ニ委員ヲ置キ施行スヘシ但高等試驗ト雖モ時宜ニ因リ地方廳ニ於テ施行スルコトアルヘシ尤問題及試驗成績等ハ本省ニ於テ撰定スヘシ

第四條 尋常試驗ハ施行前其地方廳ニ於テ豫メ問題取調本省ノ認可ヲ受クヘシ

第五條 試驗合格者高等試驗者ヘハ內務省ヨリ尋常試驗者ヘハ其廳府縣ヨリ及第證書ヲ付與スヘシ尤合格者ト雖モ其期ニ需要ノ人員ハ合格者中ヨリ選抜シテ之ヲ定ム其選ニ當ラサル合格者ハ

及第證書付與ノ日ヨリ三年ノ後ハ證書ノ效ヲ有セス (明治二十六年九月內務省訓令第十五號ニテ本條改正)

第六條 宮司權宮司選舉ノ節ハ高等試驗合格證書寫ヲ添本大臣ヘ差出スヘシ

第七條 禰宜主典ハ其地方長官限リ申付其都度本大臣ヘ報告スヘシ

第八條 試驗科目ヲ分ツ左ノ如シ

- 高等試驗科目
 - 六國史(問題説明、書取) 令義解 同上
 - 延喜式 同上 萬葉集 同上
 - 法曹至要抄 同上 考證一題
 - 作文二題(宣命體、公文體)
 - 尋常試驗科目
 - 古事記(講義、書取) 土佐日記 同上
 - 職原抄 同上 祝詞式 同上
 - 作文二題(祝詞、公文體)

第九條 本試驗合格證書所持ノ者ハ官國幣社神職中該證書相當ノ位置ヘ轉補又ハ再補スルコトヲ得

第十條 左ニ掲グルモノハ試驗ヲ要セス直ニ宮司權宮司ニ補スルコトヲ得

- 一 其神社神統又ハ維新前十代以上該神社ヘ奏仕セシ重立タル者及ヒ其子孫
- 二 其神社祭神ノ一族臣下ノ內祭神在世ニ於テ功蹟顯著史乘ニ著名アル者ノ統末

- 三 滿三年以上判任官八級俸以上奉職セシ者(同令ニテ本項改正)
- 四 皇典講究所學階一等司業以上ノ者
- 五 該神社所在地ノ舊藩主
- 六 維新前王事鞅掌ノ功ニ依リ官ノ褒賞ヲ受ケタル者但以上六項ニ該當スル者ト雖モ現時ノ性行其他不適當ト認ムルモノハ採用ノ限ニアラス
- 七 神官權願宜以上在職ノ者(同令ニテ本項追加)
- 第十一條 左ニ掲クルモノハ試験ヲ要セス直ニ禰宜主典ニ申付ルコトヲ得
 - 一 維新前五代以上該神社ヘ奏仕セシ者及ヒ其子孫
 - 二 滿二年以上判任官以上奉職セシ者(同令ニテ本項改正)
 - 三 皇典講究所學階五等司業以上ノ者但性行其他不適當ト認ムルモノハ前同斷
 - 四 神官社掌以上在職ノ者(同令ニテ本項追加)
- 第十二條 本規則施行前ヨリ在職ノ者ハ試験ヲ要セス其現職ニ在ルコトヲ得但明治二十五年三月以前ニ於テ滿五年以上官國幣社神職ヲ勤メ退職シタル者ハ試験ヲ要セス前職同等若クハ其以下ノ神職ニ補スルヲ得(同令ニテ本項追加)
- 第十三條 官幣小社波上宮別格官幣社靖國神社神職ハ本規則ニ不拘從來ノ取扱ニ據ル
- 第十四條 採用スヘキ人員及職名試験期日等ハ其時時官報又ハ新聞紙其他便宜ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ
- 第十五條 本規則ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

府社縣社以下神社神職登用規則

(明治二十八年八月內務省令第十號)

府社縣社以下神社神職登用規則左ノ通相定ム
府社縣社以下神社神職登用規則

第一章 社司及社掌ノ資格

- 第一條 社司社掌試験ニ及第シタル者ニアラサレハ社司社掌ニ補スルコトヲ得ス
- 第二條 左項ノ一ニ當ル者ニシテ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムル者ハ試験ヲ經スシテ社司ニ補スルコトヲ得
 - 一 明治元年以前ニ於テ五代以上引續キ其ノ神社ニ奉祀シタル者ノ子孫
 - 二 神宮皇學館本科及専科ヲ卒業シタル者
 - 三 皇典講究所六等以上ノ學階證書ヲ有スル者
 - 四 滿二年以上判任待遇以上ノ職ニ在リタル者
- 第三條 左項ノ一ニ當ル者ニシテ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムル者ハ試験ヲ經スシテ社掌ニ補スルコトヲ得
 - 一 明治元年以前ニ於テ五代以上引續キ其ノ神社ニ奉仕シタル者ノ子孫
 - 二 神宮皇學館本科及専科ヲ卒業シタル者
 - 三 皇典講究所八等以上ノ學階證書ヲ有スル者
 - 四 滿二年以上判任待遇以上ノ職ニ在リタル者

第四條 官國幣社神職及神職タリシ者ハ試験ヲ經スシテ社司社掌ニ補スルコトヲ得

第二章 社司及社掌候補者ノ推薦

第五條 神社ニ神職ノ闕員アルトキハ北海道廳長官府縣知事ハ十五日以内ニ氏子(氏子ナキトキハ信徒)總代ニ候補者ノ推薦ヲ命スヘシ

第六條 第五條ノ場合ニ於テ氏子(氏子ナキトキハ信徒)總代ハ命令ヲ受ケタル日ヨリ一箇月以内ニ其候補者ノ履歴書及資格證明書ヲ具シ北海道廳長官府縣知事ニ推薦スヘシ

第七條 社司及社掌ノ候補者ハ闕員ノ二倍トス

第八條 氏子(氏子ナキトキハ信徒)總代ニ於テ候補者ヲ推薦シタルトキハ北海道廳長官府縣知事ハ其履歴及資格ヲ調査シ學識德行其任ニ適スルモノヲ選擇シテ其職ニ補スヘシ

第九條 第八條ノ場合ニ於テ候補者其任ニ適セスト認ムルトキハ北海道廳長官府縣知事ハ更ニ第五條ノ規定ニ依リ氏子(氏子ナキトキハ信徒)總代ニ候補者ノ推薦ヲ命スヘシ

第三章 附則

第十條 此規則ハ明治二十八年九月一日ヨリ施行ス

第十一條 此規則施行前ヨリ在職ノ者ハ引續キ其ノ職ニ在ルコトヲ得

第十二條 明治二十五年(三月十七日)當省訓令第五號其ノ他此規則ニ牴觸スル命令ハ總テ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

社司社掌試験規則

(明治二十八年九月內務省令第十六號)

社司社掌試験規則左ノ通相定ム

社司社掌試験規則

第一條 地方廳ニ社司社掌試験委員長一名及社司社掌試験委員五名ヲ置キ社司社掌ノ試験ヲ行ハシム

第二條 社司社掌試験委員長及社司社掌試験委員ハ北海道廳長官府縣知事之ヲ選任スヘシ

第三條 社司社掌試験委員ハ此規則ニ依リ試験ヲ施行シ試験委員長ヨリ其ノ成績ヲ北海道廳長官府縣知事ニ具申スヘシ

第四條 北海道廳長官府縣知事ハ前條ノ具中ニ依リ合格ト認ムル者ニ合格證書ヲ付與スヘシ

第五條 年齢滿二十年以上ノ男子ニシテ左ノ諸項ノ一ニ該當セサル者ハ社司社掌試験ヲ受クルコトヲ得

- 一 重罪輕罪ヲ犯シタル者
- 二 破産若クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セス又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第六條 試験ヲ施行スルトキハ豫メ其ノ試験期日及場所等ハ其ノ時時官報又ハ新聞紙其ノ他便其ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第七條 社司ノ試験科目左ノ如シ

古事記(口述筆答)

祝詞式(同上)

現行神社法令(筆答)

第八條 社掌ノ試験科目左ノ如シ

職原抄(同上)

作文(祝詞體公文體)

算術(四則)

古事記上卷(口述筆答)

作文(祝詞體公文體)

算術(四則)

祝詞式(同上)

現行神社法令(筆答)

第九條 試驗問題ハ社司社掌試驗委員之ヲ定メ社司社掌試驗委員長ヨリ北海道廳長官府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

第十條 此規則施行ニ必要ナル細則ハ北海道廳長官府縣知事之ヲ定メ内務大臣ニ報告スヘシ

宮司權宮司補免方ノ件

(明治二十六年九月内務省訓令第十四號)

官國幣社宮司進退ノ儀ハ明治二十年當省訓令第二三八號第三項並一十五年當省訓令第四號第六條ノ旨モ候處自今宮司權宮司補免ノ儀ハ地方廳ノ選舉稟申ヲ廢シ當省限り處分ス

皇典講究所學階試驗ニ拘ハラヌ府縣社以下神官タルヲ得ヘキ資格

(明治二十五年三月内務省訓令第五號)

府縣社以下神官ノ儀ハ自今左ニ掲クルモノニシテ性行其他適當ト認ムル者ハ皇典講究所學階試驗ニ不拘神官タルノ認可ヲ與フヘシ

祠官

一 維新前五代以上其神社へ奉仕セシ者及ヒ其子孫

一 明治十五年八月以前ヨリ奉職勤續ノ者但現職祠掌ヨリ祠官ニ選舉スルハ此限ニアラス
一 有位者又ハ判任官以上滿二年奉職セシ者
一 該神社所在ノ府縣ニ於テ一箇年直接國稅十圓以上ヲ納ムル者

祠掌

一 維新前五代以上其神社へ奉職セシ者及ヒ其子孫
一 明治十五年八月以前ヨリ奉職勤續ノ者
一 該神社所在地ノ町村長三年以上奉職セシ者

府縣社以下神官撰擧ノ節皇典講究所卒業證書又ハ試驗濟證書ヲ添へ出願認可ノ件

(明治十五年八月内務省達乙第四十六號)

今般皇典講究所設置ニ付府縣社以下神官選舉ノ節該所ノ卒業證書無之者ハ皇典講究所本分所ノ試驗ヲ受サセ試驗濟ノ證書相渡候旨ニ付今後選舉出願ノ向ハ該所卒業證書寫者クハ試驗濟ノ證書ヲ副へ願出候者ニ限リ認可ヲ與へ候儀ト可心得此旨相達候事

神官教導職ノ兼補ヲ廢シ葬儀ニ關係セス

(明治十五年一月内務省達乙第七號)

自今神官ハ教導職ノ兼補ヲ廢シ葬儀ニ關係セサルモノトス此旨相達候事但府縣社以下神官ハ當分從前之通

官幣社官祭執行方

(明治六年二月布告第五十三號)

從前官幣諸社官祭ノ儀式部察官員參向執行候處今後伊勢神宮ヲ除クノ外總テ地方官ニ於テ執行可致事但巨細ノ儀ハ追テ式部寮ヨリ可相達事

神佛祭禮開扉等ノ節奇怪ノ打扮ヲ爲スヲ禁ス

(明治六年七月教部省達第二十六號)

神佛祭禮開扉等之節兼テ信仰ノ者ハ夫夫敬禮ヲ盡シ參拜可致等之處從來ノ弊風ニ泥ミ奇怪之打扮或ハ男女姿粧ヲ易ヘ候等ノ儀有之趣醜態ヲ極メ候ノミナラス却テ神佛ヲ褻瀆シ以之外之儀ニ付以來右様之儀無之尊崇之本意ヲ體シ候様可致事

神職懲戒ノ件

(明治二十七年三月內務省令第四號)

第一條 府社縣社以下神社ノ神職ニシテ明治二十四年(七月)當省訓令第十二號府縣郡村社神官奉務規則ノ規定ニ違背シタルトキハ北海道廳長官府縣知事之ヲ懲戒ス但訓令ハ無格社ノ神職ニモ適用ス
第二條 前條ノ懲戒ニハ官吏懲戒例ヲ准用ス

寺院佛像持出開帳ノ達ヲ廢シ他管持出開帳ノ節出願手續

(明治十七年三月內務省達乙第十六號)

明治九年教部省第四號布達廢止候條自今寺院佛像他管持出開帳之義ハ該寺住職檀家總代(無檀家寺院ハ信徒總代)及本寺法類連署ノ上本山ノ添書ヲ以テ甲乙兩官廳へ出願セシムヘシ此旨相達候事

無檀無住ノ寺院廢止方

(明治五年十一月布告第三百三十四號)

諸寺院中總本山ヲ除クノ外無檀ニシテ無住ノ向ハ自今渾テ被廢止候條各地方官ニ於テ夫夫廢寺處分ノ上宗名寺號共詳悉取調教部省へ可届出候事但佛像什器等ハ本寺法類ノ内最寄寺院へ合附爲致堂宇建物ノ儀ハ最初營造ノ次第ヲ追ヒ官營ハ公收シ私造ハ其人民所分ニ可相任官私ノ別不分明ノ向ハ適宜ニ取計ヒ跡地所置ノ儀ハ總テ大藏省へ可届出候事

寺院廢止處分方

(明治八年十月太政官達第百八十五號)

寺院合併廢止等ノ儀ニ付明治五年(四月)第百十六號同(十一月)第百廿四號達ノ旨モ候處自今無檀無住ノ向ハ各官廳ニ於テ取調其他ハ寺檀出願ノ上孰モ教部省へ届出處分可致此旨更ニ相達候事

無檀無住ノ寺院廢止處分手續

(明治十二年一月內務省乙第一號)

無檀無住ノ寺院廢止處分之儀ハ明治十一年當省乙第五十七號達第二條ノ手續ニ準シ其本寺法類等ヨリ廢合出願ノ上處分可致此旨更ニ相達候事

廢合寺院跡地並建物處分規則

(明治八年九月內務省達乙第百十三號)

廢寺院處分之儀ニ付壬申第三百三十四號御達ノ趣モ有之候處自今廢合寺院跡地並建物處分規則別紙ノ通相定候條右規則ニ照準取調可申出此旨相達候事

別紙
廢合寺院跡地並建物處分規則

第一節 廢寺、無檀、無住、

- 一 堂宇建物ハ最初官營私造及寺院先住僧侶ノ資金ヲ以テ建造セシモノノ別ヲ論セス官沒スヘシ(明治九年乙第七十號省達ヲ以テ但書共全項改正)但佛像什器處分ハ明治五年第三百三十四號達書通リタルヘシ
 - 一 境内地ノ内從前人民ノ名受ニテ貢租ヲ納メ來リシモノハ其者ヘ下渡シ寺院ノ名受カ先住僧侶ノ買得カ其他民有ノ確證ナキモノハ都テ官沒スヘシ
 - 一 朱黑印地除地田畑山林等ノ内寺院ノ名受地ハ勿論村方百姓並ノ田畑アリテ寺院ノ名受トナリタルカ又ハ先住僧侶ノ買得セシモノハ官沒スヘシ但寺院先住僧侶ノ資金ヲ以テ開墾セシ證跡アルモノト雖モ官沒スヘシ
 - 一 人民ヨリ寄附ノ田畑アリテ貢租作德共該寺ニ於テ處分致シ來レルモノハ即チ寺附ノ地面ニエ官沒スヘシ然シ寄附人ノ子孫再ヒソノ所有ヲ欲セハ相當代價ヲ以テ拂下ヘシ但寄附セシ次第ニヨリ別段ノ契約アルハ此限ニアラス
- 第二節 廢寺、有住、無檀、

- 一 現住職自己ノ財産ニ係ルモノノ外ハ第一節及第四節ニ照準シテ處分スヘシ
- 第三節 合寺、無檀、無住、
- 一 堂宇建物ハ最初官營私造及寺院先住僧侶ノ資金ヲ以テ建造セシモノノ別ヲ論セス合スル所ノ寺院ニ附スヘシ(同上)
- 一 境内地ノ内人民ノ名受ニテ貢租ヲ納メ來リシ者ハ其者ヘ下渡シ寺院ノ名受カ先住僧侶ノ買得或ハ開墾ノ確證アルモノハ合スル所ノ寺院ニ附スヘシ(確證ナクハ官沒スヘシ)但萬一除稅地ノ山林ニ於テ先住僧侶自費ヲ以テ苗木植付等ノ確證アレハ立木ノミ合スル所ノ寺院ヘ下渡スヘシ
- 一 人民ヨリ寄附ノ地アレハ合スル所ノ寺院ニ附スヘシ
- 第四節 合寺、有住、無檀
- 一 第三節ニ同シ但建物境内地田畑山林等ノ内萬一現住職ノ資金ヲ以テ建造シ或ハ買得開墾等ノ確證アレハ其者ノ意ニ任カスヘシ
- 第五節 合寺、有檀、無住
- 一 第三節ニ同シ但建物ハ檀中等ノ私費ヲ以テ造營セシモノ及ヒ境内地田畑山林等檀中ノ私費ヲ以テ買得シテ地租ヲ納メ來リシモノ或ハ開墾セシモノハ其合スヘキ寺院並ニ法類等トノ協議ニ任スヘシ

管長身分取扱

(明治十七年八月太政官達第六十八號)

管長身分ノ儀ハ總テ勅任官取扱ノ例ニ依ル

◎從前ノ教導職タリシ者身分取扱方

(明治十七年八月太政官達第六十九號)

今般教導職廢セラレ候ニ付テハ從前教導職タリシ者ノ身分ハ總テ其在職ノ時ノ等級ニ準シ取扱フ者トス

◎神佛教導職ヲ廢シ寺院ノ住職ヲ任免シ及

教師ノ等級進退ヲ管長ニ委任ス

(明治十七年八月太政官布達第十九號)

自今神佛教導職ヲ廢シ寺院ノ住職ヲ任免シ及教師ノ等級ヲ進退スルコトハ總テ各管長ニ委任シ左ノ條件ヲ定ム

- 第一條 各宗派妄リニ分合ヲ唱ヘ或ハ宗派ノ間ニ爭論ヲ爲ス可ラス
 - 第二條 管長ハ神道各派ニ一人佛道各宗ニ一人ヲ定ム可シ但事宜ニ因リ神道ニ於テ數派聯合シテ管長一人ヲ定メ佛道ニ於テ各派管長一人ヲ置クモ妨ケナシ
 - 第三條 管長ヲ定ム可キ規則ハ神佛各其教規宗制ニ由テ之ヲ一定シ内務卿ノ認可ヲ得可シ
 - 第四條 管長ハ各其立教開宗ノ主義ニ由テ左項ノ條規ヲ定メ内務卿ノ認可ヲ得可シ
 - 一 教規
 - 一 教師タルノ分限及其稱號ヲ定ムル事
 - 一 教師ノ等級進退ノ事
- 以上神道管長ノ定ム可キ者トス

- 一 宗制
 - 一 寺法
 - 一 僧侶竝ニ教師タルノ分限及其稱號ヲ定ムル事
 - 一 寺院ノ住職任免及教師ノ等級進退ノ事
 - 一 寺院ニ屬スル古文書寶物什器ノ類ヲ保存スル事
- 以上佛道管長ノ定ムヘキ者トス
- 第五條 佛道管長ハ各宗制ニ於テ古來宗派ニ長タル者ノ名稱ヲ取調ヘ内務卿ノ認可ヲ得テ之ヲ稱スルコトヲ得

◎神佛各宗派内ノ者出願處分ヲ要スルト

キ願書差出方 (明治二十二年五月内務省訓令第二十二號)

神佛各教宗派内ノ事務ニツキ當省ニ出願處分ヲ要スヘキモノハ管長ヲ經由出願セシムヘシ但管長其手續ヲ拒ミタルトキハ其次第ヲ具シ本人ヨリ願書ヲ直ニ當省ニ差出スコトヲ得 廢合及財産ニ關スル諸願ハ管長ノ添書ヲ要ス

◎禁厭祈禱ヲ行ヒ醫藥ヲ妨クルヲ禁ス

(明治七年六月教部省達書第二十二號)

別紙乙第三十三號ノ通神道諸宗管長ヘ相達候條向後禁厭祈禱ヲ以醫藥等差止メ政治ノ妨害ト相成候様ノ所業致候者有之候ハ於地方官取締可致此旨相達候事

達書乙第三十三號

禁厭祈禱等ノ儀ハ神道諸宗共人民ノ請求ニ應シ從來ノ傳法執行候ハ元ヨリ不苦筋候處間ニハ之レカ爲メ醫療ヲ妨ケ湯藥ヲ止メ候向モ有之哉ニ相聞以ノ外ノ事ニ候抑教導職タルモノ右等貴重ノ人命ニ關シ衆庶ノ方向ヲモ誤ラセ候様ノ所業有之候テハ朝旨ニ乖戾シ政治ノ障碍ト相成甚不都合ノ次第ニ候條向後心得違ノ者無之様屹度取締可致此旨相達候事

◎禁厭祈禱ヲ請フモノアルトキ醫師ノ施療中ノ者ニ限り其望ニ應スルヲ許ス

(明治十五年七月内務省達戊第三號)

禁厭祈禱ノ儀ニ付七年(六月)教部省乙第三十三號達之趣有之候處病者治療ノ際之カ爲メ投藥ノ時機ヲ誤候儀モ有之哉ニ相聞不都合候條今後信者ヨリ請求候節ハ先服藥ノ有無ヲ證明セシメ果シテ醫師診斷施療中ノ者ニ限り其望ニ應シ不苦候條其旨屹度可相心得此段相達候事
乙第四十二號
別紙戊第三號ノ通(神道副總裁神佛各管長)ハ相達候條今後違背之輩有之候中ハ直ニ差止置委詳當省へ具狀可致此旨相達候事

◎僧侶托鉢禁止ノ達ヲ廢ス

(明治十四年八月内務省布達第八號)

明治五年(十一月)教部省第二十五號達僧侶托鉢禁止之儀相廢候條此旨相達候事但托鉢者ハ管長ノ免許證ヲ携帯スヘシ

◎托鉢免許方竝托鉢者心得

(明治十四年八月内務省達乙第三十八號)

今般戊第二號ヲ以佛道各管長へ別紙之通相達候條萬一不都合之所業有之候節ハ直ニ托鉢差止願未詳細取調該宗管長若クハ其地方取締へ通知スヘシ此旨相達候事(十九年五月内務省令第九號ヲ以テ「取調」ノ下「當省」へ可申出「トアルヲ」該宗管長若クハ其地方取締へ通知スヘシ「ト改ム」)
(別紙)

戊第二號輪廓附

佛道各宗派管長

僧侶托鉢解禁之儀今般別紙甲第八號布達候ニ付テハ自今左ノ條件遵守各宗派僧侶(教導職試補以上)ノ内托鉢ヲ爲サント欲スルモノ免許方法及取締規約取調可伺出此旨相達候事

内務卿松方正義代理

明治十四年八月十五日

内務大輔 土方久元

托鉢免許方竝托鉢者心得

- 一 托鉢ヲ免許セシトキハ左ノ雛形ニ照シ免許證ヲ交附シ其都度願者所在ノ地方廳へ通知シ東京ハ警視廳へモ通知スヘシ
- 一 托鉢ヲ行フハ午前七時ヨリ同十一時迄ヲ限リトス但遠路往返ノ爲メ時間ヲ遷延スルハ非此限

- 一 托鉢者ハ如法ノ行裝ニテ免許證ヲ携帶シ行乞スルヲ常トス施者ノ請アルニアラサレハ人家ニ接近シ濫リニ歩ヲ駐ムヘカラス且施物ハ施者ノ意ニ任セ敢テ餘物ヲ乞フヲ許サス
- 一 托鉢者ハ一列三人以上十人以下タルヘシ且公眾來往ノ便ヲ妨クヘカラス
- 一 免許證ハ何時タリトモ警察官等ノ檢閲ニ供スヘキモノトス
(標牌雜形畧之)

町村鎮座氏神氏子去就禁否處分方

(明治十五年五月內務省達乙第二十八號)

各町村鎮座氏神ノ儀ハ其土地ニ就キ從來一定ノ區域有之儀ニ付各自ノ信否ニ任セ猥ニ去就スヘキモノニ無之候條町村分合等ニヨリ不得已場合有之甲社ノ氏子一部落學テ乙社ノ氏子ト相成節ハ甲乙社神官氏子協議ノ上雙方連署爲届出明細帳引直シノ儀當省ヘ可申出此旨相達候事但雙方協議不整節ハ受理スヘカラサル儀ト心得ヘシ

神社佛寺古來所傳ノ什物竝寄附ノ諸器祠堂金等ノ類處分方

(明治六年七月布告第二百四十九號)

神社佛寺共古來所傳ノ什物衆庶寄附ノ諸器竝ニ祠堂金等ノ類ハ神官僧侶ハ勿論氏子檀家ノモノタリトモ自儘ニ處分可致筋無之候條若不得已儀有之候ハ委詳具狀ヲ以テ教部省ヘ可申立候此旨布告候事

社寺ニ於テ金穀借入方

(明治十年五月布告第四十三號)

神社寺院ニ於テ其社寺ノ爲メ金穀ヲ借入ルルトキ若クハ金穀ヲ借入ルル爲メ社寺附地所(除稅地ヲ除クノ外)建物什器(寶物古文書類ヲ除クノ外)等ヲ抵當トナストキハ必ス氏子檀家ト協議シ總代二名以上ノ連署ヲ要スヘシ若シ此連署ナキトキハ總テ該社寺神官僧侶ノ私債ト看做シ縱令右ノ抵當アルモ其效ナキモノト爲スヘシ

寺院什物帳調製方

(明治六年三月布告第八十九號)

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸什器檀家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必用ナル分竝ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置可申候

- 一 寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ實分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ
- 一 什物帳ニハ法用ニ必要ノ分竝ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ
- 一 右二帳二部ツツ相綴リ檀家法類共兩人以上竝ニ其地ノ戶長檢査ノ上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戶長役場ニ藏シ一部ハ其寺院ニ藏シ置クヘシ

寺院附屬地所建物什物ノ抵當賣買其他財産ニ

關スル諸願ハ管長ノ添書ヲ要ス

(明治十七年十月內務省達乙第三十七號)

一 神佛敎務所(敎院敎會所法務所講社事務所ノ類)說敎所(說敎ノミ行フモノ)ハ國宗流ニ分チ六月三十日十二月三十一日ノ現數半年毎ニ取調翌七月一月兩度ニ當省ヘ差出ス可シ(十八年七月內務省甲第二十三號ヲ以テ『年兩度ニ差出スニ及ハス自今每年十二月三十一日ノ現在ヲ取調翌一月三十一日限り可差出旨』ヲ達ス)

一 祠宇竝寺院創立再興復舊引直移轉廢合及附屬ノ地所建物什物抵當賣買其他寶物古文書等財產ニ關スル諸願ハ(寺院ハ本寺法類連書)管長ノ添書ヲ要ス可シ

右相達候事

府縣社以下神社什物取締方

(明治十年七月內務省布達甲第十三號)

府縣社以下社寺什物之儀自今左之通相心得取締可致此旨布候事

一 什物ハ各部類ヲ分チ其品柄員數等詳細牒簿ニ記載シ尙他ノ寄附ニ係ルモノハ其年月姓名等ヲモ記入スヘシ

第一類 寶物古文書

第二類 祭具什器四持添之田畝附屬之建物等

右牒簿二部ツツ編製神官竝氏子(氏子無之向ハ該地ノ崇敬人)總代二名以上尙該地之區戶長連署調印一部ハ區戶長役所ヘ一部ハ其社ヘ藏メ置ヘシ

社寺取扱概則

(明治十一年九月內務省乙達第五十七號)

社寺取扱之儀左之通概則相定候條此旨相達候事

社寺取扱概則

第一條 社寺ノ創建ハ(民有地ニ建設スルモノ)神官住職氏子檀徒若クハ信徒ト爲ルヘキモノ(寺院ハ本寺法類トモ)連署戶長與書ヲ以テ願出永續財產ノ目途且其地所建物社寺ノ體(社ハ本殿拜殿寺ハ本堂庫裏)ヲ具フル者ニ限り允許スルヲ得ヘシ再興復舊等總テ之ニ準ス(明治十三年乙第二十八號達ヲ以テ『社寺ノ體』ノ下註文十二字ヲ加フ)但別紙書式ニ倣ヒ其都度當省ヘ届出ヘシ

第二條 同上移轉廢合竝社號改稱ハ前條ノ手續ニ準シ其事由ヲ詳記シ願出ルモノニ限り開届毎月末取纏當省ヘ届出ヘシ尤廢合社寺竝建物等處分方ノ儀ハ從前ノ通但式內神社竝文明十八年以前ノ創立ニ係ル社寺ノ向ハ前以テ當省社寺局ヘ照會ヲ經ヘシ

第三條 邸内社堂竝掛所道場引直及寺號公稱等ハ總テ第一條ノ手續ニ從ヒ願出永續目途竝建物ノ體(堂宇ハ方六尺以上)ヲ具フルモノニ限り開届別紙書式ニ倣ヒ毎月末取纏當省ヘ可届出(同上『願出』ノ下註文共二十字ヲ加フ)

第四條 前條條ノ外社寺例格ノ改定竝社寺ニ關スル條件中例規ナキモノハ其都度當省ヘ伺出ヘシ(別紙畧之)

社寺ノ什物竝地所建物等ノ類抵當其他處分方

(明治十二年七月內務省達乙第三十九號)

本年當省乙第二十二號ヲ以テ社寺寶物古文書保護之儀相違候ニ就テハ今般調製スヘキ目錄帳中ヘ記載ノ物品ハ明治十年第四十三號公布之通抵當ト爲スヘカラサル筋ニ有之儀テ自今社寺ニ於テスル抵當ハ氏子檀家協同之書面ヲ以テ一應管廳ヘ申出サセ調査ノ上全ク寶物古文書ニアラサル分ニ限り認可スヘシ此旨相違候事但目錄帳ヘ記載セスト雖モ該社寺ニ別段ノ由緒アル地所建物等ハ寶物古文書ニ准スヘク且社寺ノ物件不得已儀有之處分候節ハ明治六年第百四十九號公布同九年敕部省第三號達書之趣心得ヘシ

社寺總代人ヲ置キ社寺ノ願屆等ニ連署セシメ且收入財産等取調方 (明治十四年七月內務省達乙第三十三號)

各管内社寺總代人之儀(氏子檀家ナキモノハ僧徒)相應ノ財産ヲ有シ衆望ノ歸スルモノ三名以上相撰ト戸長役場ヘ届出サセ今後該社寺ノ願屆等ハ准テ連署ヲ以可兼出且社寺收入財産ハ(田畑山林ノ所得ハ勿論寶物祈禱儀舞回向料等一切ノ受納ヲ云フ)其社寺有ニ屬スヘキモノト其神官住職付ニスルモノトノ豫約毎社寺適宜相定平素混亂セサル様取調方可爲致此旨相違候事(明治二十四年五月內務省訓令第八號ヲ以テ『共有』ヲ『社寺有』ト改ム)但神宮官國幣社ハ非此限
總代人ハ滿三年毎ニ改選市町村役場若ハ戸長ヘ届出シムヘシ尤モ期限中ト雖モ犯罪其他不其ノ所爲アルトキハ臨時改選セシムヘシ(同上法令ニヨリ本項但書共追加)但臨時改選ノ外ハ前總代人再ニ當選スルモ妨ケナシ

社寺境内ノ樹木妄ニ伐採ヲ禁ス (明治六年七月布告第三百三十五號)

社寺境内ノ樹木ハ假令其社寺修繕等ニ相用ヒ候共猥ニ伐木不相成候若シ雖止事情有之節ハ其地方廳ヘ願出許可ヲ可受事

社寺伐木取扱概則 (明治十五年八月內務省達番外)

社寺境内樹木伐採之儀ハ明治六年第百三十五號公布並八年第百七號公達九年當省並教部省第十二號達十二年當省乙第三十三號達之趣有之官有地ニ係ルモノハ當省ヘ伺出處分之答ニ候處近來修繕之爲メ多分之伐木願出候向モ有之然ルニ社寺境内ハ修繕用材培植ノ地ニ無之數百年來之古木一朝地ヲ拂ヒ遂ニ風致ヲ毀損スル向モ不少候條自今請願之節ハ不得止分ニ限リ別紙條規ニ照シ取扱候條右應照開查之下可伺出此旨爲心得示達候事但縣限リ處分ニ係ル民有地第二種ハ勿論民有地第一種ニアル社寺境内樹木ト雖モ本文之趣合テ以取扱フヘシ

社寺境内伐木取扱概則

- 第一條 社寺境内木ヲ五類ニ分チ風致木(目通寸間ニ拘ハラズ)ヲ第一類トシ目通り一丈以上ヲ第一類トシ同五尺以上ヲ第三類トシ同一尺以上ヲ第四類トシ同一尺未満ヲ第五類トス
- 第二條 第一類第二類之木ハ伐採ヲ許サス
- 第三條 第三類ハ總木數十分ノ一ハ(拾木ニ付一本)第四類ハ同十分之三(拾木ニ付二本)以內伐採

ヲ許スコトアルヘシ

第四條 第五類ノ別ニ分通ヲ定メス生立ノ爲メ拔伐ノ外伐採ヲ許ササルモノトス

第五條 社ハ本殿拜殿寺ハ本堂庫裏之造修用材ニ限り第三類ニ依ルモノトス但必ス仕様書具申セシム

古社寺保存法 (明治三十年六月法律第四十九號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル古社寺保存法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

古社寺保存法

第一條 古社寺ニシテ其ノ建造物及寶物類ヲ維持修理スルコト能ハサルモノハ保存金ノ下付ヲ內務大臣ニ出願スルコトヲ得

第二條 國費ヲ以テ補助保存スヘキ社寺ノ建造物及寶物類ハ歴史ノ證徴、由緒ノ特殊又ハ製作ノ優秀ニ就キ古社寺保存會ニ諮詢シテ內務大臣之ヲ定ム

第三條 前條ノ建造物及寶物類ノ修理ハ地方長官之ヲ指揮監督ス

第四條 社寺ノ建造物及寶物類ニシテ特ニ歴史ノ證徴又ハ美術ノ模範トナルヘキモノハ古社寺保存會ニ諮詢シ內務大臣ニ於テ特別保護建造物又ハ國寶ノ資格アルモノト定ムルコトヲ得

內務大臣ニ於テ前項ノ資格ヲ付シタル物件ハ官報ヲ以テ之ヲ告示ス

第五條 特別保護建造物及國寶ハ之ヲ處分シ又ハ差押フルコトヲ得ス但內務大臣ノ許可ヲ得テ國寶ヲ公開ノ展覽場ニ出陳スルハ此ノ限ニ在ラス

第六條 前條ノ物件ハ神職(官國幣社ニ在テハ宮司、府縣郷社ニ在テハ社司、村社以下ニ在テハ

社掌、以下之ニ倣フ)若ハ住職之ヲ監守シ內務大臣ノ監督ニ屬スルモノトス但內務大臣ノ許可ヲ經テ別ニ監守者ヲ置クコトヲ得

第七條 社寺ハ內務大臣ノ命ニ依リ官立又ハ公立ノ博物館ニ國寶ヲ出陳スルノ義務アルモノトス但祭典法用ニ必要ナルモノハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ命ニ對シテハ訴願ヲ爲スコトヲ得

第八條 前條ニ依リ國寶ヲ出陳シタル社寺ニハ命令ニ定メタル標準ニ從ヒ國庫ヨリ補給金ヲ支給スルモノトス

第九條 神職住職其ノ他ノ監守者ニシテ內務大臣ノ命ニ違背シ國寶ヲ出陳セサルトキハ內務大臣ハ其ノ出陳ヲ強要スルコトヲ得

第十條 社寺ニ下付シタル保存金ハ地方長官之ヲ管理ス

保存金ハ豫算額ヲ以テ之ヲ下付ス但精算ノ上剩餘アルトキハ內務大臣ハ之ヲ還付セシムルコトヲ得

第十一條 社寺ニ下付シタル保存金ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第十二條 第十條及第十一條ノ保存金ハ其ノ利子ヲ包含スルモノトス

第十三條 監守者其ノ監守スル所ノ國寶ヲ竊取シ、毀棄シ、隱匿シ若ハ他ノ物件ト變換シ又ハ第五條ノ規定ニ違背シタルトキハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第五條ノ物件ナルコトヲ知リテ之ヲ讓受ケ、借受ケ、擔保ニ取り、寄藏シ若ハ其ノ牙保ヲ爲シタル者ハ六月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十四條 監守者怠慢ニ由リ國寶ヲ亡失若ハ毀損シタルトキハ五十圓以上五百圓以下ノ過料ニ處

ス

過料ハ地方裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ科ス但其ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
過料ハ檢事ノ命令ニ依リ之ヲ徵收ス其ノ徵收ニ付テハ民事訴訟法第六編ノ規定ヲ準用ス但此ノ
場合ニ於ケル檢事ノ命令ハ執行文ノ效力ヲ有ス

第十五條 第七條ニ依リ出陳シタル國寶ノ監守者故意怠慢ニ由リ國寶ヲ亡失若ハ毀損シタルトキ
ハ國庫ハ命令ニ定メタル評價ノ方法ニ從ヒ其ノ損害ヲ賠償スルモノトス但其ノ評價額ニ關シテ
ハ裁判所ニ出訴スルコトヲ得ス

第十六條 本法ニ定メタル保存金及補給金トシテ國庫ヨリ支出スヘキ金額ハ一箇年十五萬圓乃至
二十萬圓トス

附 則

第十七條 本法施行前社寺ニ下付シタル保存金ニ關シ内務大臣ハ第十條乃至第十二條ヲ通用スル
コトヲ得

第十八條 第四條ニ該當スル物件ハ社寺ニ屬セサルモノト雖所有者ノ請求アルトキハ第七條第一
項ニ掲ケタル博物館ニ出陳スルコトヲ許可シ之ニ補給金ヲ支給スルコトヲ得

第十九條 名所舊蹟ニ關シテハ社寺ニ屬セサルモノト雖仍本法ヲ準用スルコトヲ得
第二十條 本法施行上必要ナル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

社 寺 終

第二十六類 戶籍旅行及移住

◎ 戶籍法則

(明治四年四月布告)

今般府藩縣一般戶籍ノ法別紙ノ通改正被仰出候條管内普ク布告シ可申事

戶籍檢査編制ハ來申年二月一日ヨリ以後ノ事ニ候ヘ共右ニ關係スル諸般ノ事ハ今ヨリ處置致ス可
ク尤三都府及各開港場ハ人民輻輳ノ地ニテ取締向速ニ不相立候テハ難相成ニ付送籍入籍前旅行寄
留ノ者へ鑑札渡方寄留表取調方等當六月二十九日ヨリ後ル可ラサル事但不審ノ際ハ民政部へ可承
合事

右之通被仰出候事

人生始終ヲ詳ニスルハ可要ノ事務ニ候故ニ自今人民天然ヲ以テ終リ候者又ハ非命ニ死シ候者等埋
葬ノ處ニ於テ其時其由ヲ記録シ名前書員數共毎歲十一月中其管轄廳又ハ支配所へ差出サセ十二
月中辨官へ可差出候事

右之通管内社寺へ可關達候事

戶數人員ヲ詳ニシテ撰ナラザラシムルハ政務ノ最モ先シ重スル所也夫レ全國人民ノ保護ハ太政ノ
本務ナルコト素ヨリ云フヲ待タス然ルニ其保護スヘキ人民ヲ詳ニセス何チ以テ其保護スヘキコト
ヲ施スヲ得ンヤ是レ政府戶籍ヲ詳ニセサルヘカラサル儀ナリ又人民ノ各安康ヲ得テ其生ヲ遂ル所
以ノモノハ政府保護ノ庇陰ニヨラサルハナシ去レハ其籍ヲ逃レ其數ニ漏ルルモノハ其保護ヲ受ケ
サル理ニテ自ラ國民ノ外タルニ近シ此レ人民戶籍ヲ納メサルヲ得サルノ儀ナリ中古以來各方民治

趣ヲ異ニセシヨリ僅ニ東西ヲ隔ツレハ忽チ情態ヲ殊ニシ聊カ遠近アレハ即チ志行ヲ同フセス隨テ
戶籍ノ法モ終ニ錯雜ノ弊ヲ免レヌ或ハ此籍ヲ逃レ或ハ彼籍ヲ欺キ去就心ニ任セ往來規ニヨラス沿
襲ノ習人自ラ度外ニ附スルニ至ル故ニ今般全國總體ノ戶籍法ヲ定メラルルヲ以テ普ク上下ノ通
義ヲ辨ヘ宜シク粗略ノコトナカルヘシ

第一則 戶籍舊習ノ錯雜アル所以ハ族屬ヲ分ツテ之ヲ編製シ他ニ就テ之ヲ收メサルヲ以テ遺漏ノ
事アリト雖モ之ヲ檢査スルノ便ヲ得サルニ依レリ故ニ此度編製ノ法臣民一般「華土族(卒)祠官僧
侶」平民迄ヲ云以下准之「其住居ノ地ニ就テ之ヲ收メ專ラ遺スナキヲ旨トス故ニ各地方土地ノ便
宜ニ隨ヒ豫メ區畫ヲ定メ每區ニ戶長並ニ副ヲ置キ長並ニ副ヲシテ其區内戶數人員生死出入等ヲ
詳ニスル事ヲ掌ラシムヘシ」(明治十一年第十七號布告ヲ以テ郡區町村編制法ヲ頒布シ從前ノ區
劃ノ制ヲ廢シ町村ニ戶長一員ヲ置キ又同二十二年法律第一號ヲ以テ市制町村制ヲ頒布シ市長町
村長ヲ置ク)

第二則 戶長ハ必ス長ト副トニ限ルヘカラス時宜ニヨリ長副數名アルモ妨ケナシトス

第三則 (明治十一年第十七號布告ニヨリテ消滅ニ就ケリ)

第四則 (同上)

第五則 「編製ハ爾後六箇年目ヲ以テ改ムヘシト雖モ」其間ノ出生死去出入等ハ必其時時「戶長」ニ
届ケ「戶長」之ヲ其廳ニ届出テ(支配所アルモノハ支配所ヨリ其廳ニ届ケ)其廳之ヲ
受ケ人員ノ増減等本書ヘ加除シ毎年十一月中戶籍表ヲ改メ十二月中太政官ヘ差出スヘシ」(加除
ハ生ルルモノト入ルモノトト加ヘ死者ト出ルモノト除ク類ヲ云フ爾後六箇年毎ニ人員ヲ檢査シ
戶籍ヲ改ムルノ 本法二十則第二十一則及ヒ第二十二則ニ於テモ亦之ヲ掲載スト雖モ六年第

二百四十二號ヲ以テ追テ達スル迄ハ施行ニ及ハサル旨布告セラレタルヲ以テ本則起頭ニ掲グル
編製以下ノ十九字ハ自然ニ消滅シ而シテ戶長ニ於テ生死出入等ノ届出ヲ地方廳ニ届出ヅルノ件
ハ五年四月第四號布告第五項但書ニ依リテ改正シ十年第二十號達ニ依リ共ニ消滅シ而シテ又十
九年內務省令第二十二號第二條ニ於テ戶籍ノ副本ヲ郡役所又ハ管轄廳ニ納メ或ハ諸届ヲ類集シ
テ郡役所又ハ管轄廳ヘ送呈保存スルコトヲ掲記シタリ)

第六則 管轄廳ニ於テ戶籍專任ノ吏員ヲ置キ其事ヲ擔當セシムヘシ若シ遺漏粗畧ノ事アルニ於テ
ハ其吏員並ニ「戶長(戶長ナキ大社大寺ハ執事)」ノ責タルヘシ

第七則 區内ノ順序ヲ明ニスルハ番號ヲ用ユヘシ故ニ每戶ニ官私ノ差別ナク臣民一般番號ヲ定メ
其住所ヲ記スルニ都テ何番屋敷下記シ編製ノ順序モ其號數ヲ以テ定マルヲ要ス「但區内ノ屋敷
死亡トナリ又ハ一戶ヲ割テ二戶トシ二戶ヲ合セテ一戶トナスコトアルモ其由ヲ戶籍ニ記シ番號
ハ其儘据置六箇年目ニ至リ改ムヘシ」(明治五年正月太政官第四號布告第四項參看)

第八則 各地方實屬或ハ平民ト事務アリテ全戶他ノ管轄所ニ引移ルモノハ其由ヲ「本貫管轄廳ヘ
願出其廳ヨリ」送りテ取リ在留地ノ廳ニ「届ケ出其所ノ籍ニ編入スヘシ又故アリテ元ノ管轄所
ヘ引移ル時ハ之ヲ戻スコト其始メ出ル時ノ如クシ其所ノ籍ニ編入スヘシ」(明治五年太政官第四
號同六年同第百八十七號參看又同十二年第八號達ヲ以テ土族實籍替ノ儀管轄廳ヘ出願ニ不及直
ニ戶長ヘ届出サシム)「但當時全戶既ニ引移リシ官員ノ如キハ其官省ヨリ名前書ヲ在留地ノ廳ニ
達シ夫ヲ證トシ其住居ノ地區ニテ其籍ヲ收ムヘシ又本貫管轄廳ニハ其由ヲ其官省ヨリ達シ其廳
之ヲ聽キ其所ノ籍ヲ除クヘシ尤此ヨリ後引移ルモノハ此限ニアラス送籍スルコト本條ノ如クス
ヘシ」(第八則ヲ云)若シ全戶引移ルト雖モ情故アリテ本貫管轄廳ノ籍ニアルヲ願フモノハ其地寄

留ノ部ニ入レ情願ニ任スルモ妨ナシ

第九則 他ノ管轄地ニ引移ル時「元ノ廳ヨリ」送籍スルニハ其當人ヨリ元住所ノ「組合並ニ戸長」ニ其由ヲ届ケ「長訓連印シ其廳ニ届ケ其廳之ヲ受ケ其廳聽知ルノ證ヲ押シ」當人ニ渡スヘシ（明治五年太政官第四號參看）「但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ之ヲ達セシメ往來困却ノ弊ナカラシムルヲ要ス」

第十則 他ノ管轄所ヨリ入籍スル時ハ元ノ管轄所ノ證ヲ持參シ其入ル所ノ「戸長」ニ其由ヲ通シ戸長其知遠ナキナキ糺シ其所ノ籍ニ入ルヘシ「而シテ戸長其元廳ノ證ト其入籍セシ事ノ由ヲ時時其廳ニ届ケヘシ」（同上）

第十一則 管轄内甲ノ區ヨリ乙ノ區ニ移ルカ如キモ第八則ヨリ第十則迄ノ例ヲ見合スヘシ但管轄内ナルヲ以テ送籍ハ戸長ヨリ之ヲ致シ入籍ノ上其入ル所ノ「戸長」ヨリ其廳ニ届ケ其廳之ヲ聽キ即チ本書ニ加除スヘシ（加除ハ甲ノ籍ヲ除キ乙ノ籍ニ入ルノ類ヲ云）（同上）但其區ニ於テ時時加除スルハ無論ナルヘシ

第十二則 （明治四年七月第三百六十號布告ヲ以テ寄留鑑札ヲ廢止シ又同五年太政官第四號ヲ以テ寄留届出方ヲ定メ依テ本條ハ消滅セリ）

第十三則 （同上）

第十四則 （明治四年七月第三百六十五號布告ヲ以テ旅行鑑札ヲ廢止シタルカ爲メ本則ハ消滅セリ）

第十五則 （同上）

第十六則 宿帳ハ「七日目毎ニ驛遞ハ其驛出張驛遞掛ノ」次ヲ受自餘ハ其「戸長」ヘ出シ「改テ受クヘシ」

シ旅籠屋ニ限ラス都テ逗留三日以上ハ其戸長ニ届ケ（人民幅輳スル三都府ノ如キハ其時時戸長ヨリ其廳ニ届ヘシ）九十日以上ハ寄留トシ「第十二則ノ手續ヲナスヘシ」旅人病氣又ハ異變ノ節速ニ届ケ出ルハ勿論ナリ（宿帳改メ等ハ目今警察官ノ職務ニ屬ス而シテ驛遞掛ハ明治五年正月大藏省邊ヲ以テ廢止セラレタリ）但戸籍改ノ節滞留スルモノハ其所持ノ鑑札ニ突合セ検査スヘシ

第十七則 「各地ニ出張スル官員出入トモ其管轄廳ヘ届ケ其出張先ノ地方廳ヘモ届ケヘシ」（明治八年太政官第十一號參看）「但地方ノ廳驛隔シ場所一時出張シ或ハ急遽ノ事務等アルハ其手續ナキコトアルヘシ」

第十八則 （明治七年第七十四號布告ヲ以テ僧尼ノ族籍ヲ定メ依テ本則ハ消滅セリ）

第十九則 （第十二則ニ同シ）

第二十則 （明治六年第二百四十二號布告ヲ以テ本則乃至第二十三則ノ六箇年目毎ニ戸籍改メヲ爲スノ條ハ追テ達スル迄施行ニ及ハストス又同年第八十號布告ヲ以テ守札ノ渡方ヲ中止シ而シテ十九年内務省令第二十二號ヲ以テ戸籍編製及改製方等ヲ定メ依テ本條ヲ消滅セリ）

第二十一則 「凡ソ戸籍ヲ検査スルハ遺漏アルヘカラス又重複スヘカラスニツノ者ノ弊アレハ検査ノ要ヲ失フ尤甚ストイフヘシ故ニ戸長ヲ設ケ地ニ就テ戸籍ヲ收ムルハ遺漏ノ弊ヲ防ク所トイヘトモ其戸籍ヲ出入スルニ當リテ（出入ハ他ノ管轄内ヲ出此管轄内ニ入り甲ノ區ヲ出乙ノ區ニ入ル類ヲ云フ）深ク注意セサレハ又重複ノ弊ヲ免ル能ハス故ニ六箇年目毎ニ戸籍ヲ改正スルニ當リ其戸籍ヲ検査スルノ日ハ天下府藩縣一般二月一日ヨリ五月十五日ヲ以テ終ルヲ法トスヘシ（此間凡白日）（前則ノ下參看）」

第二十二則 (同上)

第二十三則 (同上)

第二十四則 「寄留者ノ届書ハ其寄留スル支配所ニテ(支配所ナキモノハ其廳)其時時之ヲ記録シ寄留表ヲ第七號式ノ如ク製シ出入人員増減ヲ隔月検査シテ其廳ニ出シ其廳之ヲ受ケ毎年十二月太政官へ差出スヘシ(明治十年太政官第二十號達ヲ以テ戶籍表差出ヲ止ム)但支配所アルハ某支配所ト表ノ左傍ニ記スヘシ」

第二十五則 (第十六則ニ同シク消滅セリ)

第二十六則 (明治十九年内務省令第二十二號書式ニ依リテ消滅セリ)

第二十七則 (同上)

第二十八則 各地ノ戶籍一例ナルヲ要スレハ字ノ細大行ノ高低ハ其記事ヲ標別スル爲メナルヲ以テ能能注意シ成丈ケ細字ニ記スルヲ要ス

第二十九則 此迄厄介ト號セシモノ或ハ縁故アリテ養育スルモノ等ハ其族屬ト續柄ヲ肩書ニシ其事由ヲ名前ノ上ニ記スルコト式ノ如クスヘシ(明治十九年内務省令第二十二號書式ニ依リテ「厄介」ヲ「附籍」ト改ム)

第三十則 華族等ノ從僕其邸内ニ住居シテ一戶ヲナセルモノハ式ノ如ク其主人ノ次ニ記シ社中寺内ニアルモノ此例ニ準スヘシ

第三十一則 (第十八則ニ同シ)

第三十二則 (明治四年八月ノ布告ヲ以テ穢多非人等ノ稱ヲ廢シ一般民籍ニ編入スルコトト爲リタルニ依テ消滅セリ)

第三十三則 都テ書式ハ臣民トモ體裁一ナレハ彼此相通シ參用シテ妨ナシ

第一號 區内戶籍表式(明治十九年内務省令第二十二號同年同訓令第二十號ニ依テ消滅ス)

第二號 區内職分表式(同上)

第三號 寄留人届書式(明治十九年内務省令第十九號ニ依リテ消滅ス)
(第三號各之)

(以下書式ハ明治十九年内務省令第二十二號ニヨリテ消滅)

戶籍法中心得方竝改正ノ廉 (明治五年正月布告第四號)

戶籍法中心得區區相成候條箇條竝改正ノ廉左之通ニ候條本書ニ照準シ取捨可致事

戶籍編制ノ事

戶籍編制ハ來申年正月晦日現在ノ人員ヲ根據トシ同二月一日ヨリ凡百日ノ間ハ右人員検査ノ日限ナレハ右日限中ノ増減ハ翌年正月ノ取調ニ因テ改ムヘキ事(明治六年第二百四十號布告ヲ以テ戶籍改メノ條ノ施行方ヲ停止ス)

死者届方期限ノ事(壬申四月第百十七號布告ニ依リテ消滅セリ)

戶長副給料ノ事(明治十一年第十七號及ヒ第十九號布告ニ依リテ消滅セリ)

番號ハ地所ニ就テ之ヲ數フ然レトモ戶數點檢ノ爲メ戶毎ニ番號ヲ貼スルハ地方ノ便宜ニ任ス可キ事

送籍證ノ事(明治五年太政官達第二十九號同六年第三十五號第百八十七號同七年第八

勅布告同十一年第十七號布告同十年太政官第二十號達同十二年同第八號
達ニ依リテ改正)

凡送籍スル者ハ戶長ヘ申立戶長ノ職ヲ可與事

囚獄及徒流人ノ事(明治十年太政官第二十號達ニ依リ中止ス)

囚獄人及ヒ徒流人等其管轄内戶籍アル者ハ戶籍表ヘ載セ他管轄内ノ者ハ寄留表中ニ書載ス可キ事

總計表並屆期限ノ事(明治十年太政官第二十號達ニ依リ中止ス)

戶籍及ヒ職分寄留總計並表共別紙雛形ノ通改正相成候事但來申年ハ戶籍共七月中屆出爾後ハ一箇
年分翌正月中取調二月ニ至可屆出事

寄留者ノ件(明治五年太政官第二十九號達同六年同第三十五號布告同七年第八號布告

同五年大藏省第五百四十四號達同十年太政官第二十號達ニ依テ改正同十九
年內務省令第十九號ヲ以テ屆出方ヲ定ム)

戶籍總計書式(明治十九年內務省令第二十二號同訓令第二十二號ニ依リ消滅ス)

◎戶籍法第五則、出生死去出入等屆出方及

寄留者屆出方 (明治十九年內務省令第十九號)

明治四年四月四日布告戶籍法第五則、出生死去出入等屆出方明治五年(正月)等四號布告第八項寄
留者屆出方左ノ通相定メ來ル十二月一日ヨリ施行ス

第一條 出生アリタルトキハ十日以内ニ屆出ヘシ

第二條 死者アリタルトキハ埋葬以前ニ屆出ヘシ

第三條 失踪者復歸シ又ハ其行方知レサルトキハ十日以内ニ屆出ヘシ

第四條 廢戶主應嫡改名復姓身分變換其他願濟ノ上戶籍ニ登記スヘキ事項ハ其許可ノ指令ヲ受領
シタル日ヨリ十日以内ニ屆出ヘシ

第五條 前數條ニ記載シタル事項ハ戶主ヨリ屆出ヘシ戶主未定又ハ不在ナルトキハ親族二人以上
又ハ其事ニ關係アル者ヨリ本籍地戶長ニ屆出ヘシ但本籍地外ニアルトキハ現在地戶長ニ屆出且
同時ニ本籍戶長ヘ屆出ヲ發送スヘシ

第六條 他府縣又ハ他郡區ニ寄留シタルトキハ自己ノ所有ニ於テハ寄留者ヨリ他人ノ所有地若ク
ハ自己又ハ他人ノ借地借家ニ於テハ寄留者及地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヨリ十
日以内ニ其地戶長ニ屆出且同時ニ本籍地戶長ヘ屆出ヲ發送スヘシ

第七條 寄留地ヲ去ルトキ自己ノ所有地ニ於テハ寄留者ヨリ其他ニ於テハ地主又ハ家主又ハ其地
所其家ヲ管理スル者ヨリ十日以内ニ其地戶長ニ屆出ヘシ

第八條 寄留者本籍地ニ歸リタルトキハ戶主又ハ本人ヨリ十日以内ニ屆出ヘシ

第九條 正當ノ理由ナクシテ前數條ニ違背シタル者ハ二十錢以上一圓二十五錢以下ノ科料ニ處ス

◎寄留者諸願伺屆等寄留地ノ管廳ヘ差出方

(明治八年四月布告第五十號)

各地方寄留ノ者諸願伺屆等自今其寄留地ノ管廳ヘ可差出此旨布告候事但事柄ニ依リ本管廳ヘ差出候
儀ハ其便宜ニ任スヘキ事

● 失踪者除籍ノ件

(明治六年五月第七十七號達)

脱籍及ヒ行衛知レサル者家出後三十六箇月ヲ踰ヘ永尋中ノモノハ戶籍表總計人員ノ外ニ記載シ又當人ノ年齢八十以上ニ相成候得ハ除籍シ何レモ内務省ヘ可届出事(明治四年四月布告ヲ以テ脱籍無産ノ輩、復籍規則ヲ定メ其第七條ニ士民共脱走ノ者有之トキ六箇月毎ニ六切ノ尋ヲナシ三十六箇月ヲ過キ尋得サル者ハ永尋ノ事ヲ掲ケ次テ同十一年十一月第四十七號ヲ以テ其六箇月毎六切ノ尋及ヒ三十六箇月後永尋申付ニ不及旨ヲ各府縣ヘ達シ又同十五年第五十號布告ヲ以テ此二件ヲ廢止シ尙ホ同十九年六月内務省令第十七號ヲ以テ戶籍ニ關スル表式ヲ更正セルカ故ニ失踪者ノ除籍ニ關スル此規則ハ大ニ變改セラレテ且ツ未段「大藏省」ハ「内務省」ト爲ルニ至レリ)

● 華士族ノ子弟民籍加入ヲ許ス

(明治五年四月布告第百十五號)

自今華士族子弟厄介ノ輩民籍ヘ加入爲致候儀可爲勝手事

● 僧尼寺院ニ住居ヲ許ス

(明治九年六月教部省達書第二十一號)

僧尼編籍ノ件昨八年(十一月)内務省乙第百五十一號達書ニ據リ各自本籍爲相定候上ハ住職中其寺院ヘ住居ノ儀總テ從前ノ通可相心得答ニ付此旨寺院ヘ可布達事

● 華族令

(明治十七年七月宮内省達番外)

華族令左ノ通被仰出候ニ付此旨相達候事

華族令

- 第一條 凡ソ爵ヲ授クルハ 勅旨ヲ以テシ宮内卿之ヲ奉行ス
- 第二條 爵ヲ分チテ公侯伯子男ノ五等トス
- 第三條 爵ハ男子嫡長ノ順序ニ依リ之ヲ襲カシム女子ハ爵ヲ襲クコトヲ得ス但現在女戶主ノ華族ハ將來相續ノ男子ヲ定ムルトキニ於テ親戚中同族ノ者ノ連署ヲ以テ宮内卿ヲ經由シ授爵ヲ請願スヘシ
- 第四條 嗣今有爵者又ハ戶主死亡ノ後男子ノ相續スヘキ者ナキトキハ華族ノ榮典ヲ失フヘシ
- 第五條 有爵者ノ婦ハ其夫ニ均シキ禮遇及名稱ヲ享ク
- 第六條 華族戶主ノ戶籍ニ屬スル祖父母及父母及妻及嫡長子孫及其妻ハ俱ニ華族ノ禮遇ヲ享ク
- 第七條 本人生存中相續人ナシテ爵ヲ襲カシムルコトヲ得ス但刑法又ハ懲戒ノ處分ニ由テ爵ヲ奪ヒ又ハ族籍ヲ削ラレ更ニ特旨ヲ以テ相續人ニ授クル者ハ此例ニ在ラス
- 第八條 華族戶籍及身分ハ宮内卿之ヲ管掌ス
- 第九條 華族及華族ノ子弟婚姻シ又ハ養子セントスル者ハ先ツ宮内卿ノ許可ヲ受クヘシ
- 第十條 華族ハ其子弟ヲシテ相續ノ教育ヲ受ケシムル義務ヲ負フヘシ
- 第十一條 華族ハ相續及家政上ノ關係ヲ定ムル爲ニ法律命令及華族ニ關スル規定ノ範圍内ニ於テ家範ヲ定ムルコトヲ得(明治二十七年七月宮内省達甲第二號ヲ以テ本條ヲ追加ス)
- 第十二條 家範ハ宮内大臣ノ認許ヲ經ヘシ其條項ヲ改正増補スルトキ亦同シ(同上)
- 第十三條 華族ノ戶主ニシテ監視ニ付セラルヘキ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ハ華族ノ稱ヲ除キ其爵位ヲ返上セシム(同上)

第十四條 第五條第六條ノ禮遇ヲ享クル者ニシテ前條ニ當ルトキハ其禮遇ヲ禁止シ位記アル者ハ之ヲ返上セシム

華族ノ嫡長子孫ニシテ前條ニ當ルトキハ華族ノ榮典ヲ繼承スルコトヲ得ス(同上)

第十五條 華族ノ戸主及第五條第六條ノ禮遇ヲ享クル者ニシテ左ニ掲グル事項ノ一ニ當ルトキハ其禮遇ヲ停止ス(同上)

一 禁錮ノ刑ニ處セラレ其刑期間ノ者

二 刑事ノ訴ヲ受ケ拘留又ハ保釋若クハ責付中ノ者又ハ監視中ノ者

三 家資分散若ハ破産ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

四 第十條ノ義務ヲ充タササル者

五 華族ノ品位ヲ保ツ能ハサル者

第十六條 華族タルノ體面ヲ汚辱スル失行アル者ハ第十三條第十四條又ハ第十五條ニ依リ處分ス(同上)

第十七條 華族ノ品位ヲ保ツ能ハサル者ハ榮典ヲ辭スルコトヲ得(同上)

第十八條 第十三條乃至第十七條ノ處分ハ勅裁ヲ仰キ宮内大臣之ヲ行フ但第十五條第四第五第十

六條及第十七條ノ處分ニ付テハ華族中ヨリ勅選セラレタル七名以上ノ委員ヲシテ評議セシメ勅裁ヲ仰クヘシ(同上)

◎御歴代ノ御諱竝御名ノ文字ヲ名乗ル

コトノ解禁 (明治六年三月布告第百十八號)

御歴代御諱竝御名ノ文字自今人民一般相名乗候不及憚事但熟字ノ儘相用候儀ハ不相成候事

◎平民苗字ヲ設クル事 (明治八年二月第二十二號布告)

平民苗字被差許候旨明治三年布告候處自今必苗字相唱可申尤祖先以來苗字不分明ノ向ハ新々ニ苗字ヲ設ケ候様可致此日布告候事

◎僧侶苗字ヲ設ク (明治五年九月第二百六十五號布告)

自今僧侶苗字相設住職中ノ者ハ其寺住職某氏名ト可相稱事但苗字相設候ハ管轄廳へ可届出事

◎一人一名タルヘキ事 (明治五年五月第四百四十九號布告)

從來通稱名乘兩様相用來候輩自今一名タルヘキ事

◎苗字名竝屋號共改ムルヲ禁ス

(明治五年八月第二百三十五號布告)

華族ヨリ平民ニ至ル迄自今苗字名竝屋號共改正不相成候事但同苗同名等ニテ無餘儀差支有之者ハ管轄廳へ改名可願出事(明治九年第五號布告ヲ以テ「同名」ノ下ニ「等」ヲ加ヘ「管轄廳」ヘノ下ニ「改名」ノ二字ヲ加フ)

◎ 年齡計算方 (明治六年二月第三十六號布告)

自今年齡ヲ計算候儀幾年幾月ト可相敬事但舊曆中ノ儀ハ一千支ヲ以テ一年トシ其生年ノ月數ハ本年ノ月數ト通算シ十二箇月ヲ以テ一年ト可致事

◎ 丁年 (明治九年四月第四十一號布告)

自今滿二十年ヲ以テ丁年ト相定候條此旨布告候事

◎ 海外旅券規則 (明治十一年二月外務省第一號布達)

從來當省ヨリ發行候海外行免狀ノ儀海外旅券ト改稱別紙規則相定候條此旨布達候事

(別紙)

海外旅券規則

旅券ハ日本國民タルヲ證明スルノ具ニシテ海外各國ニアリテ要用少カラサルヲ以テ外務省ヨリ之ヲ發行ス規則左ノ如シ

第一條 旅券ヲ請フ者ハ別紙雜形ノ書面ヲ以テ外務省又ハ地方行政廳へ願出之ヲ受取ルヘシ右郵便ヲ以テスルモ苦シカラス旅券ヲ受取ラハ直ニ其示シアル所へ當人姓名ヲ自記スヘシ (明治三十年十月外務省令第五號ヲ以テ「海港場官廳」ヲ「地方行政廳」ニ改ム)

第二條 旅券ヲ受クルモノハ手數料トシテ金五十錢ヲ納ムヘシ但旅券ハ一人一枚ニ限ルヘシ若シ五歲以下ノ小兒其父母同道ナルトキハ其父母ノ旅券ニ附記スルヲ以テ足レトス

第三條 内地ニ於テ右旅券受取ル間合之ナキカ又ハ海外ニ於テ遺失シタルカノトキハ其國在留ノ

日本公使館又ハ領事館へ其趣ヲ記載セル書面ヲ出タシ自身出頭シテ願ヒ受クヘシ但其手數料トシテ金二圓ヲ納ムヘシ

第四條 公用ヲ以テ旅行シ官費ヲ以テ留學スル者ハ内地ニアリテハ其官廳ヨリ直ニ外務省ニ掛合海外ニ在リテハ前條ノ趣ニ從ヒ旅券ヲ受取ルヘシ但手數料ハ納ムルニ及ハス

第五條 旅券ハ其趣クヘキ國ノ公使又ハ領事ノ證明ヲ得ル儀其國ニヨリ要用少ナカラス其節ハ其館ニ就テ直ニ之ヲ請フヘシ但其定規ニ隨ヒ手數料ヲ拂フヘキモノトス

第六條 海外ニアリテ所持ノ旅券我領事官ノ證明ヲ要用トスルコトアリ其節ハ之ヲ請ヒ得ヘシ但領事官ナキ地ニ於テハ公使館ニ到リテ之ヲ請フヘシ

第七條 旅券ハ歸朝ノ後三十日以内ニ其最初受取リタル官廳へ之ヲ返納スヘシ郵船等ノ海員常ニ旅券ヲ要スル者ハ此限ニ在ラス但シ海外ニアリテ我公使又ハ領事官ヨリ受取タル者ハ外務省ニ返納スルヲ以テ足レトス

(旅券願雜形略之)

◎ 移民保護法 (明治二十九年四月法律第七十號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル移民保護法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
移民保護法

第一章 移民

第一條 本法ニ於テ移民ト稱スルハ勞働ニ從事スルノ目的ヲ以テ外國ニ渡航スル者及其ノ家族ニシテ之ト同行シ又ハ其所在地ニ渡航スル者ヲ謂フ

前項労働ノ種類ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二條 移民ハ行政廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ外國ニ渡航スルコトヲ得ス

渡航ノ許可ハ其ノ許可日ヨリ六箇月以内ニ出發セサルトキハ效力ヲ失フモノトス

第三條 行政廳ハ渡航スヘキ地ノ情況ニ因リ移民取扱人ニ依ラサル移民ヲシテ適當ト認ムル二人以上ノ保證人ヲ定メシムルコトヲ得

保證人ハ移民ノ疾病其ノ他困難ノ場合ニ於テ之ヲ救助シ若ハ歸國セシムヘシ又行政廳ニ於テ移民ヲ救助シ若ハ歸國セシメタルトキハ其ノ費用ヲ辨償スヘシ

第四條 行政廳ハ移民保護ノ爲若ハ公安保持ノ爲又ハ外交上必要ト認ムルトキハ移民渡航ヲ差止メ又ハ其ノ許可ヲ取消スコトヲ得

渡航差止中ノ日數ハ第二條第二項ノ期間ニ算入セス

第二章 移民取扱人

第五條 本法ニ於テ移民取扱人ト稱スルハ何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス移民ヲ募集シ又ハ其ノ渡航ハ周旋スルヲ以テ營業ト爲ス者ヲ謂フ

第六條 移民取扱人タラムト欲スル者ハ行政廳ノ許可ヲ受クヘシ

移民取扱人ノ許可ハ其ノ許可ノ日ヨリ六箇月以内ニ營業ヲ開始セサルトキハ效力ヲ失フモノトス

第七條 帝國臣民又ハ帝國臣民ノミナ社員若ハ株主トスル商事會社ニシテ帝國ニ於テ主タル營業所ヲ有スルモノニ非サレハ移民取扱人タルコトヲ得ス

前項ノ外移民取扱人ニ要スル資格ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第八條 行政廳ハ移民取扱人ノ行爲法律命令ニ違反シタルトキ若ハ公安ヲ害スルモノト認ムルトキ又ハ移民取扱人保證金ノ納付ヲ遲滞シタルトキハ其ノ營業ヲ停止シ又ハ營業ノ許可ヲ取消スコトヲ得

第九條 移民取扱人ハ營業ヲ停止セラレ又ハ休業シタルトキト雖既ニ渡航セシメタル移民ニ對シ契約ノ履行ヲ中止スルコトヲ得ス

第十條 移民取扱人代理人ヲ定メ其ノ業務ヲ行ハシムルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ行政廳ノ許可ヲ受クヘシ

第十一條 移民取扱人ハ業務擔當社員若ハ取締役又ハ代理人ヲ在留セシメサル地ニ移民ヲ渡航セシムルコトヲ得ス

第十二條 移民取扱人ハ移民トシテ渡航スル者ニ非サレハ其ノ周旋又ハ募集ヲ爲スコトヲ得ス

第十三條 移民取扱人渡航ノ周旋又ハ募集ヲ爲ストキハ移民ト書面契約ヲ爲シ行政廳ノ認可ヲ受クヘシ

前項契約ニ必要ナル條件ハ命令ノ定ムル所ニ依ル

第十四條 移民取扱人ハ前條認可ヲ受ケタル書面契約ニ定ムル所ノ渡航周旋料若ハ手数料ノ外何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス移民ヨリ金錢又ハ物品ヲ受クルコトヲ得ス

第十五條 移民取扱人移民ヲ募集スルトキハ出發セシムヘキ期日ヲ豫定シテ之ヲ示スヘシ移民取扱人正當ノ理由ナクシテ豫定ノ期日内ニ移民ヲ出發セシメサルトキハ其ノ出發延期ノ爲ニ生スル移民ノ費用ヲ負擔スヘシ

第三章 保證金

第十六條 移民取扱人ハ行政廳ニ保證金ヲ納付シタル後ニ非サレハ其ノ營業ヲ開始スルコトヲ得

保證金額ハ一萬圓以上トシ行政廳之ヲ定ム

第十七條 行政廳ハ必要ト認ムルトキハ保證金額ヲ増減スルコトヲ得但前條ノ金額以下ニ下スコトヲ得ス

第十八條 行政廳ニ於テ移民取扱人移民ニ對シ契約ヲ履行セスト認メタルトキハ保證金ヨリ其ノ費用ヲ支出シテ移民ヲ救助シ又ハ歸國セシムルコトヲ得

第十九條 移民取扱人死亡、解散、營業許可ノ取消又ハ其ノ理由ニ依リ營業ヲ廢止スルモ保證金ハ行政廳ニ於テ領置ノ必要アリト認ムル間ハ其ノ全部又ハ一部ヲ還付セサルコトヲ得

第二十條 移民取扱人營業中及前條行政廳ニ於テ保證金領置ノ必要アリト認ムル間ハ移民又ハ其ノ相續人カ本法ニ從ヒタル契約ニ基キ權利ヲ執行スル場合ノ外何人ト雖保證金ニ對シテ債權取立ヲ爲スコトヲ得ス

第四章 罰則

第二十一條 渡航ノ許可ヲ受ケス又ハ渡航地ヲ詐リテ許可ヲ受ケ又ハ渡航差止命令ニ違反シテ渡航シタル移民ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條 法律命令ニ違反シタル移民ハ渡航ヲ周旋シ又ハ渡航差止中ニ移民ヲ渡航セシメタル移民取扱人及代理人ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 行政廳ノ許可ヲ受ケスシテ移民取扱人ノ行爲ヲ爲シタル者又ハ營業停止中ニ移民ヲ募集シ又ハ其ノ渡航周旋ヲ爲シタル移民取扱人及代理人ハ二百圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十四條 移民取扱人行政廳ノ許可ヲ受ケサル代理人ヲシテ其ノ行爲ヲ爲サシメタルトキハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ行爲ヲ爲シタル代理人亦同シ

第二十五條 第十一條、第十二條、第十三條、第十四條及第十六條第一項ニ違反シタル移民取扱人及代理人ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 誘惑ノ手段ヲ以テ移民ヲ募集シ若ハ渡航ノ周旋ヲナシタル移民取扱人及代理人ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二十七條 本法ノ罰則ハ商事會社ニ在テハ其ノ各條ニ掲グル行爲ヲ爲シタル業務擔當社員又ハ取締役ニ之ヲ適用ス

第五章 附 則

第二十八條 本法施行以前ヨリ當該官廳ノ許可ヲ受ケ營業スル移民取扱人ハ本法施行ノ際別ニ許可ヲ受クルヲ要セス本法ノ規程ニ依リ其ノ營業ヲ繼續スルコトヲ得但其ノ營業ヲ繼續セサルトキト雖其ノ既ニ納付シタル保證金ニ對シテハ仍本法ノ規程ヲ適用ス

第二十九條 本法ノ帝國ト締結シタル特別ノ條約ニ基キ渡航スル移民及其取扱人ニ適用セス

第三十條 本法施行ノ爲ニ必要ナル細則ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十一條 本法ハ明治二十九年六月一日ヨリ施行ス

明治二十七年勅令第四十二號移民保護規則ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

移民保護法施行細則左ノ通相定ム

移民保護法旅行細則 (明治二十九年五月內務省令第三號)

移民保護法施行細則

第一條 移民保護法第一條ニ掲クル労働ノ種類ヲ定ムルコト左ノ如シ

一 耕作、栽培、牧畜、漁業、鑛業、製造、土木、運搬、建築等ニ從事シ勞力ヲ供スル者

二 炊事、洗濯、裁縫、給事、看病等ノ爲メ家事ニ使役セララル者

第二條 渡航ノ許可ヲ受ケント欲スル移民ハ渡航地名、渡航ノ目的及渡航年限ヲ詳記シ原籍地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)ニ出願スヘシ

前項ノ移民ニシテ移民取扱人ニ依ル渡航願書ニ移民取扱人ヲシテ連署セシメ且ツ契約書ヲ提示スヘシ移民取扱人ニ依ラサル者ニシテ保證人ヲ要スル地ニ渡航スルトキハ渡航願書ニ保證人ヲ連署セシメ且ツ保證書ヲ提示スヘシ

第三條 移民保護法第三條ニ依リ保證人ヲ定メシムヘキ場合ハ外務大臣之ヲ告示スヘシ

第四條 移民保護法第三條ニ掲クル保證人ハ其ノ原籍地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)ニ於テ適當ノ認ムル者ニ限ル

第五條 移民取扱人タラント欲スル者ハ左ノ事項ヲ詳記シ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)ヲ經由シ外務大臣ニ出願スヘシ但合名會社ニ於テハ各社員ヨリ、合資會社ニ於テハ業務擔當社員ヨリ株式會社ニ於テハ發起人ヨリ出願スヘシ(明治三十年十月外務省令第四號ヲ以テ本條改正)

一 營業所

二 營業資本金額

三 營業年限ヲ定ムルモノハ其ノ年限

四 移民ヲ渡航セシムヘキ土地

五 移民ノ種類

六 取扱フヘキ移民ノ豫定人員

七 移民ノ渡航前後ニ於ケル周旋ノ方法

八 出願者ノ履歷

九 合名會社ニ於テハ各社員ノ財産、合資會社ニ於テハ各社員ノ出資額及無限責任社員ノ財産、株式會社ニ於テハ株式ノ總數及一株ノ金額並發起人各自ノ引受クル株數及財産、會社ニアラサルモノニ於テハ營業主ノ財産

移民取扱人ノ營業ヲ相續シ若クハ讓受ケントスル者モ亦本條ノ規定ニ依ルヘシ

第六條 移民取扱人營業開始ノ後前條ニ掲クル第二第四第五第六第七ノ事項ヲ變更シ又ハ主タル營業所ヲ他ノ廳府縣ニ移轉セントスルトキハ前條ノ手續ニ準シ許可ヲ受クヘシ

第七條 移民取扱人ハ左ノ事項ヲ十日以内ニ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)ヲ經由シ外務大臣ニ届出ツヘシ(同上)

一 開業シタルトキハ其ノ年月日

二 株式會社設立ノ後取締役ノ氏名住所

三 商社會社ニシテ無限責任社員若クハ取締役ニ變更アリタルトキ其ノ氏名住所但無限責任社員ニ關シテハ其ノ履歷書及財産調書ヲ添フヘシ

四 同一廳府縣内ニ於ケル主タル營業所ノ移轉

五 支店若クハ出張所ノ廢置移轉

六 營業年限ノ變更

第八條 外務大臣ニ於テ不適當ト認メタル者若クハ左ノ事項ノ一ニ該當スル者ハ移民取扱人又ハ代理人タルコトヲ得ス(同上)

- 一 瘋癲白痴ノ者
- 二 公權ヲ剝奪セラレタル者
- 三 公權停止中ノ者
- 四 破産者クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第九條 移民保護法第十一條ニ依リ業務擔當社員若クハ取締役又ハ代理人ヲ移民ノ渡航地ニ在留セシムルトキハ其ノ氏名及在留地ヲ詳記シ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)及其ノ在留地ヲ管轄スル在外帝國官廳ニ届出ツヘシ

第十條 移民保護法第十三條ニ掲グル書面契約ニ對シ認可ヲ受ケント欲スルトキハ其ノ契約書全文ニ移民ヲ渡航セシムヘキ土地ノ情況ヲ記載シタル書類ヲ添ヘ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)ニ差出スヘシ

- 前項契約書ニハ左ノ事項ヲ缺クコトヲ得ス
- 一 契約期限
- 二 渡航周旋料若クハ手数料
- 三 渡航及歸航費用ノ支辨方
- 四 渡航地ニ於ケル周旋ノ方法

五 疾病其ノ他困難ノ場合ニ於テ救助又ハ歸國ノ手續

第十一條 當該官廳ヨリ移民保護法第十三條ニ掲グル契約書ヲ示スヘキコトヲ命シタルトキハ移民及移民取扱人ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十二條 移民取扱人移民保護法第十五條ニ依リ豫定シタル移民ノ出發期日ヲ移民ニ通知スルトキハ書面ヲ以テスルコトヲ要ス

第十三條 移民保護法第十六條ニ掲グル保證金ハ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)ニ納付スヘシ

前項保證金額及其ノ増減ハ外務大臣之ヲ定ム(同上法令ニテ本項改正)

第十四條 移民取扱人ノ納付スヘキ保證金ハ其ノ全額三分ノ二以内ニ於テ國債證券ヲ以テ現金ニ代用スルコトヲ得

前項國債證券ノ價格ハ其ノ納付ヲ受クヘキ官廳ノ定ムル所ニ依ル

第十五條 主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)ハ移民取扱人ノ保證金増額ヲ追納セシメ若クハ缺損ヲ填補セシムル場合ニ於テ一箇月以内ノ猶豫ヲ與フルコトヲ得

第十六條 移民取扱人代理人ヲ定メ其ノ許可ヲ受ケント欲スルトキハ其ノ事項ヲ詳記シタル書類ヲ添附シ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)ヲ經由シ外務大臣ニ出願スヘシ(同上法令ニテ本條改正)

- 一 代理ニ關スル條件
- 二 代理人ノ履歷
- 三 代理人ノ財産

第十七條 代理人ニシテ其ノ業務ヲ行フトキハ代理人タルノ許可證ヲ携帶スヘシ移民取扱人外國

ニ在留スル者ヲ代理人ニ定メ其ノ許可證代理人ニ到達スル以前ニ業務ヲ行ハシムル必要アルトキハ移民取扱人ノ費用ヲ以テ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)ヲ經由シ其

ノ在留スヘキ地ヲ管轄スル在外帝國官廳ニ届出ツヘシ
第十八條 移民取扱人移民ニ關シ別ニ他人ト契約ヲ爲シタルトキハ該契約書寫ヲ添ヘ其ノ旨ヲ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)及其ノ移民ノ在留地ヲ管轄スル在外帝國官廳ニ届出ツヘシ

第十九條 移民取扱人移民ノ身上ニ異變ヲ生セシ報告ニ接シタルトキハ直ニ其ノ旨ヲ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)及其ノ移民ノ在留地ヲ管轄スル在外帝國官廳ニ届出ツヘシ

第二十條 移民取扱人移民ヲ渡航セシムルトキハ移民ノ出發ト同時ニ移民ノ氏名ヲ明記シタル届書ニ契約書寫ヲ添ヘ其ノ移民ノ在留地ヲ管轄スル在外帝國官廳ニ送付スヘシ
前項契約書寫ハ同一條件ニ係ルモノハ其ノ寫一通ヲ以テ足レリトス

第二十一條 移民ノ渡航地ニ在留スル業務擔當社員若クハ取締役又ハ代理人ハ移民名簿ヲ備ヘ移民ノ就業地雇主ノ氏名ヲ明記シ當該官廳ヨリ命令アルトキハ何時ニテモ之ヲ示スヘシ

第二十二條 移民ノ渡航地ニ在留スル業務擔當社員若クハ取締役又ハ代理人ハ他國ニ轉住スヘキ移民アルトキハ其ノ在留地及轉住地ヲ管轄スル在外帝國官廳ニ届出ツヘシ
第二十三條 移民取扱人ハ左ノ書式ニ依リ調製シタル渡航者名簿ヲ翌月五日マテニ歸國者名簿及

死亡者名簿ヲ翌年一月二十五日マテニ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官(東京府ハ警視總監)ニ届出ツヘシ
(渡航者名簿、歸國者名簿、死亡者名簿、畧之)

第二十四條 渡航ノ目的又ハ渡航年限ヲ詐リテ渡航ノ許可ヲ受ケタル者竝第六條第十一條第十二條第十七條第二十一條及第二十三條ニ違反シタル者ハ五圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十五條 第七條第九條第十八條第十九條第二十條第一項及第二十二條ニ違反シタル者ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス
附則

第二十六條 本令ニ於テ在外帝國官廳ト稱スルハ在外帝國領事館又ハ貿易事務館及領事館貿易事務館ナキ地ニ於テハ其ノ地ヲ管轄スル帝國公使館ヲ謂フ
第二十七條 本令ハ明治二十九年六月一日ヨリ施行ス
明治二十七年外務省令第六號移民保護規則施行細則ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

北海道移住民規則 (明治三十年四月拓殖務省令第五號)

北海道移住民規則左ノ通り定ム

第一條 開墾ノ目的ヲ以テ團結規約ヲ締結シ北海道ニ移住シ土地ノ貸付ヲ出願セントスル者ハ現住地ノ府縣知事ニ出願シテ證明ヲ受クルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ出願スルトキハ左ノ事項ヲ掲記シ府縣知事ニ差出スヘシ

- 一 事業ノ目的(開墾牧畜植樹等)
 - 二 貸付出願ノ地積
 - 三 移住ノ戸口
 - 四 從來ノ職業
 - 五 總代人ヲ設ケタルトキハ其ノ氏名
 - 六 移住後ニ於ケル鄰保ノ方法ヲ設ケタルトキハ其ノ方法
 - 七 移住旅費家屋農具衣食等ノ準備並ニ支出ノ方法
 - 八 小作ノ方法ニ依ル場合ハ前各項ノ外小作契約
- 第三條 第一條ノ出願アリタルトキハ府縣知事ハ之ヲ調査シ確實ト認ムルモノニ限り證明ヲ與フヘシ
- 第四條 前條ノ證明ヲ受ケタル者ノ爲ニ北海道廳長官ハ別ニ定メタル規程ニ從ヒ其ノ出願ニ依リ開墾地ノ豫定存置ヲ爲スコトアルヘシ
- 第五條 證明ヲ受ケタル後六箇月ヲ經過シタルトキハ豫定存置ノ出願ヲ爲スコトヲ得ス
- 第六條 北海道廳ノ下付シタル土地貸付ノ指令書若ハ北海道廳長官又ハ北海道ニ於ケル郡區長ノ證明書ヲ有スル本人又ハ代理人ニアラサレハ府縣ニ於テ北海道ニ移住スヘキ小作人ヲ募集シ又ハ小作人ヲシテ北海道ニ移住セシムルコトヲ得ス
- 第七條 當該官吏又ハ市町村吏員ヨリ前條ノ指令書若ハ證明書ヲ示スヘキコトヲ命シタルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス
- 第八條 第六條第七條ニ違背シタル者ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第九條 第六條ニ依ル小作人ノ募集又ハ移住ヲ妨害シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

臺灣外國行旅券規則 (明治三十年一月臺灣總督府令第二號)

外國行旅券規則左ノ通相定ム

外國行旅券規則

- 第一條 臺灣ヨリ直ニ外國ニ渡航セントスル帝國臣民ニシテ旅券ヲ請フ者ハ左ノ書式ニ依リ所轄縣廳若ハ島廳ヘ願出ツヘシ
- 族券ハ一人一枚ニ限ル但父母ト同道スル五歳以下ノ小兒ハ其父母ノ族券ニ附記ス
- 第二條 旅券ヲ受クル者ハ手数料トシテ金五十錢ヲ納ムヘシ
- 族券ヲ受取リタルトキハ其指定ノ箇所ニ當人ノ氏名ヲ自記スヘシ
- 第三條 臺灣ニ於テ旅券ヲ受取ル間合ナキカ又ハ外國ニ於テ之ヲ遺失シタルトキハ渡航地ニ在ル帝國公使館若ハ領事館ヘ其趣ヲ記載セル書面ヲ差出シ自身出頭シテ旅券ヲ願受クルコトヲ得
- 第四條 公用ヲ以テ外國ヘ旅行スル者ノ族券ハ當該官廳ヨリ直ニ臺灣總督府民政局ニ請求シ外國ニ於テハ帝國公使館若ハ領事館ヘ自身出頭シテ之ヲ請求スヘシ但手数料ハ納ムルニ及ハス
- 第五條 所持ノ族券渡航セントスル國ノ公使又ハ領事ノ證明ヲ要スルトキハ豫メ其館ニ就テ之ヲ請求スヘシ但其定規ニ從ヒ手数料ヲ拂フヘシ
- 第六條 外國ニ在リテ所持ノ族券帝國領事ノ證明ヲ要スルトキハ最寄帝國領事館ニ赴キ之ヲ請フヘシ領事館ナキ地ニ於テハ帝國公使館ニ到リテ之ヲ請フヘシ

第七條 不正ノ營業ヲ目的トシテ外國ニ渡航セント認メラルル者若クハ旅行セントスル地ノ國法ニ違反シテ渡航ヲ企ツル者ニハ旅券ヲ下附セス

第八條 旅券ハ歸國ノ後三十日以内ニ其最初受取リタル官廳ヘ之ヲ返納スヘシ但郵船等ノ海員ニシテ常ニ旅券ヲ要スル者ハ此限ニアラス

外國ニ在リテ帝國公使館若ハ領事館ヨリ受取リタル旅券ハ臺灣總督府民政局ニ返納スヘシ

第九條 清國諸港香港澳門及比律賓島ヘ商用其他私用ノ爲數次往復スル者ニ限リ滿三箇年間有效ノ旅券交附ヲ願出ツルコトヲ得但滿期トナリテ猶往復スル者ハ新旅券ノ引換ヲ願出ツヘシ

(書式ハ之ヲ略ス)

臺灣住民内地渡航證規則

(明治三十年四月臺灣總督府令第十六號)

臺灣住民内地渡航證規則左ノ通相定ム

臺灣住民内地渡航證規則

第一條 日本帝國臣民タル臺灣住民ニシテ内地ニ渡航スル者ハ渡航證ヲ携帶スヘシ但父母ト同道スル五歳以下ノ小兒ハ其母ノ渡航證ニ附記ス

第二條 渡航證ノ下附ヲ受ケントスル者ハ所轄警察官署若ハ憲兵官衙ノ身分證明書ヲ添ヘ願書ニ渡航ノ目的並旅行セントスル地方ヲ記載シ管轄地方廳ニ願出ツヘシ

渡航證ヲ受取リタルトキハ其指定ノ箇所ニ本人ノ氏名ヲ自記スヘシ

第三條 渡航證ハ他人ニ之ヲ交附スルコトヲ得ス

第四條 渡航證ヲ遺失毀損シタルトキハ直ニ其旨ヲ最初受取リタル官廳ヘ届出ツヘシ

前項ノ場合ニ於テハ渡航證ノ再下附又ハ引換ヲ請フコトヲ得

第五條 渡航證ヲ所持スル者内地ニ渡航スルコトヲ止メ又ハ内地ヨリ歸航シタルトキハ直ニ其最初受取リタル官廳ヘ之ヲ返納スヘシ

渡航證ヲ所持スル者死亡シタルトキハ其遺族ヨリ直ニ之ヲ返納スヘシ

第六條 第三條第四條第五條ノ規定ニ違フ者ハ二十五圓以下ノ罰金ニ處ス渡航證ヲ遺失シタリト詳稱シ其再下附ヲ請ヒタル者亦同シ

第七條 渡航證ノ雛形左ノ如シ

(雛形略之)

戶籍旅行及移住終

第二十七類 曆及度量衡

改曆 (明治五年十一月第三百三十七號布告)

今般改曆ノ儀別紙 詔書ノ通被仰出候條此旨相違候事

(別紙)

詔書寫

朕惟フニ我邦通行ノ曆タル太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ太陽ノ躡度ニ合ス故ニ二三年間必ス閏月ヲ置カサルヲ得ス置閏ノ前後時ニ季候ノ早晚アリ終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル殊ニ中下段ニ搦ル所ノ如キハ率子妄誕無稽ニ屬シ人知ノ開達ヲ妨ルモノ少ナシトセス蓋シ太陽曆ハ太陽ノ躡度ニ從テ月ヲ立ツ日子多少ノ異アリト雖モ季候早晚ノ變ナク四歲毎ニ一日ノ閏ヲ置キ七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス之ヲ太陰曆ニ比スレハ最モ精密ニシテ其便不便モ固リ論ヲ俟タサルナリ依テ自今舊曆ヲ廢シ太陽曆ヲ用ヒ天下永世之ヲ遵行セシメン百官有司其レ斯旨ヲ體セヨ

明治五年壬申十一月九日

一今般太陰曆ヲ廢シ太陽曆御頒行相成候ニ付來ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト被定候事
但新曆鐵板出來次第頒布候事

一一箇年三百六十五日十二箇月ニ分チ四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事

一時刻ノ儀是迄晝夜長短ニ隨ヒ十二時ニ相分チ候處今後改テ時辰儀時刻晝夜平分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄十二時ニ分チ午前幾時ト稱シ午刻ヨリ子刻迄十二時ニ分チ午後幾時ト稱候事
一時鐘儀來ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事但是迄時辰儀時刻ナ何字ト唱來候處以後何時ト可稱事

一 諸祭典等舊曆月日ヲ新曆月日ニ相當シ施行可致事

太陽曆 一年三百六十五日 閏年三百六十六日(四年毎ニ置之)

一月大	三十一日	其一日	即舊曆壬申	十二月三日
二月小	二十八日(閏年二十九日)	其一日	同	正月 四日
三月大	三十一日	其一日	同	二月 三日
四月小	三十日	其一日	同	三月 五日
五月大	三十一日	其一日	同	四月 五日
六月小	三十日	其一日	同	五月 七日
七月大	三十一日	其一日	同	六月 七日
八月大	三十一日	其一日	同	閏六月九日
九月小	三十日	其一日	同	七月 十日
十月大	三十一日	其一日	同	八月 十日
十一月小	三十日	其一日	同	九月 十二日
十二月大	三十一日	其一日	同	十月 十二日

大小毎年替ルコトナシ

時刻表

午前	零時	即午後十二時	子刻	一時	子半刻	二時	丑刻	三時	丑半刻
	四時	寅刻	五時	寅半刻	六時	卯刻	七時	卯半刻	

右之通被定候事

午後	八時	辰刻	九時	辰半刻	十時	巳刻	十一時	巳半刻
	十二時	午刻						
	一時	午半刻	二時	未刻	三時	未半刻	四時	申刻
	五時	申半刻	六時	酉刻	七時	酉半刻	八時	戌刻
	九時	戌半刻	十時	亥刻	十一時	亥半刻	十二時	子刻

頒 曆

(明治三年四月布告)

頒曆授時之儀ハ至重之典章ニ候處近來種種之類曆世上ニ流布候趣無謂事ニ候自今弘曆者之外取扱候儀一切嚴禁被仰出候事

弘曆者ヲ定メ一枚摺略曆一般出版ヲ許ス

(明治十五年四月第八號布達)

本曆並畧本曆ハ明治十六年曆ヨリ伊勢神宮ニ於テ頒布セシムヘシ
一枚摺畧曆ハ明治十六年曆ヨリ何人ニ限ラス「出版條例」ニ準據シ出版スルコトヲ得但明治九年(十月)内務省甲第三十九號布達ハ取消ス

◎一枚摺曆記載事項ノ件

(明治二十三年十月文部省令第二號)

明治十五年(四月)太政官八號布達二項ニ依リ出版スル處ノ一枚摺曆ハ自今左ノ規定ニ依ルヘシ

一 一枚摺曆ハ左ニ列記スル事項ニ限リ記載スルモノトス

一 年號及紀元ノ年數干支

一 毎月ノ一日

一 日月食並其時間

一 大祭祝日並神社例祭大祓

一 日曜表甲子表庚申表已巳表

一 二十四節氣及雜節

一 新月滿月

一 前各項ニ相當スル陰曆日干支及陰曆ノ朔日並之ニ相當スル陽曆日
以上ノ事項ハ帝國大學ニ於テ編纂スル所ノ曆ニ依ルヘシ但前各項規定ノ外本曆略本曆ニ摺
載セサル事項ヲ部入スルハ此限ニ在ラス

◎標準時

(明治二十八年十二月勅令第六十七號)

朕標準時ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 帝國從來ノ標準時ハ自今之ヲ中央標準時ト稱ス

第二條 東經百二十度ノ子午線ノ時ヲ以テ臺灣及澎湖列島並八重山島及宮古列島ノ標準時ト定メ

之ヲ四部標準時ト稱ス

第三條 本令ハ明治二十九年一月一日ヨリ施行ス

◎度量衡法

(明治二十四年三月法律第三號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル度量衡法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
度量衡法

第一條 度量ハ尺、量ハ貫ヲ以テ基本トス

第二條 度量衡ノ原器ハ白金「イリヂウム」合金製ノ棒及分銅トス其ノ棒ノ面ニ記シタル標線間
ノ攝氏〇、一五度ニ於ケル長サ三十三分ノ十ヲ尺トシ分銅ノ質量四分ノ十五ヲ貫トス

第三條 度量衡ノ名稱命位ヲ定ムルコト左ノ如シ
度

毛 尺ノ萬分ノ一

厘 尺ノ千分ノ一

分 尺ノ百分ノ一

寸 尺ノ十分ノ一

尺

丈 十尺

間 六尺

町 三百六十尺(六十間)

里 一萬二千九百六十尺(三十六町)

地積

勺 歩ノ百分ノ一

合 歩ノ十分ノ一

步或ハ坪 六尺平方

畝 三十歩

段 三百歩

町 三千歩

量

勺 升ノ百分ノ一

合 升ノ十分ノ一

升 六萬四千八百二十七立方分

斗 十升

石 百升

衡

毛 貫ノ百萬分ノ一

厘 貫ノ十萬分ノ一

分 貫ノ萬分ノ一

忽 貫ノ千分ノ一

斤 百六十忽

第四條 從來慣用ノ鯨尺ハ布帛ヲ度ルトキニ限り之ヲ用井ルコトヲ得

鯨尺一尺ハ一尺二寸五分トシ其ノ十倍ヲ鯨尺一丈、十分ノ一ヲ鯨尺一寸、百分ノ一ヲ鯨尺一分トス

第五條 「メートル」法度量衡ハ左ニ掲クル比較ニ依リ之ヲ適法ノモノトシ本條以下ノ規定ヲ適用ス

度

毛 $\left\{ \begin{array}{l} \text{メートル} \\ 〇、〇〇〇〇三 \\ (三萬三千分ノ一) \end{array} \right.$

「ミリメートル」 〇、〇〇三三三〇

厘 $\left\{ \begin{array}{l} 〇、〇〇〇三〇 \\ (三萬三千分ノ十) \end{array} \right.$

「センチメートル」 〇、〇三三三〇〇

分 $\left\{ \begin{array}{l} 〇、〇〇三〇三 \\ (三萬三千分ノ一) \\ 〇、〇三〇三〇 \\ (三萬三千分ノ一) \end{array} \right.$

「デシメートル」 〇、三三三〇〇〇

寸 $\left\{ \begin{array}{l} 〇、〇三〇三〇 \\ (三萬三千分ノ一) \end{array} \right.$

「メートル」 三、三三〇〇〇〇

尺 $\left\{ \begin{array}{l} 〇、三〇三〇三 \\ (三萬三千分ノ一) \end{array} \right.$

「デカメートル」 三三、三〇〇〇〇〇

丈 $\left\{ \begin{array}{l} 三、〇三〇三〇 \\ (三萬三千分ノ十) \end{array} \right.$

「ヘクトメートル」 三三三、〇〇〇〇〇〇

間 町 里 地積 勺 合 步 (或ハ坪) 畝 段 町 量

間 { 一、八一八二八
(十一分ノ二十) }
町 { 一〇九、〇九〇九一
(十一分ノ一千二百) }
里 { 三九二七、二七二七三
(十一分ノ四萬三千二百) }
地積 { 〇、〇〇〇三三
(三千〇二十五分ノ二) }
勺 { 〇、〇〇三三一
(三千〇二十五分ノ十) }
合 { 〇、〇三三〇六
(三千〇二十五分ノ一百) }
步 (或ハ坪) { 〇、九九一七四
(三千〇二十五分ノ三千) }
畝 { 九、九一七三六
(三千〇二十五分ノ三萬) }
段 { 九、九一七三六
(三千〇二十五分ノ三萬) }
町 { 九、九一七三六
(三千〇二十五分ノ三萬) }
量 { 三、七五〇〇〇 }
{ 三、七五〇〇〇 }

「キロメートル」 三三〇〇、〇〇〇〇〇
「センチメートル」 〇、三〇二五〇
「アール」 三〇、二五〇〇〇
「ヘクタール」 三〇二五、〇〇〇〇〇

勺 合 升 斗 石 衡 毛 厘 分 忽

勺 { 〇、〇一八〇四
(十三萬三千一百分ノ二) }
合 { 〇、一八〇三九
(十三萬三千一百分ノ二) }
升 { 一、八〇三九一
(十三萬三千一百分ノ二) }
斗 { 一、八〇三九〇七
(十三萬三千一百分ノ二) }
石 { 一八〇、三九〇六八
(十三萬三千一百分ノ二) }
衡 { 一、八〇三九〇七
(十三萬三千一百分ノ二) }
毛 { 一、八〇三九〇七
(十三萬三千一百分ノ二) }
厘 { 一、八〇三九〇七
(十三萬三千一百分ノ二) }
分 { 一、八〇三九〇七
(十三萬三千一百分ノ二) }
忽 { 一、八〇三九〇七
(十三萬三千一百分ノ二) }

「センチリットル」 〇、〇〇五五四
{ 〇、〇〇五五四 }
「デシリットル」 〇、〇五五四
{ 〇、〇五五四 }
「リットル」 〇、五五四三五
{ 〇、五五四三五 }
「デカリットル」 五、五四三五二
{ 五、五四三五二 }
「ヘクトリットル」 五五、四三五四
{ 五五、四三五四 }
「ミリグラム」 〇、〇〇〇二七
{ 〇、〇〇〇二七 }
「センチグラム」 〇、〇〇二六七
{ 〇、〇〇二六七 }
「デシグラム」 〇、〇二六六七
{ 〇、〇二六六七 }
「グラム」 〇、二六六六七
{ 〇、二六六六七 }

「グラム」 〇、二六六六七
{ 〇、二六六六七 }
「デシグラム」 〇、〇二六六七
{ 〇、〇二六六七 }
「センチグラム」 〇、〇〇二六七
{ 〇、〇〇二六七 }
「ミリグラム」 〇、〇〇〇二七
{ 〇、〇〇〇二七 }

貫 三七五〇、〇〇〇〇

「デカグラム」

(二、六六六六七)

「ヘクトグラム」

(二六、六六六六七)

「キログラム」

(二六六、六六六六七)

斤 六〇〇、〇〇〇〇

(一萬五千分ノ四萬)

第六條 度量衡ノ原器ハ農商務大臣之ヲ保管ス

農商務大臣ハ度量衡ノ原器ニ依リ副原器ニ組テ製作セシメ原器ノ代用ニ供ス

副原器ノ一組ハ農商務大臣之ヲ保管シ他ノ一組ハ文部大臣之ヲ保管ス

第七條 農商務大臣ハ副原器ニ依リ地方原器ヲ製作セシムヘシ

地方原器ハ地方長官之ヲ保管シ度量衡器檢定ノ標準ニ供スルモノトス

第八條 度量衡器ヲ製作シ修覆シ若ハ販賣セント欲スル者ハ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ニ願出

免許ヲ受クヘシ

製作ノ免許ヲ得タル者ハ修覆及販賣ヲナスコトヲ得

販賣ノ免許ヲ得タル者ハ桿秤ヲ取締及錘絲ニシテ金屬ニアラサルモノニ限り修覆ヲ爲スコトヲ

得(明治二十六年法律第三號ヲ以テ本項追加)

免許ニ關スル年限身元保證金其ノ他必要ナル制限ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 度量衡器ヲ製作シ修覆シ若ハ輸入シテ販賣シ又ハ營業ノ目的ニ使用スル者ハ豫メ其ノ檢

定ヲ受クヘシ

營業ノ目的ニ使用スル度量衡器ハ前項檢定ノ外之ヲ修覆シタルトキ及定期間ニ於テ檢定ヲ受ク

ヘシ

製作者、修覆者及販賣者桿秤ノ取締及錘絲ニシテ金屬ニアラサルモノノ修覆ヲ爲シタルトキハ
其ノ檢定ヲ受クルコトヲ要セス(同上)

官廳、公署、官立、公立ノ諸建設場又ハ貧院、病院其ノ他之ニ類スル建設場ニ於テ販賣、授受
及證明ノ爲ニ使用スル度量衡器ハ營業ノ目的ニ使用スルモノニ準ス

第十條 度量衡器ノ種類、形狀、物質、檢定ノ定期及公差、檢定スヘキ目盛及分銅ノ最小定限ハ
勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條 度量衡器ノ檢定及取締ハ地方長官之ヲ管理ス

地方長官ハ市長町村長ヲシテ其ノ市村町内ニ於ケル度量衡器ノ取締ヲ行ハシメ及其ノ檢定ニ關

スル事務ヲ補助セシムルコトヲ得

第十二條 度量衡器ノ製作者、修覆者、販賣者及使用者ハ取締ノ爲ニ行フ當該吏員ノ臨檢ヲ拒ム

コトヲ得ス但吏員ハ主任タルノ證票ヲ携帯シテ之ヲ示スヘシ

第十三條 度量衡器ノ製作、修覆及販賣ノ免許ヲ受クル者ハ免許料ヲ、檢定ヲ受クル者ハ檢定料

ヲ納ムヘシ

免許料及檢定料ノ金額ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條 度量衡器ノ製作者、修覆者若ハ販賣者ニシテ度量衡ニ關スル法律命令ニ違背シタルト

キハ農商務大臣ハ其ノ營業免許ヲ取消スコトヲ得

第十五條 免許ヲ受ケスシテ度量衡器ヲ製作シ若ハ修覆シテ販賣シタル者ハ二十圓以上三百圓以

下ノ罰金ニ處ス

免許ヲ受ケスシテ度量衡器ヲ販賣シ又ハ檢定ヲ受ケサル度量衡器ヲ販賣シ若ハ之ヲ營業ノ目的

ニ使用シ及吏員ノ臨檢ヲ拒ミタル者ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
差狂アル度量衡器ナルコトヲ知テ之ヲ販賣シ又ハ營業ノ目的ニ使用シタル者亦前項ニ同シ
第十六條 本法施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附 則

第十七條 本法ハ明治二十六年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十八條 度量衡器ノ製作ニ限リ本法施行前六箇月以内ニ之ヲ免許スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ
ハ本法中製作ニ關スル條項ハ之ヲ適用ス

第十九條 從來度量衡製作者及賣捌ノ免許ヲ受ケタル者ハ更ニ免許ヲ受ケルコトヲ要セス本法ノ
規定ニ從ヒ其ノ營業ヲ繼續スルコトヲ得

第二十條 從來ノ度量衡器ハ本法施行ノ日ヨリ七箇年以内ニ本法ノ規定ニ依リ其ノ檢定ヲ受ケヘ
シ檢定ヲ經サルモノハ其期限ヲ過クル後之ヲ販賣シ若ハ營業ノ目的ニ使用スルコトヲ得ス

第二十一條 從來ノ度量衡器ニシテ修覆シタルモノノ檢定ハ本法施行ノ日ヨリ七箇年ヲ限リ從來
ノ檢査規則ニ依ル

第二十二條 明治八年太政官第百三十五號達度量衡取締條例並檢査規則同九年第十七號布告度量
衡改定規則及西洋形權衡ニ係ル從來ノ法令ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス但度量衡取締條例附
屬檢査規則ハ前條ノ場合ニ限リ明治三十二年十二月三十一日マテ其ノ效力ヲ有ス

度量衡法施行規則

(明治二十四年八月農商務省令第十一號)

度量衡法施行規則左ノ通定ム

度量衡法施行規則

第一章 檢定

第一條 度量衡檢定所ハ常置特設ノ二トシ常置檢定所ニ於テハ製作、修覆若ハ營業ノ目的ニ使用
スル度量衡器ヲ檢定ス

常置檢定所ハ地方廳所在地ニ一箇所ヲ置キ特設檢定所ハ定期檢定ヲ施行スルトキ地方長官便宜
其場所ヲ指定スヘシ

前項特設檢定所ノ場所及檢定ノ期日ハ其檢定ヲ施行スル期日ヨリ少クモ一箇月以前ニ之ヲ告示
スヘシ(明治二十六年二月農商務省令第一號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

地方長官ニ於テ地方ノ狀況ニ依リ該所在地外ニ常置檢定所ヲ設置スヘキ必要アリト認ムルトキ
ハ農商務大臣ノ認可ヲ受ケヘシ

第二條 度量衡器ノ檢定ヲ受ケントスルトキハ製作、修覆若ハ輸入シタル者ハ左ノ甲號書式ニ營
業ノ目的ニ使用スル者ハ乙號書式ニ依リタル檢定請求書ニ明治二十四年勅令第百七十七號第九
號ニ定ムル檢定料相當ノ登記印紙ヲ貼用シ之ヲ器物ニ添ヘ度量衡檢定所ニ差出スヘシ
(度量衡器檢定請求書略之)

第三條 五分若ハ一「グラム」未滿ノ分銅ノ檢定ハ常置度量衡檢定所ニ於テ之ヲ行フ

第四條 檢定所ニ度量衡器ヲ差出シ難キトキハ其ノ事由及度量衡器ノ種類箇數等ヲ詳記シ特ニ其
ノ所在地ニ於テ檢定ヲ受ケンコトヲ地方長官ニ請求スルコトヲ得

地方長官前項ノ請求ヲ許可シタルトキハ請求者ハ檢定吏員ノ爲メニ成規ノ旅費日當其ノ他檢定
ニ要スル費用ヲ負擔シ檢定吏員ノ指示ニ從ヒ諸般ノ準備ヲナスヘシ但旅費其ノ他ノ費用ハ之ヲ

前納スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ第二條ノ請求書ヲ出張吏員ニ差出スヘシ

第五條 度量衡器ノ種類、形狀、物質、度器ノ目盛及分銅ノ最小定限並ニ公差ハ明治二十四年勅令第百七十七號第一條、第二條、第三條及第四條其ノ構造ハ本令第二章ノ規定ニ依リ檢定スヘシ

第六條 度量衡器ヲ檢査シタルトキハ其ノ合格ノモノニハ檢定ノ證印ヲ附シ證印ヲ附シ雖キモノニハ證書ヲ附シ、證印又ハ證書アルモノニシテ不合格ノトキハ之ニ消印ヲ附スヘシ
錘及増錘ハ其ノ初回ノ檢定ノ外合格スルモ證印ヲ附セス

第七條 證印、證書、消印及年號、廳府縣印ノ種類雜形ヲ定ムルコト左ノ如シ

(證印證書消印及年號印廳府縣印ノ種類雜形略之)

第八條 汚染、磨滅、毀損等ニ依リ證印證書ノ識別シ難キモノ又ハ證書ノ紛失シタルモノハ更ニ其ノ器ノ檢定ヲ受クヘシ

第二章 構造

第九條 度器ハ表面ニ其全長ヲ表記スヘシ但細帶狀ノ度器ニシテ圓ニ連結シタルモノハ其圓ニ表記スルモ妨ナシ
鏈狀ノ度器ハ其ノ一端ノ環ニ其ノ全長ヲ表記スヘシ
鋼鐵、革、麻布等ノ細帶狀度器ハ其ノ一端ニ眞鍮片ヲ附著シ檢印ヲ附スルノ便ニ供スヘシ(明治二十八年農商務省令第一號ニテ本項改正)

第十條 量器ハ外側ニ其ノ全量ヲ表記シ斗概ハ切口ニ其ノ種類ノ大中小ヲ表記スヘシ

第十一條 鐵葉ヲ以テ五合及一「リットル」以上ノ量器ヲ製作スルトキハ之ヲ二重ニスヘシ

第十二條 鐵、銅若ハ眞鍮ヲ以テ製作シタル量器ハ其ノ内面ニ錫又ハ白銅ヲ鍍著スヘシ

第十三條 木製ノ量器ハ銅板ヲ以テ口緣ヲ被フヘシ

一升及一「リットル」以上ノ木製ノ方形量器ニハ其ノ側及底ノ四隅ノ外面ニ鐵帶ヲ曲テ附加スヘシ其ノ圓形量器ニハ一箇又ハ交叉シタル二箇ノ鐵帶ヲ曲ケ其ノ側及底ノ外面ニ沿フテ附加スヘシ

酒、酢、醬酒、食鹽等ノ如キ鐵ヲ腐蝕スヘキ物料ヲ量ルニ用井ル量器ニハ其ノ鐵ニ錫又ハ白銅ヲ鍍著シ若ハ腐蝕セサル他ノ堅牢ナル物質ヲ以テ前二項ノ鐵ニ代フヘシ

鐵板又ハ鐵帶ヲ量器ニ附著スル螺旋釘ヲ以テシタルトキハ其ノ捻戻シヲナシ得サル丈ケ釘頭ヲ削去スヘシ

斗概ハ鐵葉ヲ以テ其ノ側面ヲ包ムヘシ但本條第三項ノ量器ニ附屬スル斗概ハ此限ニアラス

第十四條 量器ニハ注口、趾及把ヲ附スルコトヲ得

注口ヲ附スルトキハ其ノ容器ノ割合ニ應シ量器ノ深サヲ減スヘシ

注口ノ口面ハ量器ノ上面ト其高サヲ同一ニスヘシ但玻璃製ノモノハ此限ニアラス

第十五條 圓形量器ノ口徑ハ其ノ深サト同一ニスヘシ但金屬製一升及二「リットル」以下ノモノハ其ノ深サノ二分ノ一トスヘシ

第十六條 衡器ノ重點及支點ニハ銅鐵若ハ堅石ヲ用井緒紐ニハ金屬、革又ハ強韌ナル絹絲、麻絲等ヲ用井ルヘシ

第十七條 錘及増錘ノ物質ハ分銅ノ物質ト同一ノモノニ限ル但其ノ重量五十匁又ハ二百「グラム」